

あさひやま

旭山古墳群発掘調査報告

京都市埋蔵文化財研究所調査報告第5冊

1981

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序

研究所は、発足以来すでに四年余の歳月を経過したが、その間に京都市域内の遺跡を対象として、年間百件前後の発掘調査を実施してきた。調査規模は大小さまざまだが、中には調査結果が京都の歴史を解明する上で貴重な資料を提供した例も少なくない。この旭山古墳群の調査も、注目すべき成果を挙げた例の一つである。

旭山古墳群の調査は、花山火葬場改築に伴い、昭和52年(1977)9月から昭和53年(1978)8月まで、三次にわたって断続的に実施した。

また、研究所が、古墳群の調査に本格的な取り組みをした最初の例でもある。その後、大枝山古墳群の調査、双ヶ岡一号墳の調査など、古墳の調査例は次第に増加するが、その際、旭山古墳群調査の経験が生かされている。

なお、古墳群中の2基は石室を移築保存し、調査地全域を1/150の立体模型で公開展示するなど、遺跡の保存活用に成果が得られたことは、調査を担当した研究所としてまことによろこばしいことである。

おわりに、遺跡の調査をはじめ、石室移築、模型製作、報告書作成など、長期間にわたる事業に最後まで尽力を惜しまれなかった京都市衛生局の関係者の方々に対して、感謝の意を表します。

昭和56年3月18日

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



調査地全景（北から）

(1978・8・18 撮影)

例 言

- 1 遺構実測図のスケールは 1/30 である。(ただし、SK1 は 1:20、石列は 1:40 になる)
- 2 地形測量図は航空測量をもとに作製したものである。スケールは 1:200 である。
(ただし、PLAN. 15 は 1:800 になる)
- 3 土層断面図は、D-2 号墳・E-3・6・8 号墳のスケールは 1:30、他は 1:80 である。
- 4 遺物に付した番号は土器、金属製品、石器別に 1 から順に付けた。
- 5 遺物の実測図は、土器が現寸の 1:4、鉄器、石器は 1:2、古銭拓影は現寸である。
- 6 遺物の個々の形態の特徴、手法の特徴、焼成、胎土などは観察表に示した。
- 7 本報告書の Fig. 3 の地形図 (1:2,500 今熊野) は、京都市長の承認を得て調整・使用したものである。

目 次

第 I 章	調査経過	
1	調査に至る経緯	1
2	調査の経過	1
第 II 章	調査地の概況	
1	地理的環境	5
2	歴史的環境	5
第 III 章	遺 構	
1	古墳時代の遺構	11
2	古墳時代以降の遺構	35
第 IV 章	遺 物	
1	古墳時代の遺物	37
2	その他の時代の遺物	39
第 V 章	結 語	
1	発掘調査の成果	42
2	まとめ	45
第 VI 章	付 載	
1	木棺の復原	46
2	E-6 号墳の取り上げ保存について	50

図 版 目 次

巻首図版 遺跡 調査地全景（北から）

PLAN 1 遺跡 C-3 号墳石室実測図

PLAN 2 遺跡 C-5 号墳石室実測図

PLAN 3 遺跡 D-3 号墳石室実測図

PLAN 4 遺跡 D-4 号墳石室実測図

PLAN 5 遺跡 E-1 号墳石室実測図

PLAN 6 遺跡 E-2 号墳石室実測図

PLAN 7 遺跡 E-4 号墳石室実測図

PLAN 8 遺跡 E-7 号墳石室実測図

PLAN 9 遺跡 E-9 号墳石室実測図

PLAN10 遺跡 E-10 号墳石室実測図

PLAN11 遺跡 1 号墳墓実測図

PLAN12 遺跡 石列

PLAN13 遺跡 石列

PLAN14 遺跡 土壌群

PLAN15 遺跡 調査区全体図

PL. 1 遺跡 1 C 支群発掘前全景

2 C 支群全景

PL. 2 遺跡 1 D 支群全景

2 E 支群全景

PL. 3 遺構 1 C-3 号墳全景

2 C-3 号墳石室全景

3 C-3 号墳遺物出土状況

PL. 4 遺構 1 C-4 号墳全景

2 C-5 号墳全景

- | | | | |
|--------|----|---|----------------------|
| PL. 5 | 遺構 | 1 | C-5 号墳石室上面集石状況 |
| | | 2 | C-5 号墳石室全景 |
| PL. 6 | 遺構 | 1 | D-1 号墳全景 |
| | | 2 | D-2 号墳全景 |
| PL. 7 | 遺構 | 1 | D-3 号墳全景 |
| | | 2 | D-3 号墳石室 |
| PL. 8 | 遺構 | 1 | D-4 号墳全景 |
| | | 2 | D-4 号墳石室全景 |
| | | 3 | D-4 号墳石室東側壁 |
| PL. 9 | 遺構 | 1 | E-1 号墳・E-2 号墳発掘前全景 |
| | | 2 | E-1 号墳全景 |
| PL. 10 | 遺構 | 1 | E-2 号墳全景 |
| | | 2 | E-2 号墳石室全景 |
| | | 3 | E-2 号墳遺物出土状況（奈良時代） |
| PL. 11 | 遺構 | 1 | E-4 号墳全景 |
| | | 2 | E-5 号墳全景 |
| PL. 12 | 遺構 | 1 | E-7 号墳全景 |
| | | 2 | E-7 号墳石室全景 |
| | | 3 | E-7 号墳遺物出土状況 |
| PL. 13 | 遺構 | 1 | E-9 号墳（手前）・E-10 号墳全景 |
| | | 2 | E-9 号墳石室全景 |
| | | 3 | E-10 号墳石室全景 |
| PL. 14 | 遺構 | 1 | E-9 号墳奥壁部遺物出土状況 |
| | | 2 | E-9 号墳羨門部遺物出土状況 |
| PL. 15 | 遺構 | 1 | E-3 号墳 |
| | | 2 | E-6 号墳 |
| | | 3 | E-8 号墳 |
| | | 4 | SK1 |
| PL. 16 | 遺構 | 1 | 1 号墳墓配石状況 |
| | | 2 | 1 号墳墓封土除去後墓壙 |

- PL. 17 遺構 1 石列
2 土壇群
- PL. 18 遺物 D-4 号墳：須惠器杯蓋 (8)、杯身 (10・11)
E-2 号墳：須惠器杯蓋 (33)、E-4 号墳：須惠器杯身 (56)
E-5 号墳：須惠器杯蓋 (59～61)、杯身 (64・65)
E-10 号墳：須惠器杯蓋 (83～86)
- PL. 19 遺物 E-1 号墳：須惠器杯身 (30)
E-9 号墳：須惠器杯蓋 (68～72)、杯身 (73～78)
- PL. 20 遺物 D-3 号墳：須惠器杯身 (18)、D-4 号墳：須惠器杯身 (12)、高杯 (14)
E-2 号墳：須惠器杯身 (41)、高杯 (42)、E-4 号墳：須惠器高杯 (57)
E-9 号墳：須惠器高杯 (79)
E-10 号墳：須惠器杯身 (88)、高杯 (93)
- PL. 21 遺物 C-5 号墳：須惠器提瓶 (7)
E-2 号墳：須惠器杯蓋 (34～36・38・39)、杯身 (43)
E-10 号墳：須惠器高杯 (87)、長頸壺 (94)
- PL. 22 遺物 D-4 号墳：須惠器長頸壺 (15)、E-5 号墳：須惠器長頸壺 (67)
E-9 号墳：須惠器台付長頸壺 (80)、E-10 号墳：須惠器長頸壺 (95)
- PL. 23 遺物 C-3 号墳：須惠器甕 (5)、平瓶 (6)
E-3 号墳：土師器甕 (32)
E-10 号墳：須惠器橫瓶 (96)、土師器杯 (92)
SK1: 土師器甕 (129)
- PL. 24 遺物 D-1 号墳：土師器皿 (28)
E-2 号墳：土師器甕 (55)
E-4 号墳：灰釉陶器瓶子 (58)
X0・Y90: 土師器杯 (112)・皿 (113・120)
X20・Y90: 須惠器瓶子 (108)、瓦質土器羽釜 (128)
X40・Y50: 土師器皿 (125)
X20・Y190: 褐釉陶器水注 (106)
- PL. 25 遺物 1 E-9 号墳出土鉄釘
2 金属製品: 刀子 (33・34・37)、金環 (36)

鋤 (38)、鋌 (35)、鉄滓 (39・40)、古銭 (41～47)

- PL. 26 遺物 1 石器:尖頭器 (1)、石鏃 (2～8)、石槍 (9)、石斧 (10)、砥石 (11・12)、
剥片 (13～15)
2 弥生土器
- PL. 27 遺物 C-3号墳:須恵器 (5・6) C-4号墳:須恵器 (2) C-5号墳:須恵器 (1・3・4・
7) D-1号墳:土師器 (21～28) D-3号墳 (18・20)、瓦質土器 (19) D-4号
墳:須恵器 (8～16)、土師器 (17) E-1号墳:須恵器 (30)、土師器 (29・31)
E-3号墳:土師器 (32)
- PL. 28 遺物 E-2号墳:須恵器 (33～44・49・50)、土師器 (45～48・51～55) E-4号墳:
須恵器 (56・57)、灰釉陶器 (58) E-5号墳:須恵器 (59～65・67)、土師器 (66)
E-9号墳:須恵器 (68～80)、土師器 (81・82)
- PL. 29 遺物 E-10号墳:須恵器 (83～90・93～96)、土師器 (91・92) 1号墳墓:須恵器
(98・99)、土師器 (97) X0・Y90:土師器 (112～120・122～124・126)
X20・Y90:須恵器 (108)、瓦質土器 (128) X40・Y50:須恵器 (107)、灰釉陶器
(109～111)、土師器 (121・125) X20・Y190:磁器 (105・106) X40・Y190:
須恵器 (100～103)、土師器 (104)

插图目次

Fig. 1	調査風景	4
Fig. 2	遺跡分布図	7
Fig. 3	旭山古墳群分布図	10
Fig. 4	C支群地形測量図	12
Fig. 5	D支群地形測量図	13
Fig. 6	E支群地形測量図	14-15
Fig. 7	C-4号墳土層断面図	16
Fig. 8	C-3号墳土層断面図	16-17
Fig. 9	C-5号墳土層断面図	16-17
Fig. 10	D-2号墳石室実測図	19
Fig. 11	D-2号墳土層断面図	20
Fig. 12	D-1号墳土層断面図	20-21
Fig. 13	D-3号墳土層断面図	20-21
Fig. 14	D-4号墳土層断面図	24-25
Fig. 15	E-1号墳土層断面図	24-25
Fig. 16	E-3号墳土層断面図	25
Fig. 17	E-3号墳石室実測図	25
Fig. 18	E-2号墳土層断面図	26-27
Fig. 19	E-4号墳土層断面図	26-27
Fig. 20	E-6号墳石室実測図	28
Fig. 21	E-5号墳土層断面図	28-29
Fig. 22	E-7号墳土層断面図	28-29
Fig. 23	E-6号墳土層断面図	29
Fig. 24	E-8号墳土層断面図	30
Fig. 25	E-8号墳石室実測図	31
Fig. 26	E-9号墳遺物出土状況	32
Fig. 27	E-9号墳土層断面図	32-33

Fig. 28	E-10 号墳土層断面図	32-33
Fig. 29	SK1 平面実測図	34
Fig. 30	SK1 出土土師器甕	38
Fig. 31	金属製品実測図	39
Fig. 32	古銭拓影	39
Fig. 33	石器実測図 (1)	40
Fig. 34	弥生土器実測図	41
Fig. 35	石器実測図 (2)	41
Fig. 36	石室プラン比較図	43
Fig. 37	木目の分類 (模式図)	46
Fig. 38	木棺復原図	48
Fig. 39	取り上げ工程 (6)	50
Fig. 40	取り上げ工程 (8)	50
Fig. 41	取り上げ工程 (11)	51
Fig. 42	取り上げ工程 (18)	51

表 目 次

Tab. 1	遺跡分布図付表	8
Tab. 2	調査古墳一覧表	53
Tab. 3	土器観察表	54
Tab. 4	E-9 号墳出土鉄釘観察表	64
Tab. 5	金属製品観察表	64
Tab. 6	石器観察表	65

第 I 章 調査経過

1 調査に至る経緯

京都市山科区上花山旭山町で京都市営花山火葬場の拡張工事が実施されることになった。同地は旭山古墳群として京都市の遺跡台帳に古墳が 3 基登録されており、地形の変更を伴う大規模な造成工事が計画されていたため、この古墳群の破壊は避けることができず、事前の発掘調査を実施することになった。

原因者である京都市衛生局が調査費用を負担し、発掘調査・資料整理および報告書作成を財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託した。同研究所は、京都市文化観光局文化財保護課の指導のもとに、これを実施した。

はじめは既知の古墳 3 基 (E-1・E-2・E-10 号墳) を対象として発掘調査を開始したが、草木を伐採したり、表土を剥いだ段階で、新しい古墳が検出された。このため附近の詳細な分布調査を実施した結果、工事予定地内だけでも新たに 10 基近い古墳の存在を確認することができ、遺跡台帳に六条山古墳群とされていたものと一連の古墳群を形成していることが明らかになった。市内で、これほど残存状況の良好な古墳群は少なく、現状のままの保存が望まれたが、火葬場という特殊な公共施設の工事という事情により、古墳群の破壊を余儀なくされた。とりあえず、既知の古墳の調査を第 I 次とし、残りの古墳の調査を第 II 次として期間の延長と調査費用の増額を市衛生局に申し入れ、発掘調査を実施した。

第 I 次調査は昭和 52 年 (1977) 9 月 28 日に開始し同年 12 月 9 日に終了した。第 II 次調査は昭和 53 年 (1978) 1 月 25 日に開始し同年 8 月 31 日に終了した。

なお、最終調査面積は約 13,000 m²である。

2 調査の経過

調査の方法

発掘区の割り付けは、E-2 号墳の墳丘主軸を基本軸線 (X0 line) とし、軸線上に基本杭 (X0・Y0) を設定し、北へ行くと Y の数値が、西へ行くと X の数値が増加し、東へ行くとマイナスとなって X の数値が増加するようにした。たとえば基本杭から北へ 50m 東へ 20m の地点は (X-20・Y50) となり、北へ 10m 西へ 25m の地点は (X25・Y10) となる。(X0・Y0)

は国土地理院第Ⅵ象限系座標で X=-113051, 644m、Y=-18913, 859m であり、基本軸線と真北とでは N22° 3′ 37″ W の傾きをもつ。水準高は東京湾平均海面高度を使用した。

古墳は主軸に合わせて十字に畦畔を設けて掘り下げ、他の地区 (Y70 以北) は 20m × 20m のグリッドを設定し西北隅の割り付け座標をもってその呼称とした。

具体的な古墳の発掘手順は、まず表土を剥いで封土を検出し、次に周溝・石室内の掘り下げを行った。石室の実測・墳丘の測量が終了したのち、封土をはいでその築成状況を観察し、石室掘形の検出と掘り下げを実施、最後に断ち割って終了とした。遺物は明らかに石室内から出土したものを除き、S=1/50 の平板に出土地点と水準高をおとし、古墳との位置関係を明確にするように努めた。

調査の経過

発掘調査は南の E 支群より開始した。草木を伐採し表土を除去しないと検出できない古墳があるため、調査区全体をベタ掘りすることにした。その結果、墳丘の流出した小石室墳 4 基、古墳時代の土壌 1 基、平安時代以降の土壌群・石列を検出することができた。

1977 年 9 月 28 日より同年 12 月 9 日まで、第 I 次調査として E-1・E-2・E-3 号墳の発掘・実測を実施した。第 II 次調査は E 支群と Y90m 以北の調査から開始し (1978 年 1 月 25 日～5 月 6 日)、次いで C 支群 (5 月 8 日～)、未買収だった D 支群が最後になった (6 月 9 日～)。8 月に入ってから各古墳の掘形検出を含む断ち割り作業を実施した。なお、Y90～Y170 までの西側の斜面地は、古墳・その他の遺構の立地条件からはずれると判断され、また調査期限に制約されて表土を剥いだけで、20m 毎の網目にサブトレンチを設けて土層を観察するにとどめた。

地形測量は発掘前 (草木伐採後) と墳丘・周溝検出後の二回実施した。当初は平板による測量を行っていたが、広大な面積と調査期間に制約され関西航測株式会社へ委託して航空測量をすることになった。E 支群と未買収地を除く発掘前の地形測量を 3 月 7 日に、5 月 26 日には前回未買収であった部分の発掘前の地形測量、8 月 18 日には発掘終了後の全体の地形測量をそれぞれ実施した。

発掘調査および整理作業に携わった財団法人京都市埋蔵文化財研究所の構成は次頁のとおりである。

所 長 杉山信三

調査部長 田辺昭三

課長 浪貝 毅

資料部長 木村捷三郎

課長 江谷 寛

総務部長 松井克也

課長 村内義廣(1977年度)

課長 西崎健次(1978年度)

職員 福西 喬・村木節也・吉田悦子・福島京子

発掘調査担当者

調査員 磯部 勝・上村和直・牛嶋 茂・梅川光隆・木下保明・前田義明

補助員 稲垣瑞穂・岩堀政彦・氏松冒平・笠松和美・加藤 謙・栗原克巳

駒木根宜子・斎藤 進・鹿田 隆・渋谷高秀・並川悦子・波岸雅史

早川康志・福島雅儀・藤原孝子・松浦初美・松島大和・松村 浩

松本 覚・水谷寿克・溝本幸三・山田邦和・吉岡 均・吉澤アイ子

作業員 明石喜三郎・五十棲春一・生島幸雄・今村健次・逢坂芳子・加藤正一

喜多悦雄・北川和子・品川仙太郎・高橋富之助・月森六三・西垣 潔

畑中元二郎・広瀬孝一・村上藤一・吉田角太郎・吉田藤三郎・吉田保定

その他、短期間の参加者が多人数にのぼる。

整理作業

遺物の水洗・注記・接合・復原などの整理作業については木下が専従し、以下の協力を得た。

氏松・波岸・福島・松浦・松村・水谷

遺物観察記録

(土器) 上村・木下・福島・水谷 (金属器) 木下・福島 (石器) 松浦

報告書作成

報告書作成にあたっては、調査部長田辺昭三の指導のもとに、立案・編集・調整は木下がおもに行い、遺構・遺物などの整理トレースは木下・波岸・水谷が、写真撮影は遺構の一部を除いて牛嶋が担当した。

本文執筆は、第Ⅲ章・2のC-5号墳を氏松、E-2・E-9号墳を福島、E-1・E-7号墳を水谷、D-4・E-8号墳を松浦が原案を作成し、木下が加筆・校正した。付載の第1節を福島が、第2節を岡田文男が執筆し、他の章節は木下が担当した。

調査・報告書の作成にあたって、以下の各氏・各機関の協力および指導・助言をいただいた。記して深謝の意を表します。

(五十音順・敬称略)

機関 京都市衛生局環境衛生課 関西航測株式会社

個人 石野博信・泉 拓良・宇野隆夫・大船孝弘・岡田保良・尾上 実・梶川敏夫
北山政雄・久貝 健・小林行雄・沢田正昭・白石太一郎・玉村登志夫・西 弘海
丸山竜平・松沢亜生・森 浩一・吉本堯俊



Fig.1 調査風景

第Ⅱ章 調査地の概況

1 地理的環境

京都盆地の東端の如意ヶ岳（大文字山）から南へ稲荷山までのび、如意ヶ岳（466m）を除くと100～300mの低い東山丘陵がある。この丘陵のほぼ中央部、六条山（200m）を最高所とする南へ緩やかに傾斜する尾根上に旭山古墳群が形成されている。東側は、山科盆地を一望のもとに見渡せるが、西側の京都盆地は阿弥陀ヶ峰にさえぎられてわずかに愛宕山が望めるのみである。

またこの地は北の渋谷街道・南の滑り石街道という旧道に挟まれた地帯で、平安時代より鳥部野と呼ばれ、洛北の蓮台野・洛西の化野とともに葬場として有名な所である^{註1}。

2 歴史的環境

東山丘陵に古墳が築造されるのは4世紀の後半から5世紀のはじめにかけてであり、特に丘陵南半に分布が集中する。大きく分けて將軍塚付近の古墳（4）と八坂古墳（3）を中心としたグループ、稲荷山一ノ峰古墳、同二ノ峰古墳、同三ノ峰古墳（25）を中心としたグループ、黄金塚古墳（48）を中心としたグループの3群がある。

古墳時代後期になると東山丘陵にも群集墳が形成される。しかし知られている数は少なく、また一つの古墳群を形成する古墳数も少なく、5基を越えることはまずない。東山丘陵一帯は早くから開発が進んでおり、すでに多くの古墳が破壊された可能性もある。総山古墳（16）や梅谷古墳（19）のように独立して造られた傾向が強く、数10基におよぶ群集墳は形成されなかった可能性もある。しかも通常の群集墳より形成時期が遅れるようである。

旭山古墳群から見渡せる山科盆地に、人間がその足跡を残すのは縄文時代後期になってからであり、芝町遺跡・中臣遺跡（29）がある。弥生時代の遺跡には前述の芝町遺跡・中臣遺跡そして小栗栖遺跡があり、特に中臣遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落が営まれている。ところが、山科盆地には前期・中期の古墳はなく、古墳が築造され始めるのは後期になってからである。前・中期の古墳が築造されなかったのは山科盆地に古墳を築造し得る地域首長の出現を支えるほどの農業生産力がなく、前述の東山丘陵の

黄金塚古墳を中心としたグループを築造した首長の影響下にあった可能性も考えられる。

後期の古墳群には盆地東南部の小野群集墳(34)・醍醐耳塚古墳(31)や中央部南寄りの中臣十三塚古墳群がある。中臣十三塚古墳群(28)のうちの1基が昭和41年(1971)に調査され、直径約8mの周溝をもつ円墳で、内部主体は幅約1m・長さ約3mの小型の横穴式石室で、築造時期は7世紀の前半であることが確認されている。また中臣遺跡では同時期の集落が発掘されている。

山科盆地では6世紀末から7世紀はじめにかけて須恵器生産や製鉄が開始される。盆地北部の天智陵附近窯跡(10)・牛尾窯跡(11)、六条山東麓の朝日稻荷窯跡(15)・坂尻窯跡(17)などの須恵器窯跡、御陵大岩町遺跡(7)などの製鉄遺跡が知られているが、これらの生産遺跡はいずれも小規模で、経営期間がきわめて短く、山科盆地内での自己完結的な生産であったと考えられる。生産遺跡毎に工人集団が編成されており、それらを統括する氏族の存在が想定されるが、藤原鎌足の山科の居館が『陶(スエ)原(ハラ)の館』と呼ばれていたことは興味深い。

その藤原鎌足が臣従した天智天皇の古墳が山科の地に造られる。上円下方墳という珍しい墳形の古墳である。そして8世紀には西野山に金装太刀などの豊富な副葬品をもった上級官人の古墓(21)が営まれた。また、大宅廃寺(30)や小野廃寺(35)のように奈良時代前期(白鳳時代)の寺院が山科の地に造営された。

註

- 1 角田文衛「鳥部山と鳥部野 - 平安時代を中心として」
『京都市文化観光資源調査会、調査報告シリーズ3』1976年

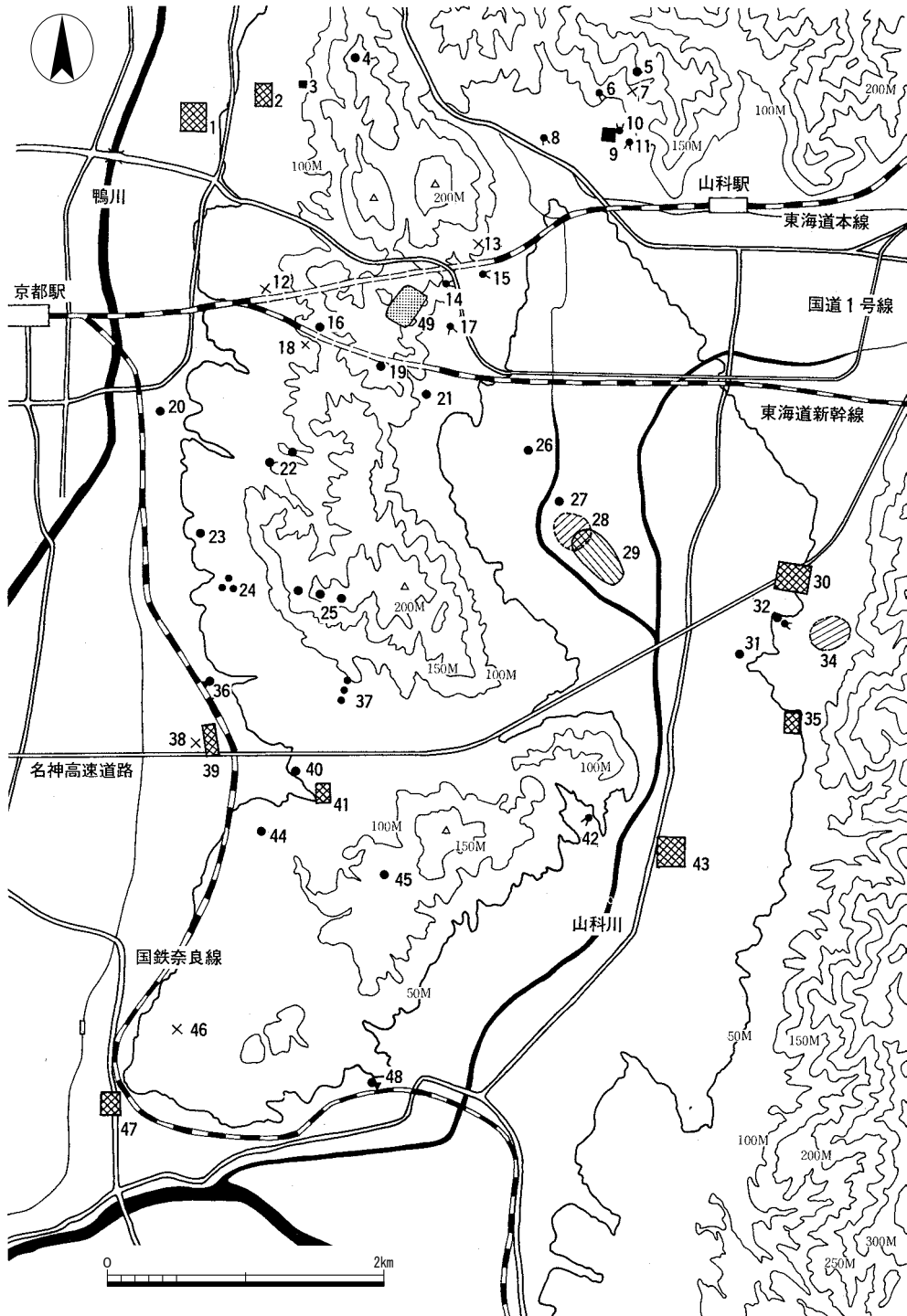


Fig.2 遺跡分布図 (1:50,000)

Tab. 1 遺跡分布図付表

番 号	名 称	時 代	京都市遺跡 地図番号
1	珍皇寺跡	奈良時代前期～平安時代後期	607
2	法観寺跡	奈良時代前期	605
3	狽 哆 墳(八坂古墳)	古墳時代中期	603
4	将軍塚付近古墳	古墳時代中期	602
5	大岩古墳		703
6	大岩窯跡		710-3
7	御陵大岩町遺跡(タタラ跡)	奈良時代前期	708
8	日ノ岡堤谷窯跡	飛鳥時代	710-2
9	天智天皇陵古墳	(白鳳時代)	—
10	天智陵付近窯跡	古墳時代後期	710-4
11	牛尾窯跡	々	710-5
12	地蔵山遺跡(墓地)	奈良時代後期	611
13	六所神社遺跡(散布地)	平安時代前期	711
14	朝日稻荷窯跡	古墳時代後期	710-6
15	大峰窯跡	々	710-1
16	総山古墳	々	612
17	坂尻窯跡	々	710-7
18	総山遺跡	平安時代	613
19	梅谷古墳	古墳時代後期	—
20	塚本古墳	々	621
21	西野山古墓	奈良時代	713
22	本多山古墳	古墳時代後期	616
23	願成古墳		802
24	古墳群		804
25	稻荷山一ノ峯古墳	古墳時代中期	807
	々 二ノ峯古墳	々	〃
	々 三ノ峯古墳	々	〃
26	花山神社古墳	古墳時代後期	720
27	稻荷塚古墳	々	721-1
28	中臣十三塚古墳群	々	721-2

遺跡分布図付表

番 号	名 称	時 代	京都市遺跡 地 図 番 号
29	中臣遺跡	縄文時代後期、弥生時代中後期、 古墳時代後期	721
30	大宅廃寺	奈良時代前期～平安時代前期	722
	大宅古墳	古墳時代後期	723
31	醍醐耳塚(古墳)	古墳時代後期	834
32	向山古墳		724
33	大宅廃寺瓦窯跡	奈良時代前期	725
34	小野群集墳	古墳時代後期	834
35	小野廃寺	奈良時代前期	825
36	番神山古墳	古墳時代中期	810
37	砥粉山古墳		813
38	西伊達町遺跡(竪穴住居)	古墳時代後期	817
39	深草廃寺	奈良時代	818
40	谷口古墳		823
41	おうせんだう廃寺	奈良時代後期～平安時代中期	825
42	小栗栖瓦窯跡	奈良時代前期	838
43	醍醐廃寺	々	837
44	するが塚(古墳)	古墳時代後期	828
45	古 墳		844
46	福島太夫遺跡(竪穴住居)	古墳時代後期	849
47	御香宮廃寺	奈良時代前期～平安時代	851
48	黄金塚古墳	古墳時代中期	854
49	旭山古墳群	古墳時代終末期	712

註 京都市遺跡地図番号は昭和55年(1980)10月発行のものを記載した。

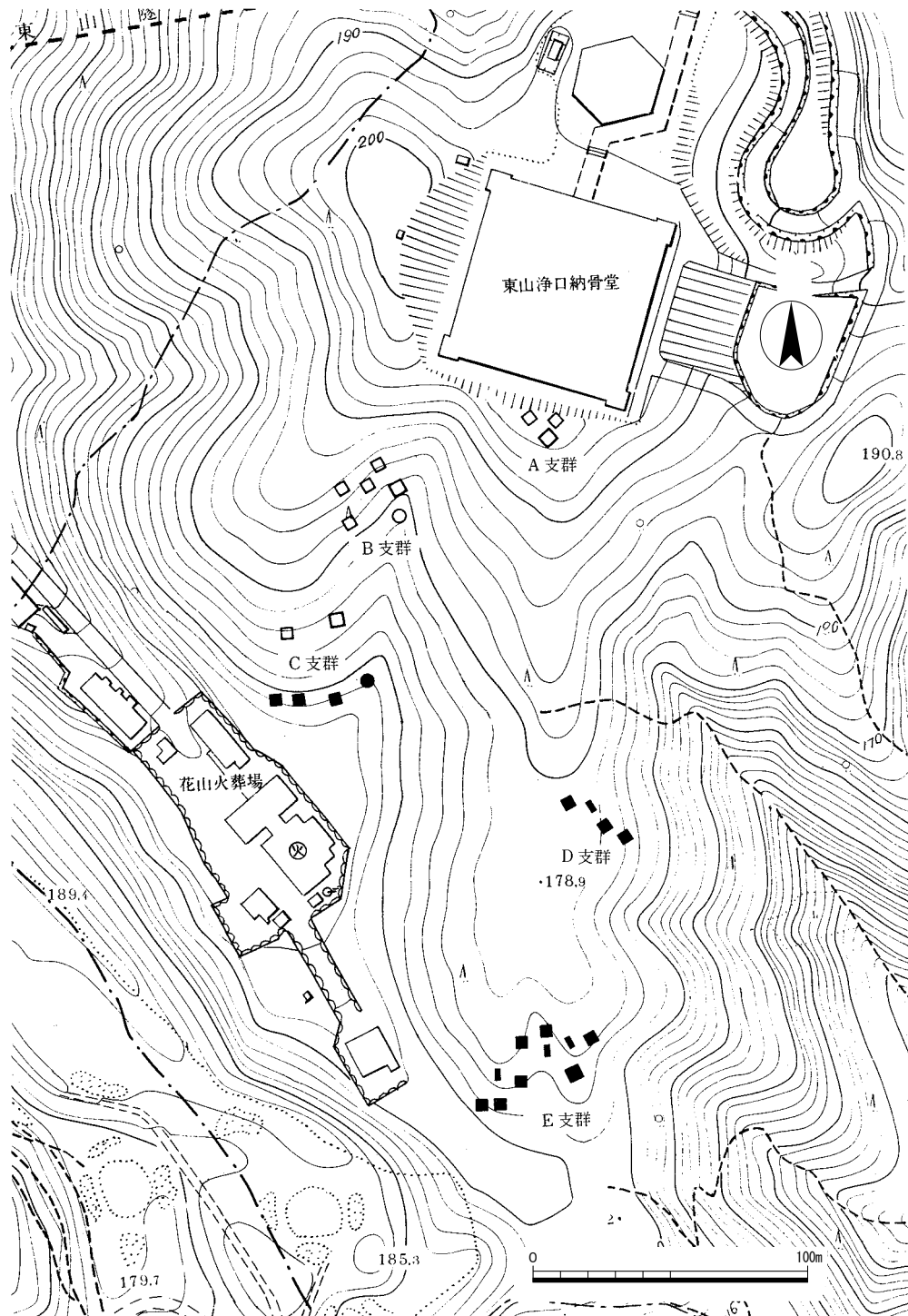


Fig. 3 旭山古墳群分布図 (1:2,500) ■は方墳 ●は墳墓 ■は小石室 白抜きは未調査

第三章 遺 構

1 古墳時代の遺構

古墳群の構成

旭山古墳群は東山丘陵のほぼ中央部、京都盆地と山科盆地の間で一番狭くなった地点に形成されており、東西約150m、南北約290mの範囲を有する。北端に位置する六条山を最高点とし、それより全体として南方へ緩やかな傾斜をもつ主尾根上と、西南にのびる支脈上に古墳が立地している。また、古墳の立地は尾根の南側斜面に限られ、5～10基を単位とした支群が分散して営まれている。A～Eの五つの支群に大別でき、それぞれの支群は立地条件・墳丘形態・内部構造・存続時期などに同一の性格が認められ、旭山古墳群を構成した支群とみなすことができる。以下、各支群を北から順に説明する。

A 支群 A支群は本古墳群中最北部に位置する支群で、今までは六条山古墳群と呼称されていたものである。1基の大型墳を含む3基の方墳からなるが、すぐ北側を東山浄園によって削平されてしまっており、かつてその部分にも古墳が存在した可能性が考えられる。

B 支群 B支群は六条山から南西にのびる尾根のほぼ中央に立地し、A・C両支群の中間に位置する。大型方墳1基を含む5基の方墳で構成されている。A・B両支群は工事用地外で、発掘調査の対象にならなかったため墳丘形態と位置を確認したのみである。

C 支群 C支群は南西にのびる尾根の先端近くに位置し、方墳5基で構成されている。C-1号墳は東西約9m、南北約9.5mで本支群中最大の規模を有する。また、前方を除く、3方に幅1.2m前後の周溝がめぐっている。未調査のため断言はできないが、石室の盗掘壕からみて内部主体は南へ開口した横穴式石室（両袖式）とみられる。C-2号墳は東西約5.5m、南北約6mを測る。これも未調査のため、周溝の有無・内部主体の詳細は不明であるが、他の旭山古墳群を構成する古墳と同一の内容をもつものと思われる。C-3・C-5号墳はともに内部主体に狭長な無袖の横穴式石室をもつ。C-4号墳は封土・石室がすべて失われているが、周溝の一部と石室の掘形が検出されている。(C-1・C-5号墳)、(C-2・C-3・C-4号墳)で二つの小支群を析出することができる。

D 支群 D支群は南へのびる主尾根の中央部東寄りに位置し、4基の古墳で構成されている。D-1号墳は方形をなすが、主体部に相当する部分には石室が見当らず、石材の抜き

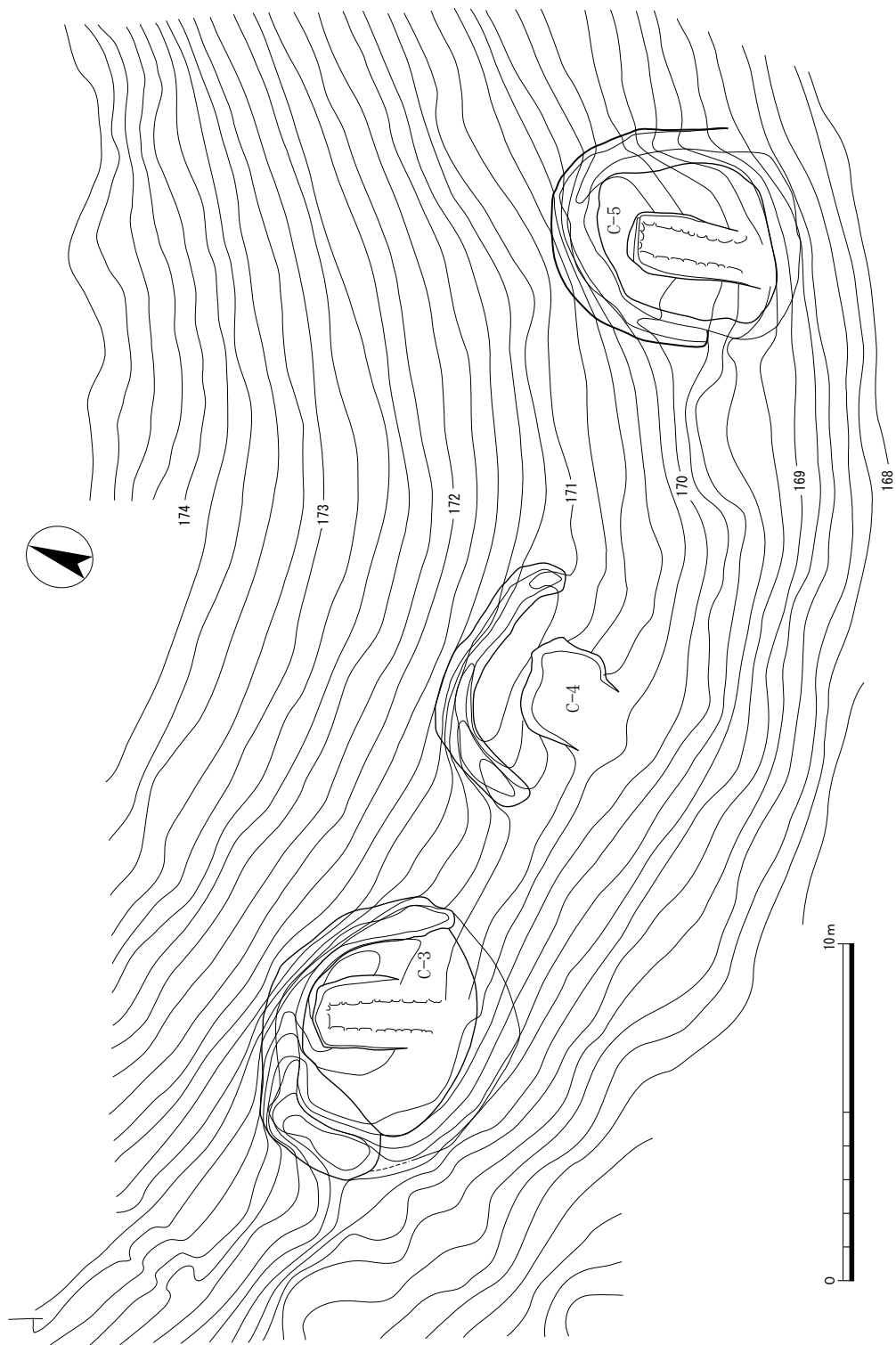


fig. 4 C支群地形测量图(1:200)

取られた痕跡も確認できなかった。中央部に人間の頭骨片と土師器皿が出土した土壌があり、平安時代の墳墓の可能性も考えられる。D-3、D-4号墳はともに無袖の横穴式石室を内部主体とする方墳で、D-4号墳はD-3号墳の裾部を切っている。D-2号墳は小石室墳で

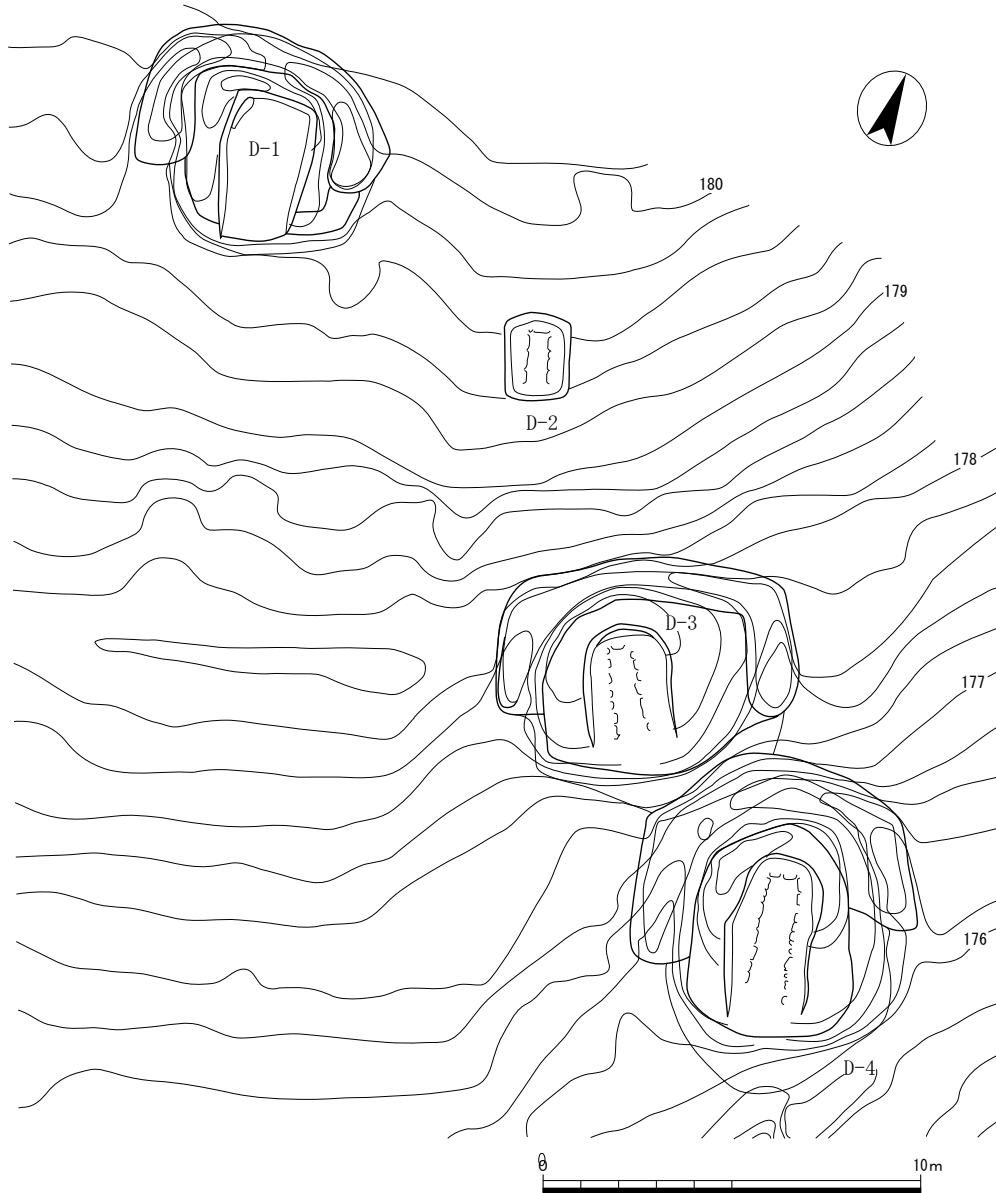


fig. 5 D支群地形測量図(1:200)

ある。(D-1・D-2号墳)、(D-3・D-4号墳)で二つの小支群を形成している。

E支群 E支群は主尾根上、本古墳群中の最南端に位置する。E-1、4・5・7・9・10号墳は無袖の横穴式石室を内部主体とする方墳で、各古墳の墳丘・石室規模はほとんど同じである。E-2号墳は両袖の横穴式石室を内部主体とする方墳で、本支群中最大の規模をもつ。E-3・6・8号墳は小石室墳である。E支群を構成する古墳は10基と数が多く、他の支群が4～5基で構成されていることから考えれば、2～3の支群に分けることも可能であるが、他の支群が独立性を保ち分散して立地するのに比べ、あまりにも接近しすぎているので、一個の独立した支群として扱った。10基と数が多いのは、この支群が他の支群と比べて相対的な優勢を示すからであろうとみている。

E支群内での各古墳の占地について具体的に説明すると、E-1・E-2号墳は対角線上に並ぶ。E-4・E-5号墳は墳丘の主軸が平行で、E-4号の墳丘西側の中央からE-5号墳の北側周溝が形成されている。また、E-5号墳の東西両側溝の延長線上にE-7号墳の東西両側溝がある。E-9・E-10号墳は中央で溝を共有して並行に築造され、両古墳の北側周溝はほぼ一直線になる。さらにE-9号墳の東側溝はE-5・E-7号墳の西側溝とほぼ同一線上にのる。上記のような各古墳の占地からみて、(E-1・E-2・E-3号墳)、(E-4・E-5・E-6号墳・SK1)、(E-7・E-8号墳)、(E-9・E-10号墳)の四つの小支群に分けることができる。

以上、旭山古墳群の構成についてみてきたとおり、広範囲な墓域の中で各支群が立地条件を同じくして分散して営まれており、また各支群内でも一定の法則のもとに各古墳が墓域を占地していることが判る。このことは、かなり綿密な計画をもって古墳群が造営されたことを物語っている。換言すれば、各支群を構成する造墓主体が強い紐帯で結ばれているが、各支群の独立性も維持しているといえよう。

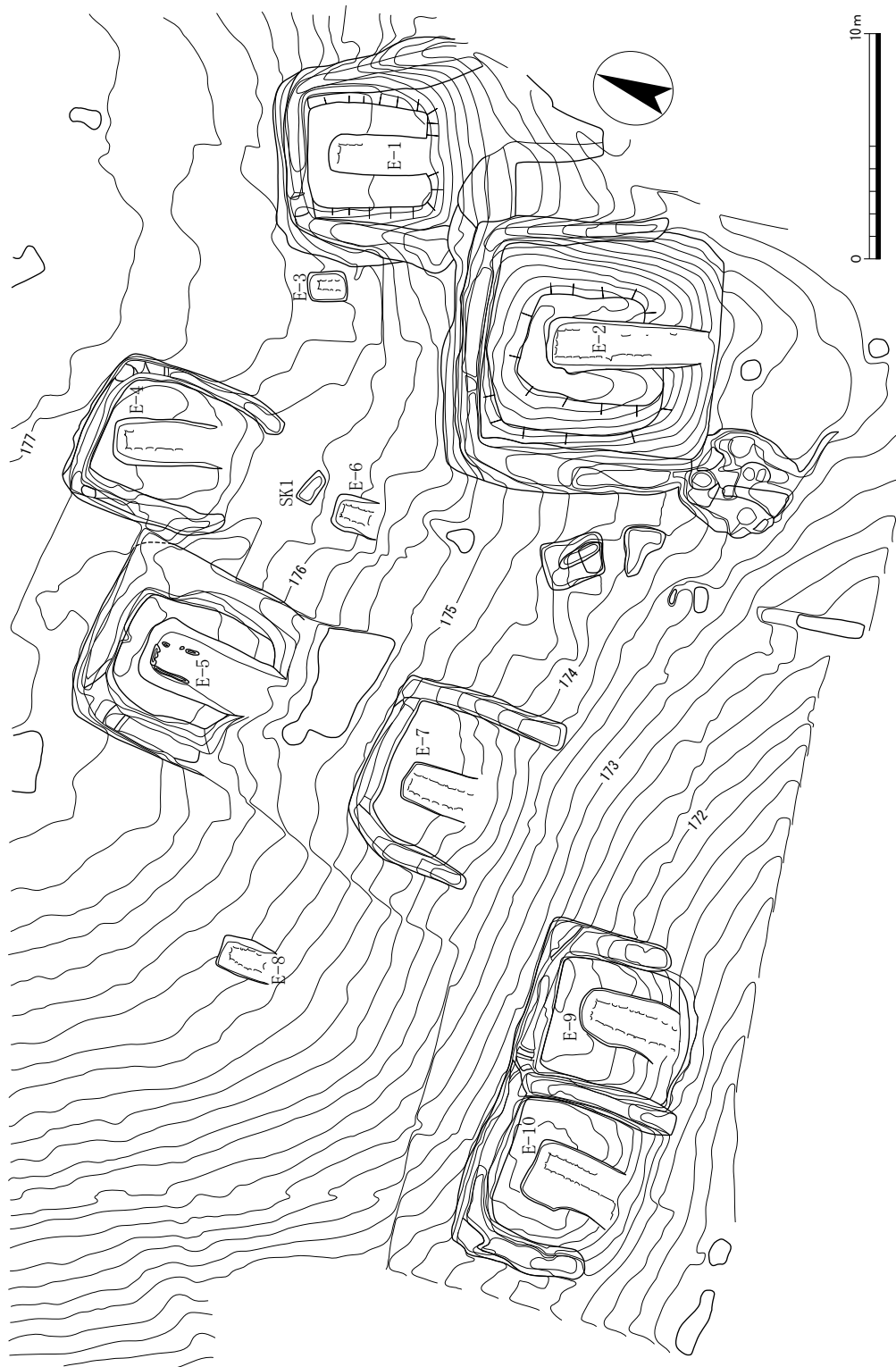


fig.6 E支群地形測量図(1:300)

C-3 号墳

位置 C支群の南西隅に立地し、旭山古墳群中最西端にある。北から南への傾斜のきつい斜面に築かれている。

墳丘 急な斜面に築かれているために墳形が崩れてしまっているが、もとは方形を呈したと思われる。高さは傾斜する地形に影響され様ではない。盛土は下層が濃黄褐色土層、上層はやや粘性をおびた褐色土である。西半の盛土は流出が激しく、特に西北隅の削平は著しいが、他は築造当初の厚みを保っていると思われる。前方を除く三方に周溝がめぐらされている。

掘形 南方に開口したコの字形を呈し、長さ2.6m、幅は奥壁部で1.8m、開口部で2mを測る。深さは奥壁部で40cmを測り、南へいくにしたがって浅くなり、石室の中央よりやや南方で終わっている。

石室 南に開口した無袖の横穴式石室である。東側壁の一部が破壊されるが、他は残存状況がよく、旧状を保っていると思われる。

小口積であるが、合端のすき間が大きく、石と石とのかみ合わせも悪い。奥壁は大小2個の石を鏡石として縦積みになされ、二段目は横長に積まれている。両側壁は、奥壁に接する部分に大形の石を、他は比較的規模の揃った小さめの石を基底石として横長に据えている。二段目には大きめの石が後に重心が働くように積まれており、三段目からの石とのバランスが取れるように工夫されている。鏡石と奥壁に接する両側壁の基底石は、掘形の底面に据え付けられているが、他は床面形成と同時に設置されている。石室と掘形の間を裏込めには粘土が石の隙間を埋めながら充填されている。

遺物の出土状況 石室内中央やや開口部寄りの地点から須恵器の平瓶(6)・甕(5)が出土している。甕は口縁部を欠くが、平瓶は完形で出土しており、原位置をそれほど動いていないと思われる。

小結 表土をはいで石室の上端を検出した段階で、石室上面を覆うような集石状況がみられた。後世の攪乱によって放り込まれたとも考えられるが、石室内に攪乱の様子がなく、石室の上面にのみ集石がみられること、天井石の存在が確認されていないことから、石室に遺骸を埋葬後ただちに土砂を充填しその上に礫を敷き並べたあとではないかと思われる。同じような状況が本古墳群のC-5号墳・E-10号墳にもみられ、また兵庫県宝塚市雲雀山古墳群・東尾根B支群中の古墳にも認められている。

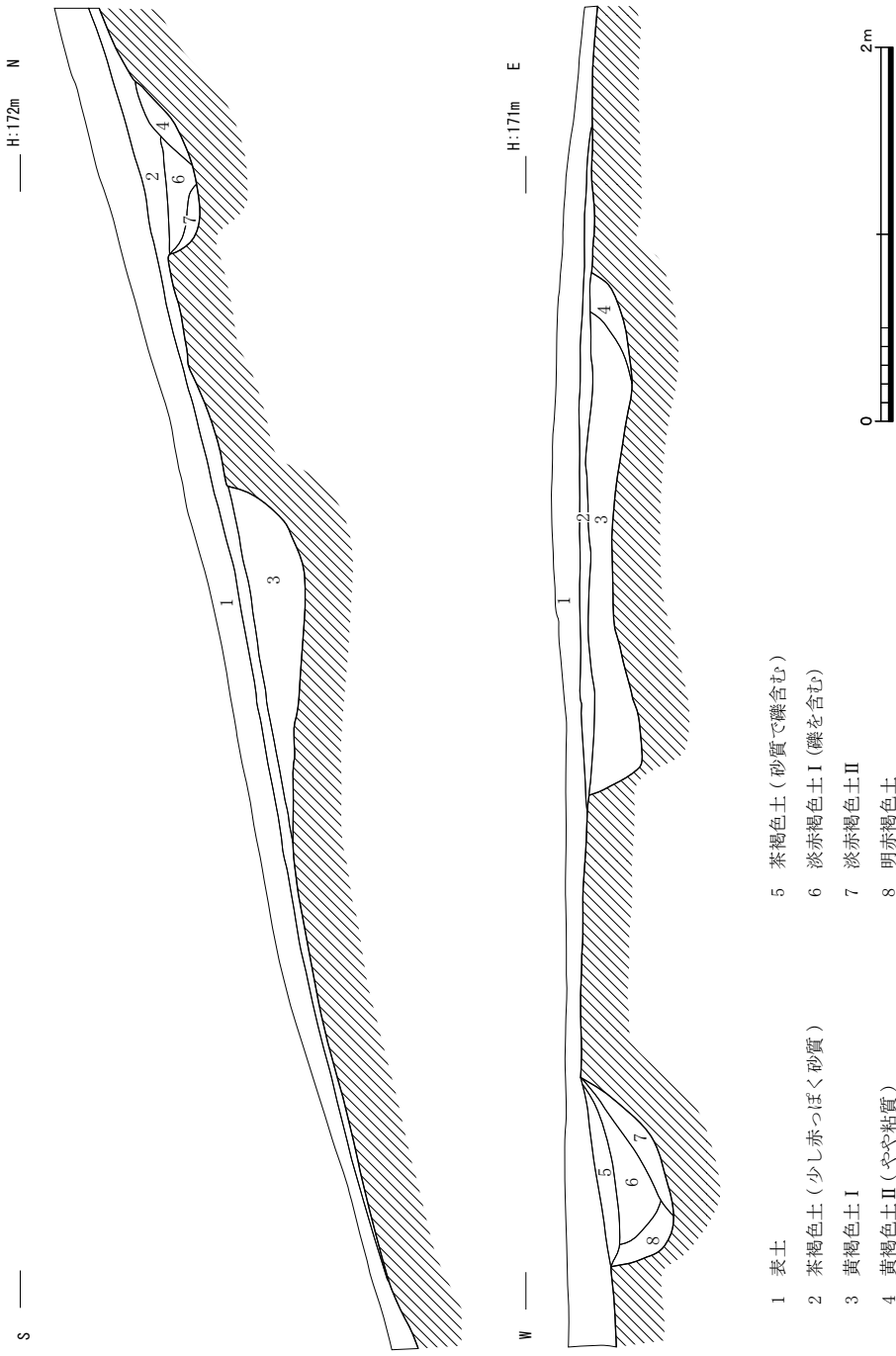
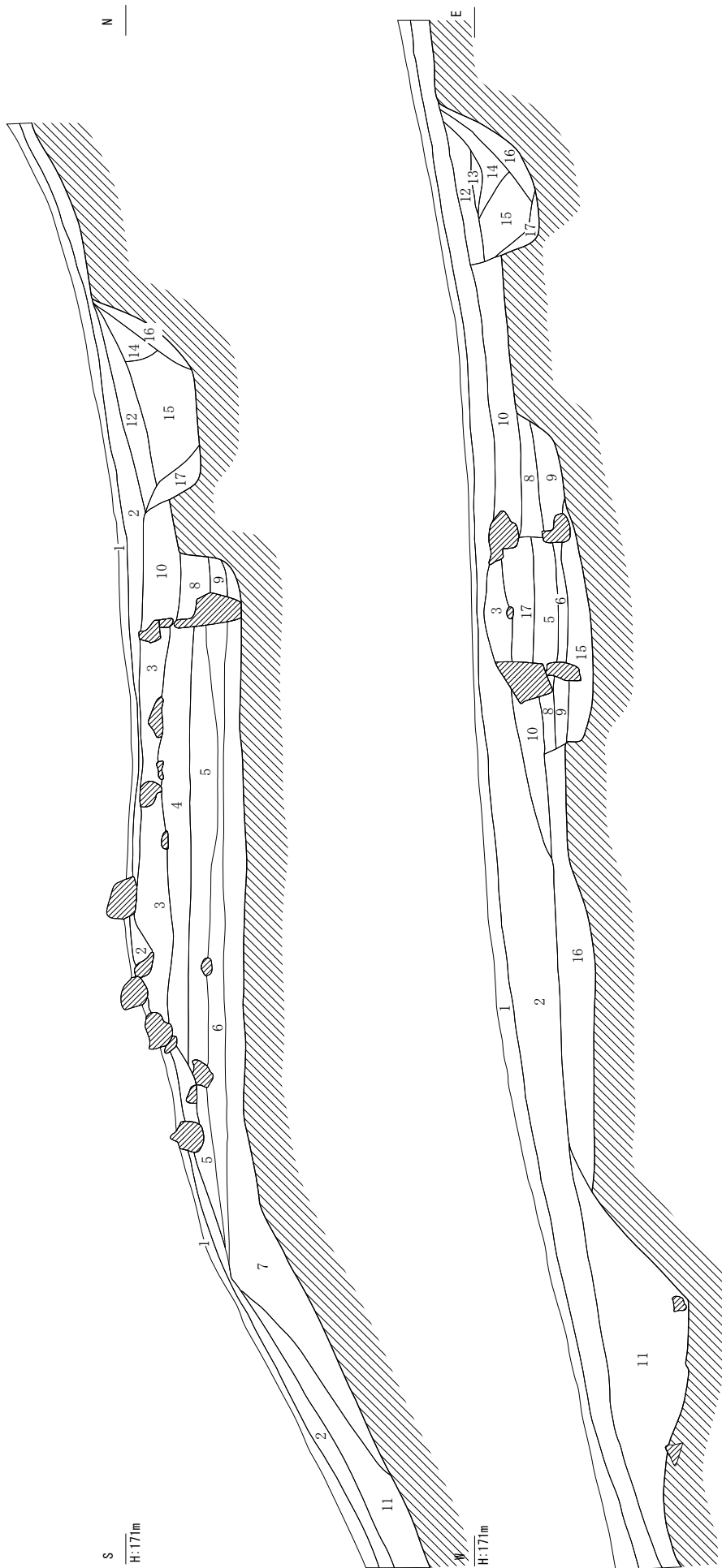
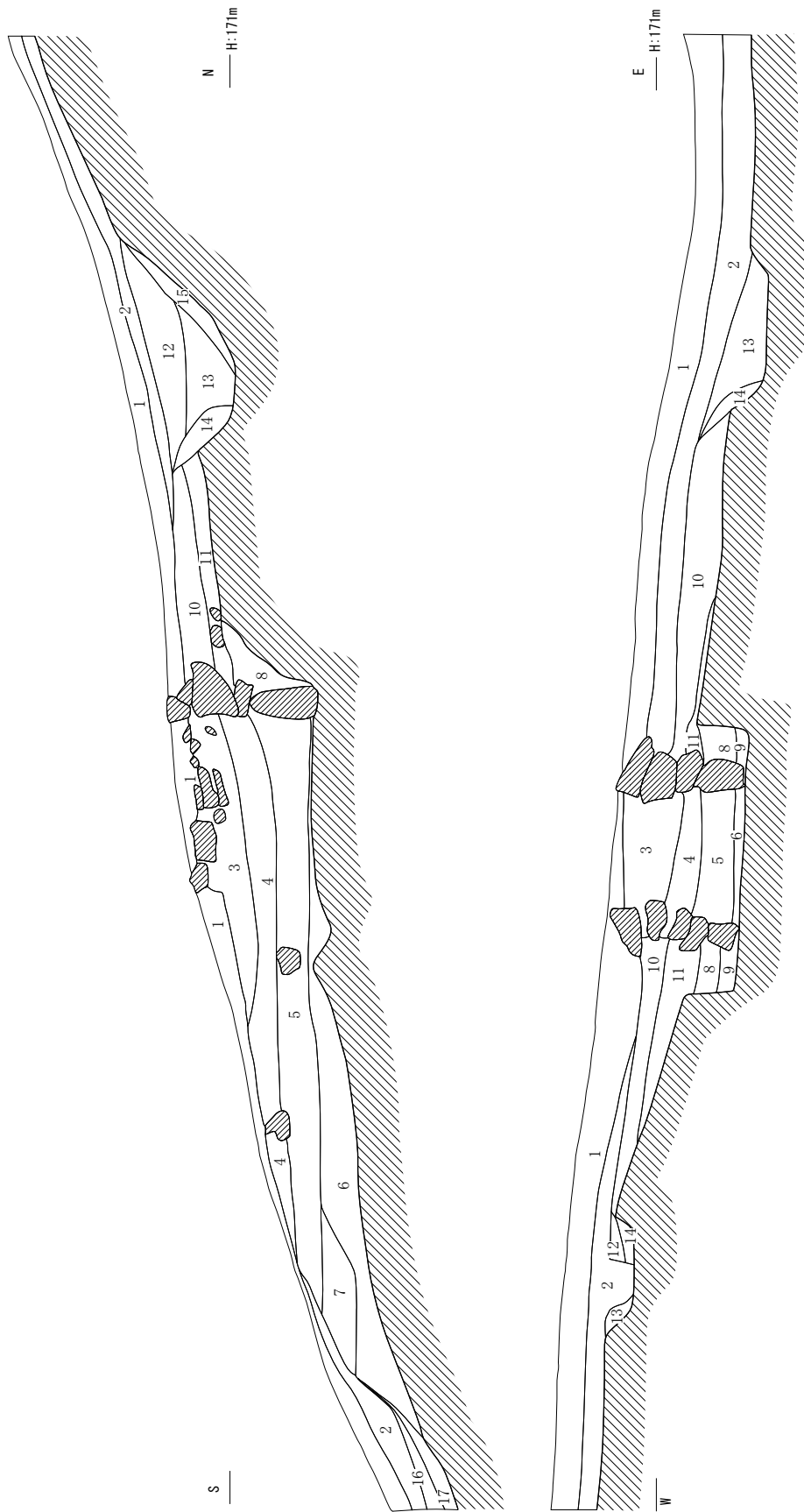


Fig. 7 C-4号墳土層断面図(1:40)



- | | | |
|-----------------------|-----------------|-------------------------------|
| 1 表土 | 7 茶褐色粘質土 | 13 明茶褐色土 |
| 2 茶褐色土 | 8 褐色土 I (粘質) | 14 暗黄褐色土 I |
| 3 明褐色粘質土 | 9 褐色土 II (やや粘質) | 15 暗黄褐色土 II (礫を含む) |
| 4 黄褐色土 | 10 明褐色土 | 16 淡黄褐色土 I (やや明るい) |
| 5 明黄褐色土 I (地山礫を含む) | 11 濃茶褐色土 (礫を含む) | 17 淡黄褐色土 II (径 6 ~ 10cm の礫含む) |
| 6 明黄褐色土 II (地山礫を多く含む) | 12 暗茶褐色土 | 18 濃茶褐色土 |

Fig. 8 C-3号墳土層断面図 (1:40)



- | | | |
|-----------------|------------------------|-----------------------------|
| 1 表土 | 7 淡赤褐色土 | 13 暗茶褐色土 |
| 2 茶褐色土 I (礫を含む) | 8 明黄褐色土 I (土質やや密) | 14 暗褐色土 (砂質) |
| 3 黄褐色土 I (礫を含む) | 9 明黄褐色土 II (礫を含む) | 15 褐色土 (砂質) |
| 4 黄褐色土 II | 10 淡黄褐色土 I (土質非常に密) | 16 茶褐色土 III (茶褐色土 I より黒っぽい) |
| 5 黄褐色土 III (粘質) | 11 淡黄褐色土 II (地山礫を少し含む) | 17 淡茶褐色土 |
| 6 暗黄褐色土 | 12 茶褐色土 II (やや砂質で礫を含む) | |

Fig. 9 C-5号墳土層断面図(1:40)

C-4 号墳

位置 南西にのびる尾根の南側斜面上、谷部のすぐ上に立地し、C-3・C-5 号墳のほぼ中間に位置する。

墳丘 封土がすでに失われているので正確な規模は判らないが、周溝の一部が検出されており、方墳として復元することができる。周溝は北方と西側の墳丘の中央部まで、東側は屈曲部が検出された。

掘形 南に開口したコの字形を呈し、東西 3.8m・南北 3m、深さは奥壁部で 42cm を測る。

石室 完全に破壊されており、石材の抜取穴も検出されなかった。

遺物の出土状況 須恵器杯蓋片(2)が墳丘北東部より、須恵器甕腹片が石室相当部分から出土している。

小結 C-4 号墳は墳丘がほとんど削平され、石室も完全に破壊されているが、残存した周溝からみて、他の古墳と同様の規模と内容をもった方墳であったと考えられる。

C-5 号墳

位置 5 基より構成される C 支群中の南東隅に位置する。

墳丘 墳丘は方形を呈するが全体に不整形で、特に北東隅はかなりの変形を受けている。周溝が前方を除く三方にめぐらされている。

盛土は掘形と石室の隙間を埋めてから、下層に礫を含んだ土を、上層に比較的粘性をおびた土を積んでいる。現存する封土の厚さは 30cm 前後である。

掘形 南に開口したコの字形の掘形で幅 2.1m、長さは東側で 3.2m、西側で 4.2m を測る。深さは奥壁部 60cm である。東と西とで掘形の長さが違うのは、北西から南東への傾斜地に造られていることに起因する。石室と掘形の中の裏込土は、下層では礫を混ぜた土を用い、上層には粘性をおびた土を積んでいる。

石室 南に開口した狭長な無袖の横穴式石室である。奥壁から約 1.8m までの玄室部は、三～五段の石を積んでいるが、羨道部では一～二段しか積まれていない。奥壁では鏡石として 40cm × 40cm 大の石を縦積みに据え、二段目からは横積みに架構している。両側壁は比較的大きさの揃った基底石を横長に据え、二段目からは横積みと小口積みを併用して床面より約 40cm まではほぼ垂直に、それより上は持ち送り気味に架構している。鏡石と両側石の奥壁から 3 石分は掘形の底面から設置されているが、他の基底石は床面を造ってから据えられている。石の積み方は全体に乱雑で、内面の凹凸が激しく、石と石とのかみ合

わせも隙間が多い。また、東側壁と西側壁とで使用石材の選択・用法に相違がみられる。

遺物の出土状況 石室から出土したのは須恵器の提瓶(7)のみで、玄室部と羨道部の境近くに床面より若干浮いて出土している。他に墳丘前方より須恵器の杯蓋(1)・杯身(3)・甕(4)・土師器片が出土している。

小結 本古墳の東西両側壁に使用石材の選択・用法の違いがみられたのは、築造に携わった工人の技術差のあらわれと思われる。つまり、複数の工人によって作業箇所を分担してこの石室が造られたと考えられるのである。それは工期の短縮化をはかった結果とみられる。また天井石が架構された痕跡が認められず、石室上面にC-3号墳と同様な集石状況がみられる。

D-1号墳

位置 4基で構成されるD支群中もっとも北に位置し、すぐ西隣のD-2号墳と4.5mの距離にある。

墳丘 不整形な方形墳で、他の古墳に比して小型である。封土はすでに流出しており、墳丘裾部と周溝底よりわずかに高みを求められるのみである。なお、傾斜地に築かれているため北側が高くみえる。周溝は後方と墳丘の東西両側ほぼ半分の所で切れている。

掘形・石室 掘形と石室は完全に破壊されており、東西2.4m・南北3.8mの破壊墳がある。その破壊墳を切って平安時代後期の土壇墓が造られている。墓壇は墳丘の東西の中央、南北の北寄りの地点にある。土壇墓は土師器の皿を敷き、その上に頭骨をのせ土を充填し、再度土師器の皿をおいて埋葬を終了する。なお、頭骨以外の骨片は検出されていない。規模は東西0.9m、南北1.6m、深さ35cmを測るが、掘り込み面で検出することができず、断面観察で確認しており、形状は不明である。土壇内の埋土は上層が淡褐色粘質土層、下層が淡灰褐色粘質土層である。

小結 本墳は他の古墳と比較して墳丘規模が小さく、周溝も不鮮明であった。また、掘形と考えられる地点ではまったく石材を検出することができず、石の抜取穴もみられなかった。古墳時代の遺物は一片も出土していない。

上記の点から、もとは石室が築かれていたが、平安時代後期までに掘形もろとも完全に破壊されてしまい、新たに土壇墓が造られたとも考えられるが、他の古墳に比して墳丘が小さいなどの差異もあり、古墳ではなくて墳墓として造られた可能性もある。

D-2 号墳

位置 古墳4基からなるD支群に属し、D-3号墳西側周溝の北への延長線上約4.5mの地点に位置し、D-1号墳の東側周溝からもほぼ等距離にある。

墳丘 封土はすでに失われているが、奥壁が掘形よりも30cm近く突出しているので、築造当初は低い盛土があったと思われる。周溝などの附属施設は検出されなかった。

掘形 掘形は隅が丸くなった矩形を呈し、東西1.7m、南北2.3m、深さは奥壁部で55cm、開口部で40cmを測る。掘形内の埋土は淡褐色土層の一層のみである。

石室 南に開口したコの字形を呈する小石室である。鏡石には高さ40cm、幅50cmの大き

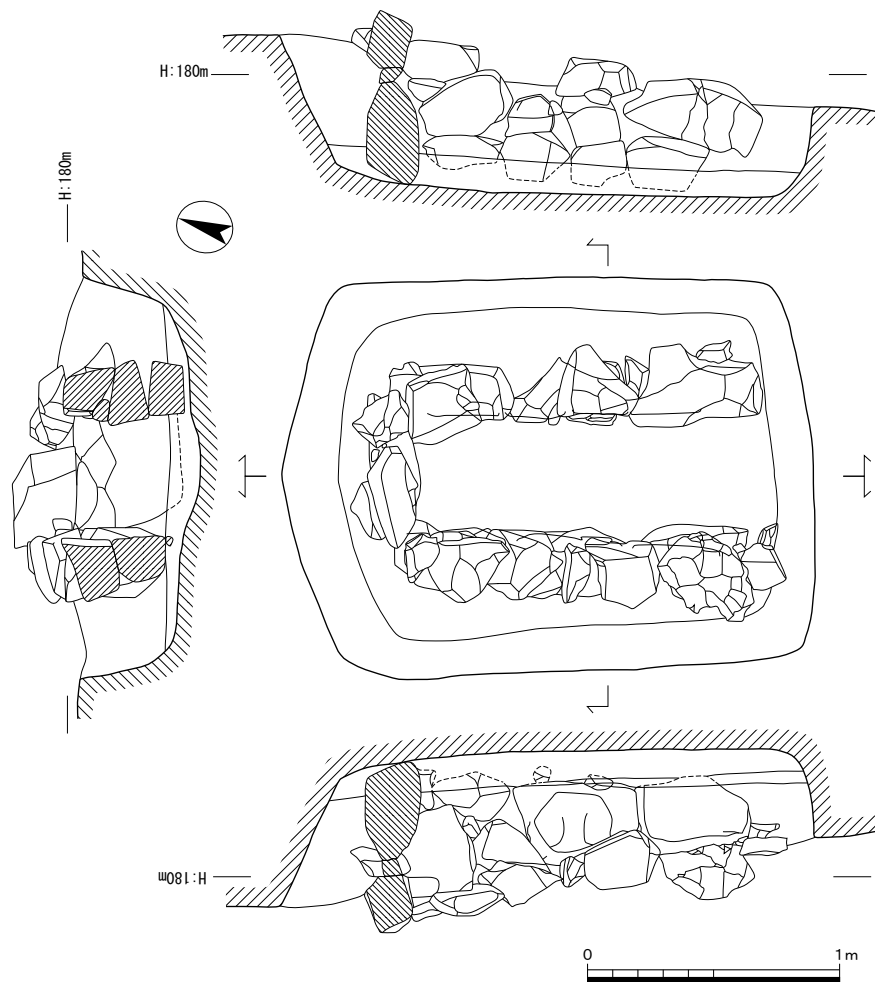


Fig. 10 D-2号墳石室実測図(1:30)

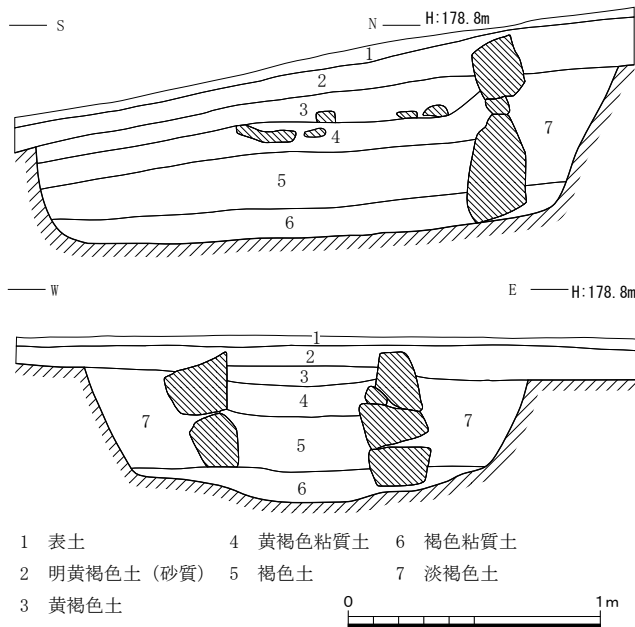


Fig. 11 D-2号墳土層断面図(1:30)

な石が用いられ、その上に一段石を横積みしている。東側壁には大きさの揃った四つの石を基底石として横長に据え、上に一～二段積み重ね、特に開口部には30cm×50cmという大きな石が用いられている。西側壁は開口部から2石は30cm×50cmの大きな石を、奥壁沿いの石は小形の石を基底石として横長に据え、上に一～二段積まれている。石と石の合端もよく、隙間に小石をはさみ込んだりして上下が安定するように組まれている。

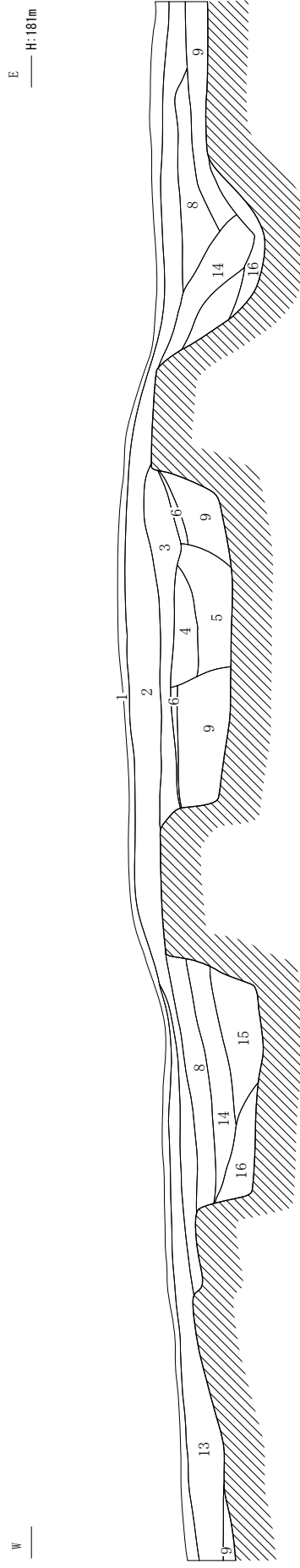
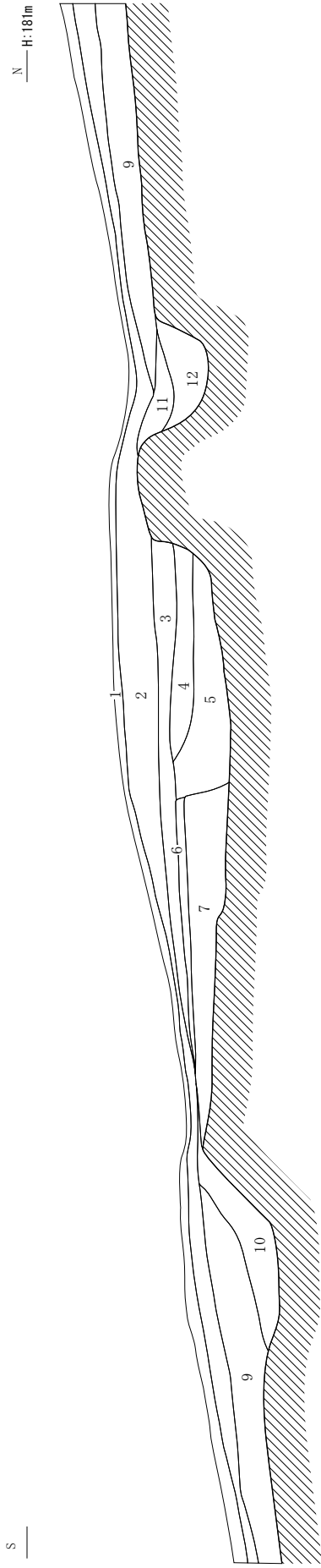
遺物の出土状況 遺物は一片も出土しなかった。

小結 D-2号墳の石室架構法は、まず掘形を穿ち、鏡石と東側壁の基底石を掘形の底面に据え、次に床面を形成している。西側壁の基底石は床面築成後に設置されている。天井石は当初から架構されていなかった可能性が強い。石室内の堆積土は、上より黄褐色土、黄褐色粘質土、褐色土の順にほとんど水平に堆積している。

D-3号墳

位置 D支群のほぼ中央にあり、D-1・D-2号墳の東南に位置する。D-4号とはその溝を接して対角線上に並ぶ。

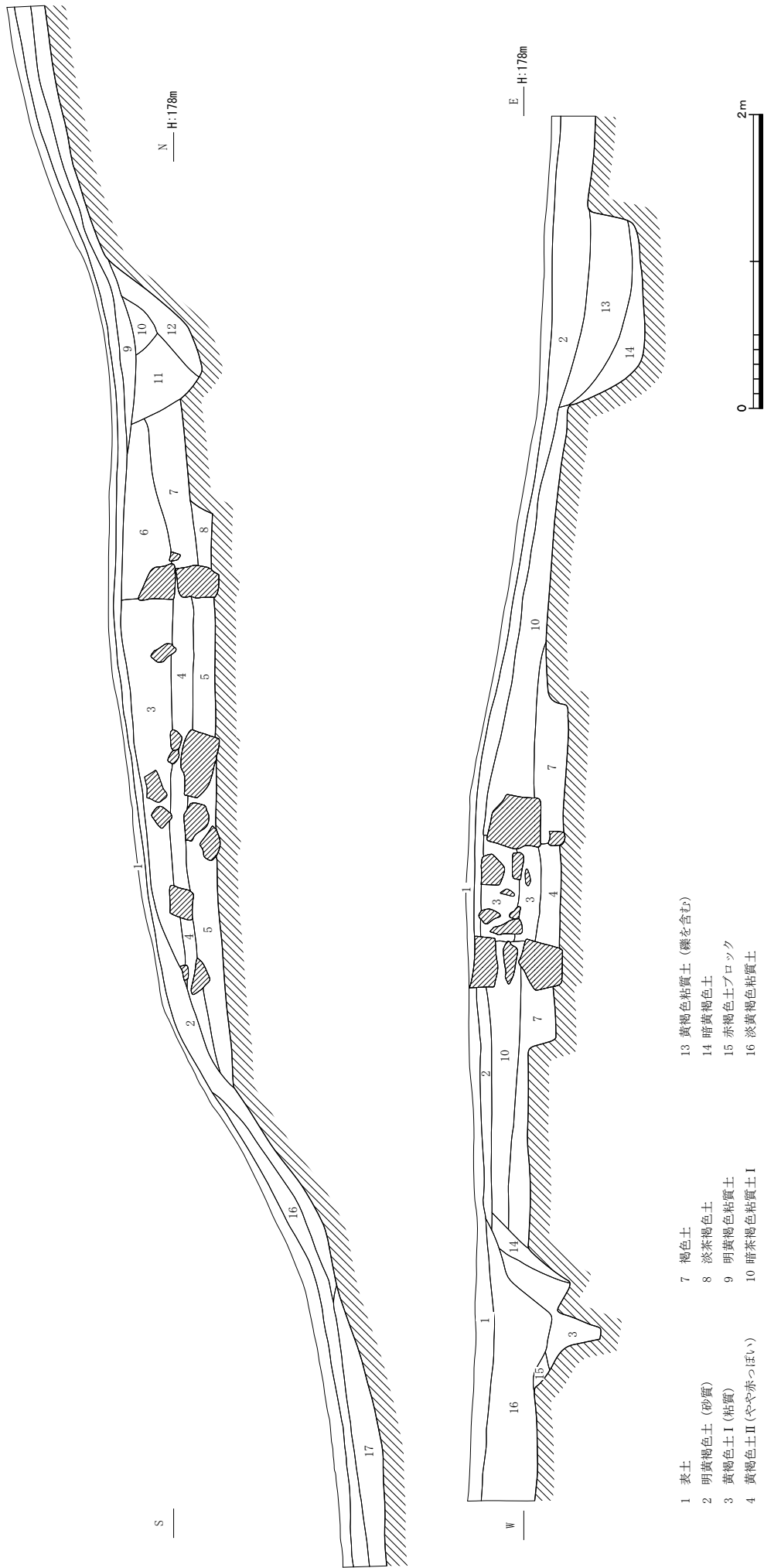
墳丘 墳形は方形を呈し、前方を除く三方に周溝がめぐらされている。附近は地山土の所々に岩盤が露出しており、周溝が岩盤にかかった時は途中で掘削を中止し、溝底も凹凸が激しい。封土は流出した分もあると思われるが、現状で25～50cm残っており、下層は褐色土層、上層は褐色粘質土層である。



- | | | |
|-----------------|--------------------|-----------------|
| 1 表土 | 7 褐色粘質土 | 12 茶褐色土 |
| 2 明黄褐色土 (礫を含む) | 8 黄褐色土I (やや砂質) | 13 黄褐色土IV |
| 3 黄褐色粘質土 | 9 黄褐色土II (礫を含む) | 14 淡黄褐色土 (やや泥質) |
| 4 淡褐色粘質土 (礫を含む) | 10 黄褐色土III (やや粘質) | 15 淡赤褐色土 (やや粘質) |
| 5 淡灰褐色粘質土 | 11 淡茶褐色土 (礫を多量に含む) | 16 赤褐色粘質土 |
| 6 淡黄褐色粘質土 | | |



Fig. 12 D-I号墳土層断面図(1:40)



- | | | |
|--------------------|----------------------|------------------|
| 1 表土 | 7 褐色土 | 13 黄褐色粘質土 (礫を含む) |
| 2 明黄褐色土 (砂質) | 8 淡茶褐色土 | 14 暗黄褐色土 |
| 3 黄褐色土 I (粘質) | 9 明黄褐色粘質土 | 15 赤褐色土ブロック |
| 4 黄褐色土 II (やや赤っぽい) | 10 暗茶褐色粘質土 I | 16 淡黄褐色粘質土 |
| 5 黄褐色土 III | 11 暗茶褐色粘質土 II (礫を含む) | 17 暗黄褐色粘質土 |
| 6 褐色粘質土 | 12 茶褐色粘質土 | |

Fig. 13 D-3号墳土層断面図 (1:40)

掘形 南に開口したコの字形を呈し幅 3.15m、長さ 4.1m、深さは奥壁部で 25cm を測る。石室と掘形の間を裏込め土は、まず奥壁の鏡石を据え、その後に淡茶褐色土をつめる。次に両側壁の基底石を設置し、一部封土を形成しながら褐色土を充填している。

石室 南に開口した無袖の横穴式石室である。比較的大きさの揃った石を使用し、石と石の合端も念入りにつめ、石室の内面も平坦に仕上げられている。奥壁には横長の大きな石を据え付け、さらに一段同様な石を積んでいる。側壁の基底石は、西側壁では比較的大きさの揃った石を、東側壁では小さめの石を使用しており、いずれも横長に据え、二段目からは横積みと小口積みを併用している。特に二段目の石は基底石を支えとして後へせり出し、重心が下方へ働くようにされ、三段目からの石が内にせり出してもバランスが取れるように工夫されている。

開口部の石は両側壁とも小口を下に縦積みにしてあるが、元来は同様な石が 2～3 個南側に積まれていたと思われ、E-9 号墳同様に石の積み方によって玄室部と羨道部が意識的に分離されていたと思われる。

遺物の出土状況 盗掘・攪乱によって原位置を保つ遺物は検出されていない。石室内より須恵器の長頸壺 (20)、墳丘南側裾部より須恵器の杯身 (18) が検出された。また、北側の周溝が完全に埋まって形成された土壌から、焼成不良のため瓦質を呈した須恵器壺の底部 (19) が出土している。

小結 本墳は盗掘を受けており、原位置を保った遺物の出土をみなかったが、石室の構造・規模が E-9 号墳と類似しており、E-9 号墳同様、7 世紀前半代に築造された単葬墓であったと思われる。また、D-4 号墳によって裾部を切られており、D-4 号墳より時間的に先行する古墳であることが判る。

D-4 号墳

位置 北から南へ下降する緩やかな斜面上に築かれている D 支群中で一番南に位置する。D-3 号墳とは同方向に墳丘を形成しており、周溝を挟み北西隅で接する。

墳丘 南側が少し開いた長方形のプランを呈し、前方を除く三方に周溝がめぐらされている。墳丘高は北から南へ傾斜する地形に影響されて一様ではない。封土は掘形と石室の間を充填して暗茶褐色土・褐色土・黄褐色土（礫を含む）の順に盛土されており、現存の厚さは約 35cm である。

掘形 南に開口したコの字形を呈し、長さ 4.4m・幅 2.3m を測る。深さは奥壁部で約 50

cm、中央部東側壁で 35cm を測り、開口部では浅くなる。

石室 南に開口した無袖の横穴式石室である。石室の残存状況は良好で、奥壁部を除きほぼ旧状を示しているものと思われる。全体として乱雑な小口積で、石質は同一であるが、大小まちまちの石でかみあわせをあまり考えず無造作に積みあげられている。基底石は比較的小さな石で、西側壁は大きさの揃った石を用いているが、東側壁は不揃いで所々に隙間が開いている。基底石は横長に据え、二段目からは横積みと小口積みが併用され、基底石が支えの役目を果たしているが、すわりが悪く不安定である。石と石とのかみ合わせが悪く、西側壁の一部が内側にせり出し、内部の壁面は凹凸が激しい。東西両側壁で石の架構法に相違がみられる。

奥壁から約 20cm の地点から 5 ～ 20cm 大の小礫が床面に 0.8 × 1.7m の範囲に敷き詰められており、棺が安置された棺床と思われる。また、開口部に径 25cm ほどの石が 2 個置かれており、閉塞石として用いられたものであろう。

遺物の出土状況 石室内はすでに攪乱を受けており、原位置を保つ遺物はない。石室開口部より土師器の甕 (17)、須恵器の杯身 (16) が出土し、同じく開口部床面より多くの木炭が検出された。墳丘東南裾部から須恵器の杯蓋 (8)、台付長頸壺 (15) が出土し、周溝北西隅からは須恵器の杯身・蓋 (9 ～ 12)、高杯 (13・14) が出土している。

小結 開口部附近で検出した木炭は玄室部の床面全域に敷かれていた可能性が考えられる。石室内の木炭数は先述の雲雀山東尾根・B 支群の古墳中にもみられ、終末期古墳の指標の一つになると思われる。

E-1 号墳

位置 E 支群の中でもっとも東寄りにあり、E-2 号墳の北東に位置する。

墳丘 南側が若干広がる方形を呈し、前方を除く三方に周溝がめぐらされている。封土はすでに大半が流出しており、約 20 ～ 25cm の厚さの盛土が残っており、淡黄灰色土と淡黄褐色土の 2 層に分かれる。

掘形 南に開口するコの字形を呈し、幅 2.1m、長さ 5.9m、深さは奥壁部で 50 cm を測る。

石室 盗掘・攪乱によってすでに大部分の石が抜き取られ、わずかに奥壁と奥壁寄りの東側壁の一部が遺存するのみである。西側壁の抜取穴が検出されており、奥壁部の幅は約 90cm に復元することができる。

奥壁には割石を 2 個横長に据えて鏡石とし、東側壁も割石を基底石とし、その上は小口

積みにし、基底石を支えとして大きく奥へ石の重心がかかるようになっている。

石室内の施設として奥壁より約40cmの地点で30cm大の石が2個、同じく1.7mの地点でも同大の石が2個床面に据え付けられた状態で検出されており、棺台の役目を果たしたと思われる。

遺物の出土状況 石室内からは鉄釘が4本出土したのみで、周溝西側の底面近くから須恵器の杯身(30)、北側周溝内より土師器の甕(29)が出土している。

小結 本墳は奥壁と東側壁の一部を残して破壊されているが、西側壁の石の抜取穴から石室の幅が約0.9mであると推定でき、他の無袖の横穴式石室と同様の規模・内容をもっていたと考えられる。

E-2号墳

位置 E支群の東南隅に位置し、主尾根の鞍部から南へ緩やかな傾斜をもつ斜面上に築造されている。

墳丘 調査前の墳丘は中央部が落ち込んでいたが、周囲の地形から著しく盛り上り、一見して古墳であると識別することができた。墳形は南方が若干広がった方形を呈する。高さは、北から南へ傾斜する地形に影響されて一様ではないが、墳頂面は地形に左右されない水平面を有したとみられる。前方を除く三方に周溝がめぐっているが、墳丘の北側にはV字形の溝を掘り、尾根から墳丘を切断し、南・西にはU字形の溝を掘ってそれにつなげている。墳丘の北側基底部はほぼ垂直に削り出されている。

墳丘の盛土は、石室構築と併行したと推定されるが、盛土は西側と東側では様相が異なる。西側では10～20cmの厚みをもつ層が、ほぼ水平に重ねられ版築を思わせるが、東側は不整序に盛られている。

掘形 南に開口したコの字を呈し、幅2.5m、長さ6.7mを測る。底面はほぼ水平に保たれており、深さは奥壁部で70cmを測り、開口部で浅くなる。

石室 長い羨道をもった両袖式の横穴式石室で、南に開口している。西側壁と奥壁、東側壁の奥壁に接した部分と羨道の一部が検出されたが、西側壁には袖部が認められ、東側壁では玄室のラインよりも羨道のラインが内へ40cmほど入り込み、袖部を有したことは明らかで、両袖式の横穴式石室と確認した。

奥壁には薄い板石状の鏡石を3石縦積みにし、上段には小ぶりの石を小口積みに行っている。両側壁の基底石には小ぶりの割石を横長に据え、二段目からは横積みにされ、石と石

との合端には小石や粘土をつめて内面をよく揃えてある。羨道部は玄室のものとは比べて大きめの石を基底石として横積みにされており、築成当初より一段積みであった可能性が考えられる。高さは三段より上が完全に破壊されているので不明である。また天井石の有無も確認し得ないが、後述するように奈良時代に石室が再利用されているので天井石が架構されていた可能性が考えられる。

遺物の出土状況 本墳を築成した時に副葬されたと思われる遺物は、羨道部から出土した須恵器の高杯(42)、周溝から出土した須恵器の杯身(40)、そして墳丘南裾部から出土した須恵器の杯蓋(33・34)である。玄室の床面直上から奈良時代の須恵器の杯蓋(36)・杯身(41・43)・壺の高台部(44)、土師器の甕が出土し、石室内の埋土から平安時代中期の須恵器瓶子(49・50)、平安時代後期の土師器皿(45～47・51～53)が出土している。また、墳丘裾部から7世紀後半代の須恵器杯蓋(35)、奈良時代の須恵器杯蓋(37～39)が出土している。

小結 本墳の築造時期は、埋葬当初の状態、遺物が出土しなかったため、ある程度の幅をもって考えなければならない。出土した遺物の中でもっとも古いものは7世紀前半の土器であるから、これより古くなる可能性はなく、また石室の構造からみると7世紀の後半まで下るとは考えられない。したがって本墳の築造時期は7世紀の前半から中葉にかけてと考えられる。

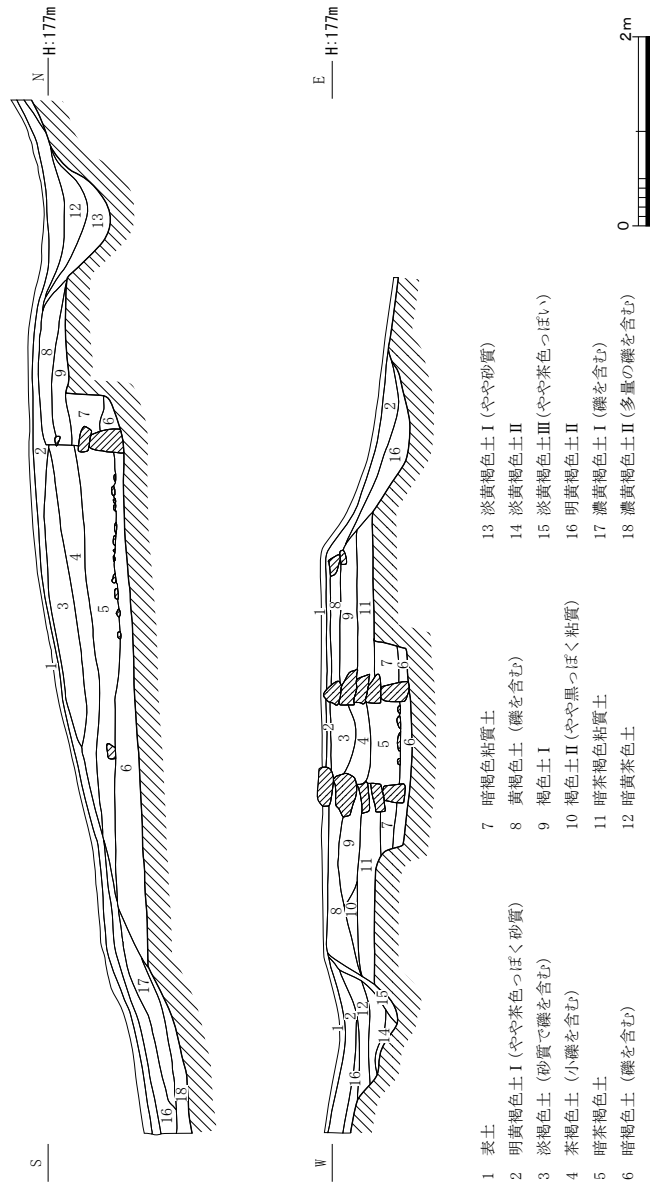
玄室の床面から出土したのは奈良時代の土器群であり、古墳築造当初に副葬されたと思われる遺物は開口部と墳丘の南裾部から出土した。奈良時代にこの石室が再利用され、その時に築造当初の副葬品が取り除かれたと思われる。奈良時代まで空間としての石室が遺存していたとも考えられ、天井石も架構されていたのではないかと考えている。また、石室内の埋土から平安時代の土器が検出されたことから、この時期に盗掘・破壊されたと思われる。

本墳は旭山古墳群中でも最大級の規模をもつ古墳の一つであり、五つに分かれる支群の中でもっとも有勢なE支群の中心となる古墳であり、旭山古墳群の築造集団を統括する地位にあった人物の墓とも思われる。

E-3号墳

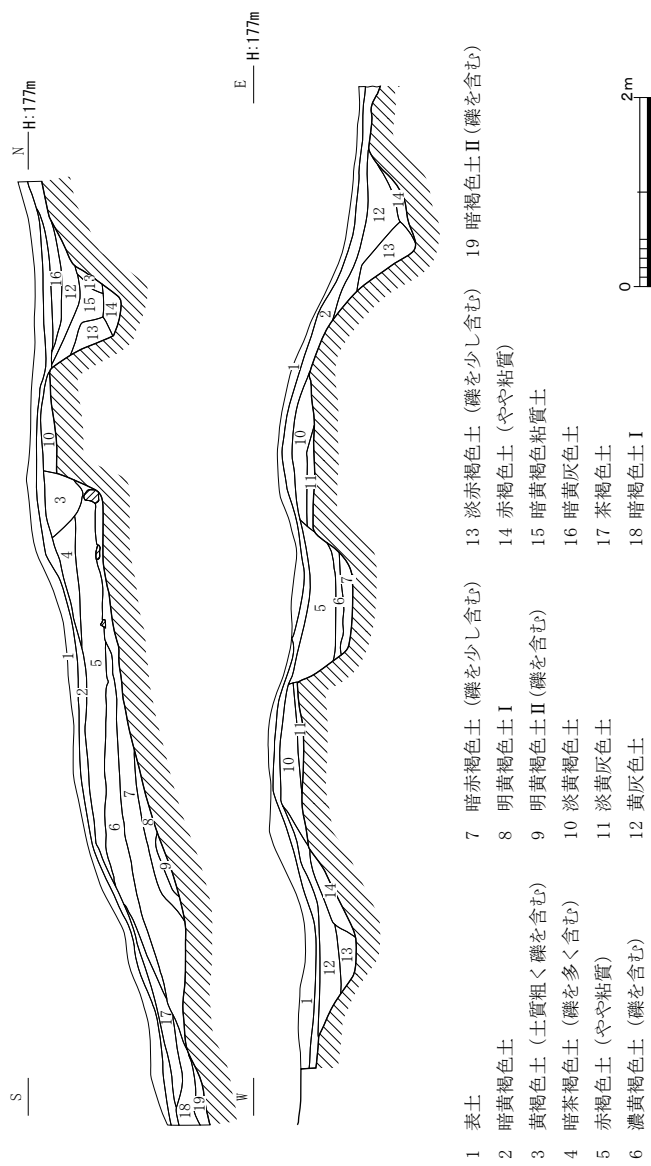
位置 E-1号墳の北半寄りで西方へ約1.5mの地点に位置する。

墳丘 現状では封土がすでに失われてしまっているが、石室が掘形より上に突出していることから、もとは低い盛土を有していたと思われる。周溝などの附属施設は検出されな



- | | | |
|-----------------------|----------------------|------------------------|
| 1 表土 | 7 暗褐色粘質土 | 13 淡黄褐色土 I (やや砂質) |
| 2 明黄褐色土 I (やや茶色っぽく砂質) | 8 黄褐色土 (礫を含む) | 14 淡黄褐色土 II |
| 3 淡褐色土 (砂質で礫を含む) | 9 褐色土 I | 15 淡黄褐色土 III (やや茶色っぽい) |
| 4 茶褐色土 (小礫を含む) | 10 褐色土 II (やや黒っぽい粘質) | 16 明黄褐色土 II |
| 5 暗茶褐色土 | 11 暗茶褐色粘質土 | 17 濃黄褐色土 I (礫を含む) |
| 6 暗褐色土 (礫を含む) | 12 暗黄茶色土 | 18 濃黄褐色土 II (多量の礫を含む) |

Fig. 14 D-4号墳土層断面図(1:80)



- | | | | |
|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|
| 1 表土 | 7 暗赤褐色土 (礫を少し含む) | 13 淡赤褐色土 (礫を少し含む) | 19 暗褐色土 II (礫を含む) |
| 2 暗黄褐色土 | 8 明黄褐色土 I | 14 赤褐色土 (やや粘質) | |
| 3 黄褐色土 (土質粗く礫を含む) | 9 明黄褐色土 II (礫を含む) | 15 暗黄褐色粘質土 | |
| 4 暗茶褐色土 (礫を多く含む) | 10 淡黄褐色土 | 16 暗黄灰色土 | |
| 5 赤褐色土 (やや粘質) | 11 淡黄灰色土 | 17 茶褐色土 | |
| 6 濃黄褐色土 (礫を含む) | 12 黄灰色土 | 18 暗褐色土 I | |

Fig. 15 E-1号墳土層断面図(1:80)

かった。

掘形 掘形は南側がやや広がる南北に長軸をもつ矩形を呈している。長さ1.6m、中央部での幅1.3m、深さは奥壁部で32cmを測る。

石室 南に開口したコの字形を呈する小石室である。奥壁には45cm×20cm大の石を鏡石として据え、東西両側壁は一～二段石を積んで構築しており、特に開口部に大形の石を縦積みを使用している。

遺物の出土状況 石室内から棺として

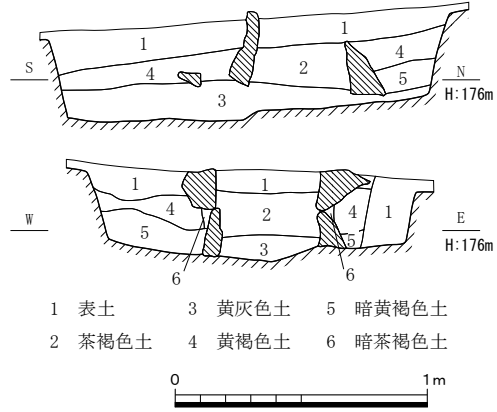


Fig. 16 E-3号墳土層断面図(1:30)

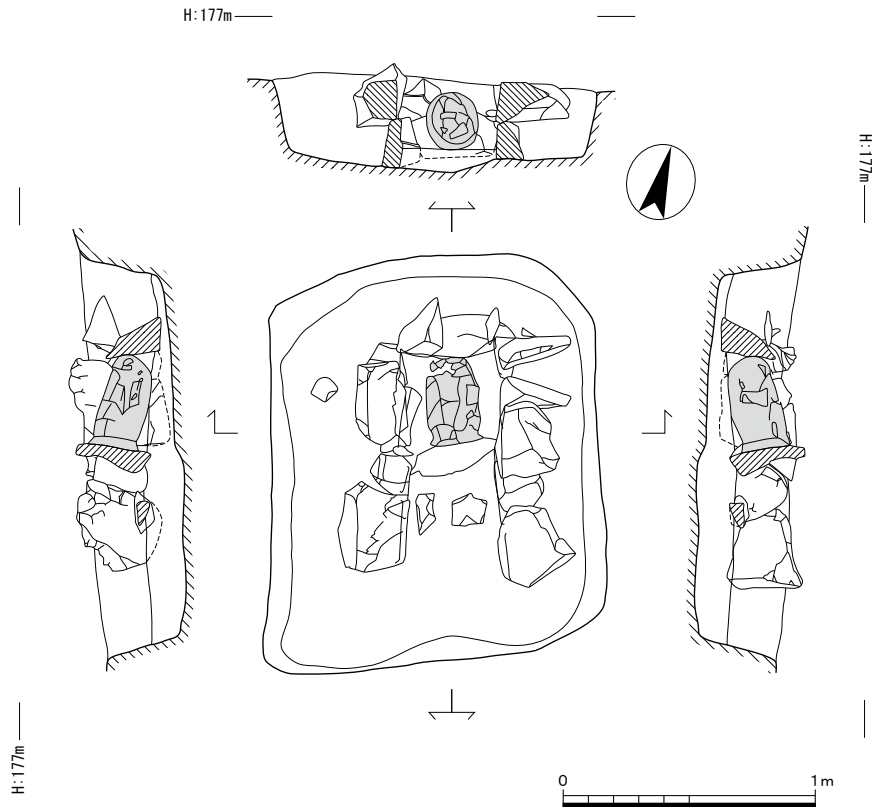


Fig. 17 E-3号墳石室実測図(1:30)

の土師器の甕(32)が底部を奥壁に向けて寝かせて埋納してあり、口縁部は板石でぴったりと蓋をしている。他に遺物は検出されていない。

小結 本墳の石室は一見箱式棺のようであるが、これは横穴式石室の退化した形態であると思われる。なぜなら、奥壁が意識されて大きめの石を鏡石として用い、反対側は石が積まれずに開口している。明らかに横穴式石室としての形態を有している。さらに棺としての土師器の甕が埋納されており、口縁部を塞いだ板石は玄室部と羨道部を区切る閉塞石としての役割をもつと思われる。

甕棺は小児葬に用いられたと考えるのが妥当であろうが、成人の洗骨葬か火葬骨を埋納したものである可能性もありうる。むしろ、小石室そのものが横穴式石室の退化した形態であり、他の小石室が成人葬とみられることから本墳の甕棺は後者に属するのではないかと考えている。

E-4号墳

位置 北から南へ緩やかに傾斜する主尾根上に築かれたE支群のもっとも北方に位置し、E-5号墳とは溝を挟んで南西の隅で相接する。

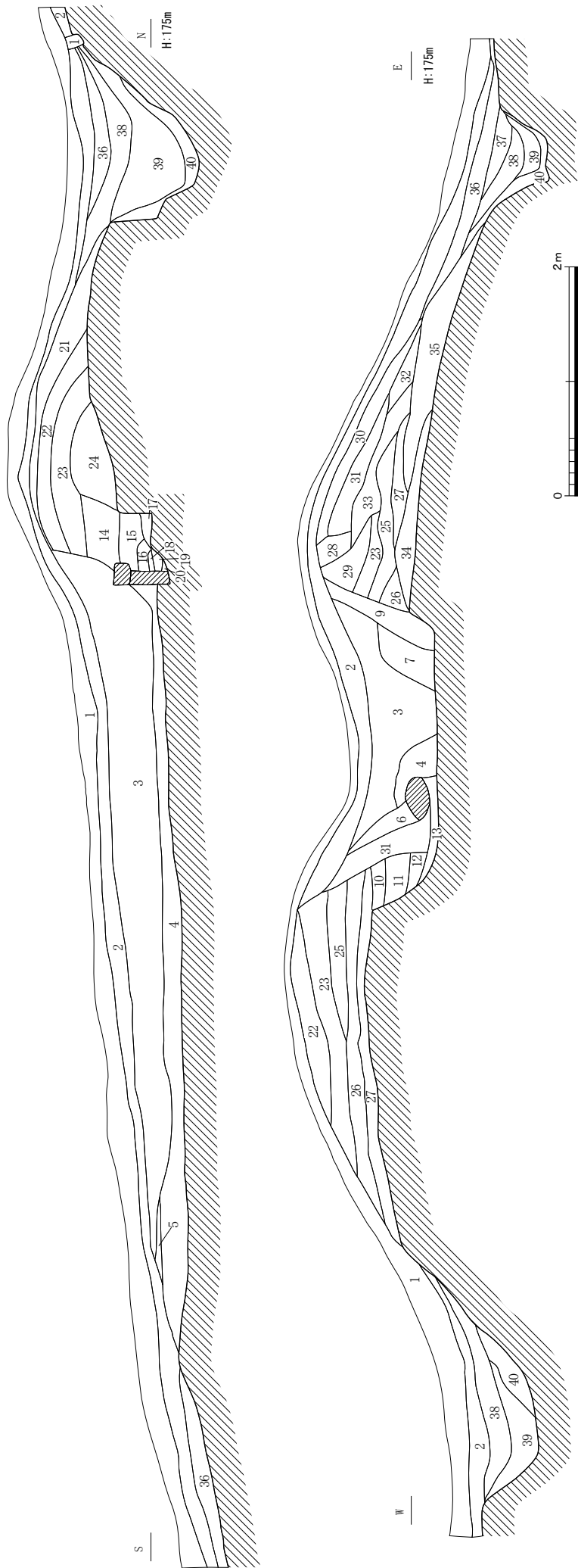
墳丘 南北が東西に比して若干長い方形の墳丘である。封土は失われて旧状は判らないが、前方を除く三方に溝がめぐらされている。墳丘の主軸方向はE-5号墳と同じ、ほぼ南北を指す。

掘形 南に開口したコの字形を呈し、長さ4.9m、中央での幅2.1m、深さは奥壁部で55cmを測る。石室の東側壁が奥壁部の一部を残して抜き取られ、東側で検出された輪郭が掘形の輪郭であると断定できないが、旧状をそれほど変化させていないと思われる。石室との裏込めは、最下層に地山に近い礫が混じった暗赤褐色土で固められ、次に暗赤茶色土、上層には若干粘性をおびた暗赤灰色土が積まれている。

石室 奥壁と西側壁、そして東側壁の奥壁部の一部を残すのみであるが、もとは無袖の横穴式石室であったと思われる。

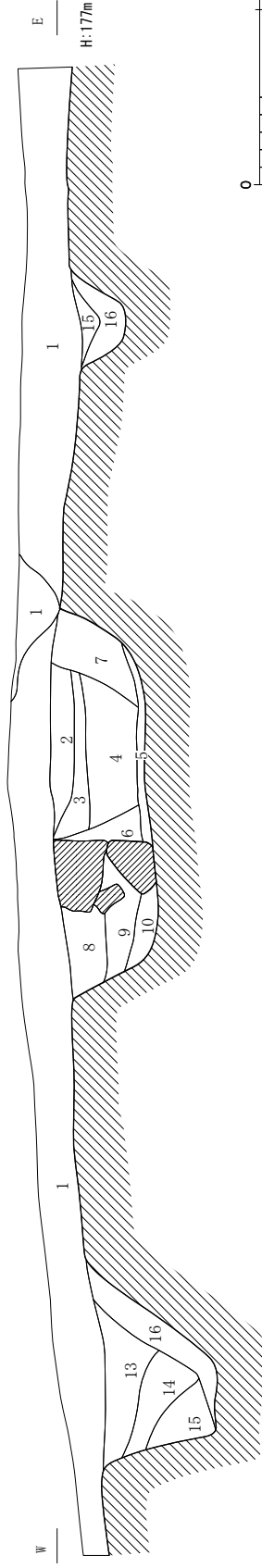
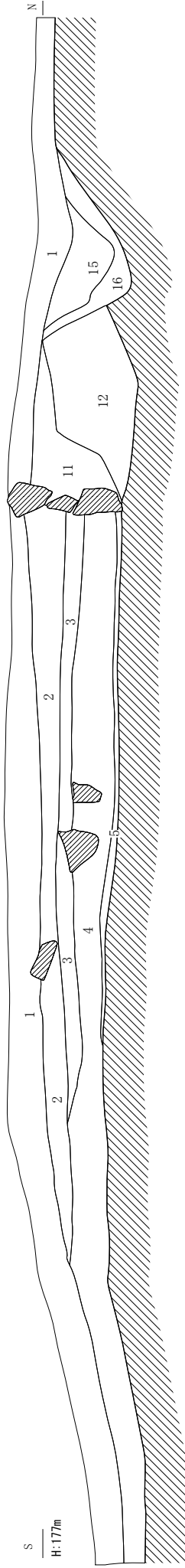
使用されている石材は小ぶりながら大きさを揃え、石室の内側の面は平滑に仕上げられている。積み方も他の古墳に比べ丁寧で、小口積よりむしろ切石積みに近い。基底石は横長に立てて据え付けられる。

遺物の出土状況 石室開口部から自然釉のかかった須恵器の高杯(57)と周溝内から受け部をもった須恵器の杯身(56)が出土した。また墳丘上の表土を剥いている時に灰釉の長頸壺(58)、奥壁部の裏込めの土である暗赤灰色土層から弥生式土器が出土している。



- | | | | |
|---------------------------|----------------------|------------------|-----------------------|
| 1 表土 | 11 淡黄褐色土I(やや赤っぽい) | 21 赤褐色粘質土 | 31 明黄褐色土III(褐色が強い) |
| 2 暗黄褐色土 | 12 明黄褐色土I(小礫を含みやや粘質) | 22 淡赤褐色土II | 32 暗赤褐色土 |
| 3 黄褐色土I(土質密で黄色ブロックを含む) | 13 明黄褐色粘質土 | 23 淡黄褐色土III | 33 黄褐色粘質土III(やや黄色が強い) |
| 4 黄褐色土II(Iより黄色くブロックを含まない) | 14 濃茶褐色土 | 24 暗茶褐色土 | 34 明黄褐色土IV(黄色が強い) |
| 5 黄褐色土III(礫を比較的多く含む) | 15 明黄褐色土II(土質粗い) | 25 黄褐色粘質土II | 35 暗茶褐色粘質土 |
| 6 黄褐色土IV(やや赤っぽい) | 16 淡黄褐色土II(土質粗い) | 26 淡黄褐色土IV | 36 黄灰色土I |
| 7 黄褐色土V(やや砂質) | 17 淡赤褐色土I(礫を含む) | 27 暗黄茶色土 | 37 黄灰色土II(礫を含む) |
| 8 暗黄褐色粘質土I | 18 濃黄褐色土I | 28 濃黄褐色土II(礫を含む) | 38 淡黄褐色土IV |
| 9 暗黄褐色粘質土II(やや黄色が強い) | 19 淡赤褐色土I | 29 淡黄褐色土V(礫を含む) | 39 淡赤褐色土III(礫を含む) |
| 10 黄褐色粘質土I(やや黒っぽい小礫を含む) | 20 赤褐色土I(やや粘質) | 30 濃赤褐色土 | 40 赤褐色土II(礫を含む) |

Fig. 18 E-2号墳土層断面図(1:50)



- | | | |
|---------------------|---------------------------|-----------------|
| 1 表土 | 7 淡赤茶色土Ⅱ(やや粘質) | 12 暗茶褐色土 (礫を含む) |
| 2 淡茶褐色土 | 8 暗赤灰色土 (質均一) | 13 赤灰色土 |
| 3 茶褐色土 | 9 暗赤褐色土 (地山石 径3~4cm 大を含む) | 14 褐色土 |
| 4 淡黄茶色土 (礫を含む) | 10 暗赤茶色土 | 15 淡赤褐色土 |
| 5 赤茶色土 (粘質) | 11 暗赤灰色粘質土 | 16 赤褐色土 |
| 6 淡赤茶色土Ⅰ(やや砂質で礫を含む) | | |

Fig. 19 E-4号墳土層断面図(1:40)

小結 本墳は今回調査した中でただ1基、墳丘の主軸方向と石室の主軸方向とで大きなずれを生じるという特異な現象を示した。すなわち、墳丘の主軸はE-7号墳、隣接するE-5号墳と同方向であるのに対して、石室の主軸はE-1・E-2号墳の主軸方向に合わせて築かれている。墳丘が、まず周溝をめぐらせることによって設定され、次いで石室掘形・石室が造られるのが順序だと思われる。だからまずE-5・E-7号墳に合わせて墳丘を築造し始めたものが、何らかの事情が生じてE-1・E-2号墳と同方向に石室を構築したと考えられる。どのような事情が生じたのか判らないが、本墳は明らかにE-5・E-6号墳とで小支群を形成しているのに、その石室の方向が別の小支群と同じなのである。このことから考えると、各小支群内の古墳をつなぐ紐帯がそれ程強くないのではなかろうか。各小支群の独立性よりも、それらを集めた支群段階での紐帯の方が強いと思われるのである。各小支群は通常の群集墳で理解されているような、ある家族の累世的な墓域とは性格を異にしたものとみられる。このことから、旭山古墳群は、通常とは異なる特殊な集団の、その規制下に造墓された古墳群と考えることが可能である。

E-5号墳

位置 主尾根が平坦部から南へ傾斜する変換点のすぐ下に立地し、E-4号墳の墳丘中央部の溝を挟んだ西側から築造されている。

墳丘 西南隅は削平されて形を崩しているが、東西に比して南北が若干長い方形の墳丘である。封土はすでに失われているが、前方を除く三方に溝がめぐらされている。

掘形 掘形は盗掘によって破壊されてしまっている。掘形と盗掘坑の輪郭が重複している可能性もあるが、埋土の堆積状況の観察からは確認できなかった。

石室 石材は完全に抜き取られており、わずかに原位置を失った石材を数個検出したにすぎないが、玄室部で石材の抜取穴を検出することができた。奥壁部分とそれに沿った側壁数石分で、両側壁の抜取穴の間隔は約1mであり、石室そのものの内規はもう少し小さくなって80cm前後になると考えられる。

遺物の出土状況 完全な破壊墳であるが、出土遺物の量は比較的多く、開口部附近と前方裾部の流出土から検出されている。開口部からは須恵器の長頸壺(67)・杯身(62～65)、杯蓋(59～61)、鉄釘が出土している。

小結 本墳は石室が完全に盗掘によって破壊されているが、石室の抜取穴によって南に開口した、幅約80cmの横穴式石室であったと考えられる。

E-6号墳

位置 E-4号墳のほぼ中軸線の南への延長線上約2.5mの地点に立地し、E-2号墳の周溝北西隅、E-5号墳南東隅からもほぼ等距離にある。

墳丘 すでに封土は失われているが、石室が掘形より上に突出していることから、もとは低い盛土を有していたと思われる。周溝などの附属施設は検出されなかった。

掘形 南に開口するコの字形を呈し、幅1.5m・長さ2.3mで、深さは奥壁部で40cmを測る。掘形内の埋土は下層に粘土っぽい土が、上層には若干礫が混じる土が積まれている。

石室 一見箱式棺のようであるが、奥壁が意識されており、また掘形の南方が開いていることから、この石室は横穴式石室の退化した小石室である。幅50cm、高さ30cm、厚さ10cmの板石状の割石を鏡石として北側に据えている。側壁は15×35cm大の割石を横積みみ基底石として据え、二段目からは小口積みにして石室の内面をきれいに揃えてある。

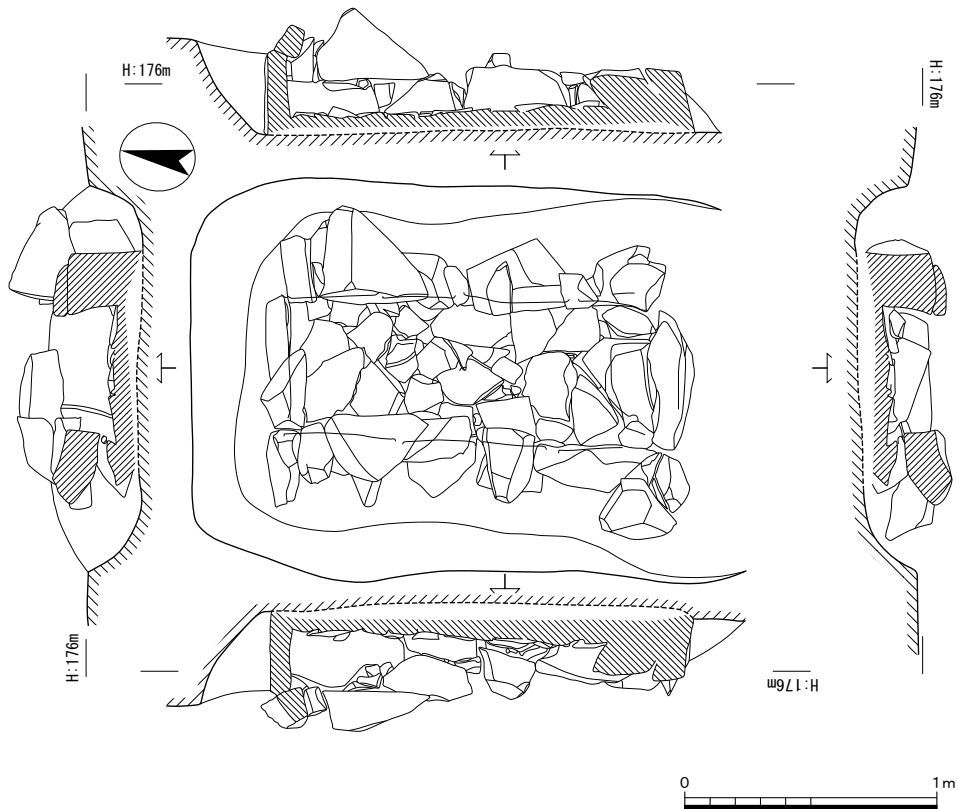
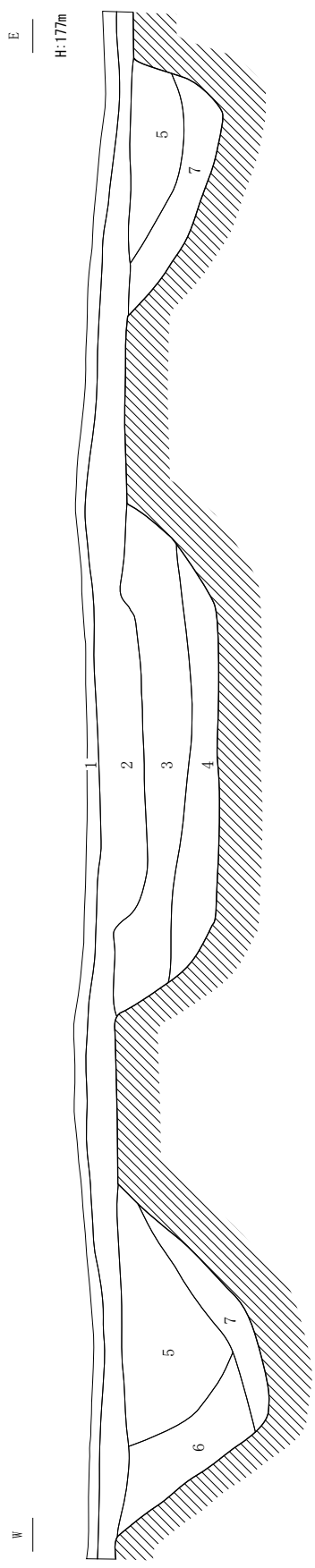
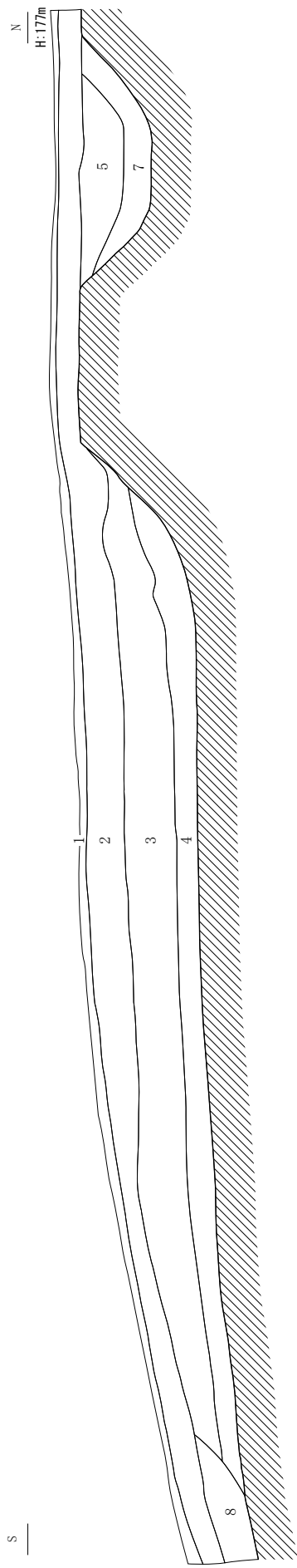


Fig. 20 E-6号墳石室実測図(1:30)



- 1 表土
- 2 暗黄褐色土
- 3 黄褐色土 I (赤色の礫を含む)
- 4 黄褐色土 II (土質細かい)
- 5 褐色土
- 6 淡赤褐色土
- 7 赤褐色土 (地山石を含む)
- 8 暗茶褐色土

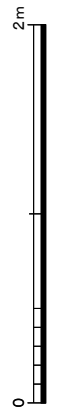
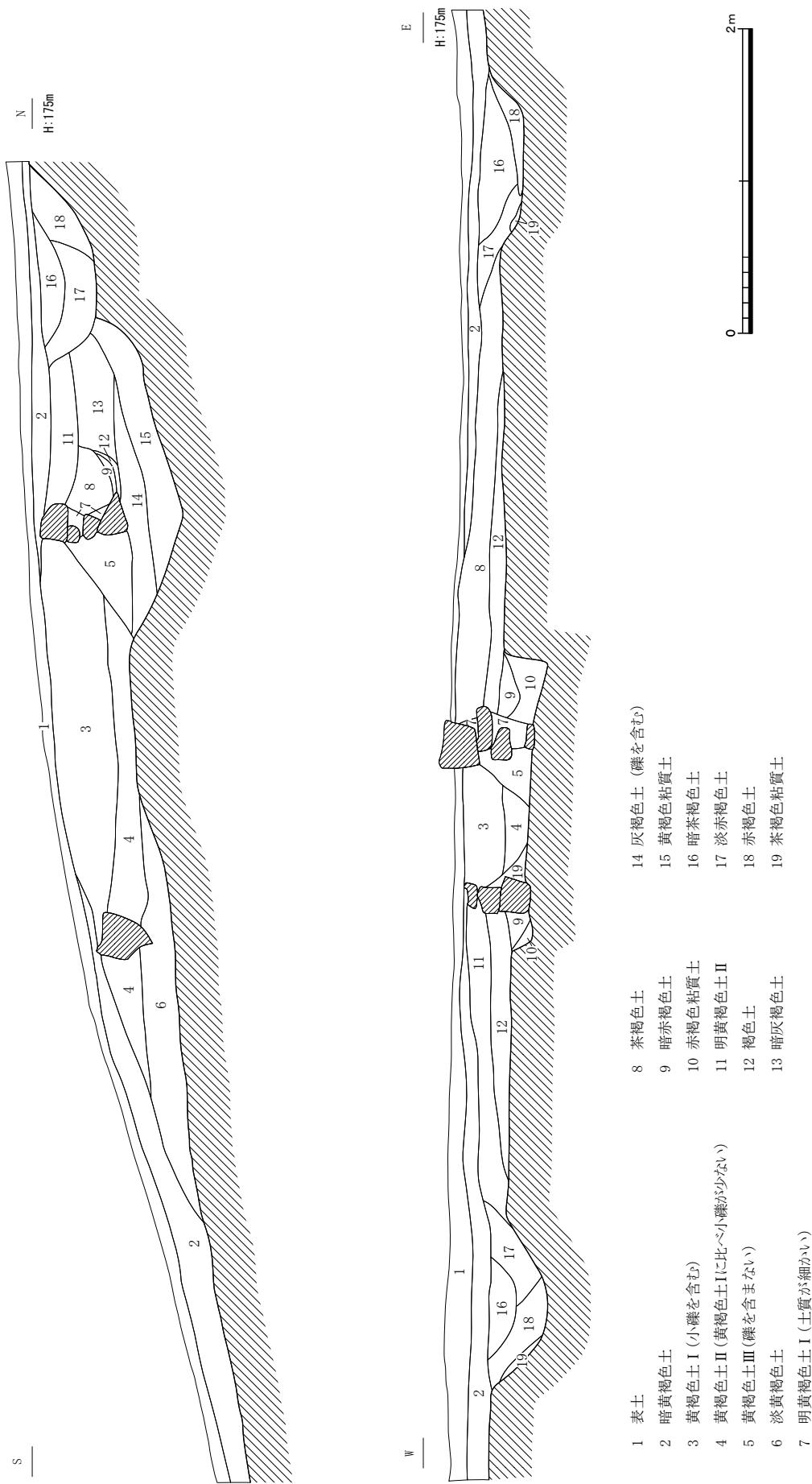


Fig. 21 E-5号墳土層断面図(1:40)



- | | | |
|------------------------------|-------------|----------------|
| 1 表土 | 8 茶褐色土 | 14 灰褐色土 (礫を含む) |
| 2 暗黄褐色土 | 9 暗赤褐色土 | 15 黄褐色粘質土 |
| 3 黄褐色土 I (小礫を含む) | 10 赤褐色粘質土 | 16 暗茶褐色土 |
| 4 黄褐色土 II (黄褐色土 I に比べ小礫が少ない) | 11 明黄褐色土 II | 17 淡赤褐色土 |
| 5 黄褐色土 III (礫を含まない) | 12 褐色土 | 18 赤褐色土 |
| 6 淡黄褐色土 | 13 暗灰褐色土 | 19 茶褐色粘質土 |
| 7 明黄褐色土 I (土質が細かい) | | |

Fig. 22 E-7号墳土層断面図(1:40)

開口部は前後2石でもって閉塞されている。また床面全体に15×20cm大の板状の割石が敷き詰められている。石室内の埋土は茶褐色土層の一層のみである。

遺物の出土状況 遺物は一片も出土しなかった。

小結 遺物は出土しなかったが、他の小石室同様7世紀中葉の築造と考えられる。石室の造りは丁寧で、調査した古墳の中で唯一床面全体に敷石をもっており、小児葬とみるより成人葬であったと考えられる。

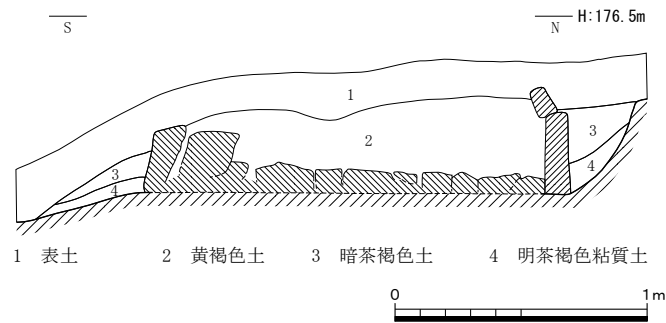


Fig. 23 E-6号墳土層断面図(1:30)

E-7号墳

位置 E支群のほぼ中央に位置し、E-2号墳と同じ等高線(175m)上に北周溝を形成しており、E-5号墳から約3mの距離をおいて同一線上に並ぶ。

墳丘 調査前は古墳として識別できる起伏はなく、表土を剥いだ段階で石室の一部と周溝が検出され、古墳として確認できた。周溝は前方を除く三方にめぐらされている。封土の盛土は2層に分けることができ、下層は褐色土層、上層は明黄褐色土層である。

掘形 南に開口したコの字形を呈し、幅は奥壁部で1.75m、開口部で2.1mを測り、長さは3.5mである。深さは奥壁部で30cmであり、開口部で浅くなる。石室との間の裏込めは、上層に暗赤褐色土層、下層には赤褐色土層を積み、特に石と石の隙間には土質が細く粘性をおびた明黄褐色土層が充填されている。

石室 南に開口した無袖の横穴式石室である。奥壁は三段積みで、鏡石は2石を用いて石の合端をよく合わせている。両側壁はともに大きさの揃った石を基底石として用いており、二段目からは横積みと小口積を併用している。使用石材の大きさは不揃いであるが、石と石の隙間に小石をかみ合わせバランスよく積まれており、内部の壁面は平らによく揃っている。また両側壁の開口部の石は40×50cmの大きな石が小口を下に縦積みで使用され、それより奥壁側の側壁とは明らかに石の積み方が違っている。

石室に附属する施設には、棺台として使用されたとと思われる石と、開口部で閉塞石が検出されている。

遺物の出土状況 石室からは奥壁西隅より鉄製刀子(37)、中央部からも刀子(33)が1点と金環(36)が出土している。土器は1点も出土しなかった。

小結 本墳は無袖式ではあるが、石の積み方によって羨道部と玄室部を意識的に分離すると思われる。羨道部の石は比較的大きく、小口を下に縦積みにしてあり、玄室部は横積みと小口積みを併用して三～四段積まれている。

E-8号墳

位置 E支群の西北部に位置し、E-9・E-10号墳が共有する中央の溝の北への延長線上約5.5mの地点に築造されている。

墳丘 封土はすでに削平されてしまっているが、石室が掘形より上に出ていることから、もとは低い盛土があったものと思われる。周溝などの附属施設は検出されなかった。

掘形 南に開口したコの字形を呈し、長さ2.3m・幅1.5m・深さは奥壁部で35cmを測る。

石室 上部は若干攪乱を受けているが、ほぼ旧態をとどめていると思われる。四壁がめぐらされているが北側が奥壁となり、南側は開口部の閉塞石として用いられたものである。奥壁は背の低い中広の石を三段積みに構築している。両側壁は基底石を縦積みにし、二段積まれている場合は上段の石は小口積みになっている。使用されている石

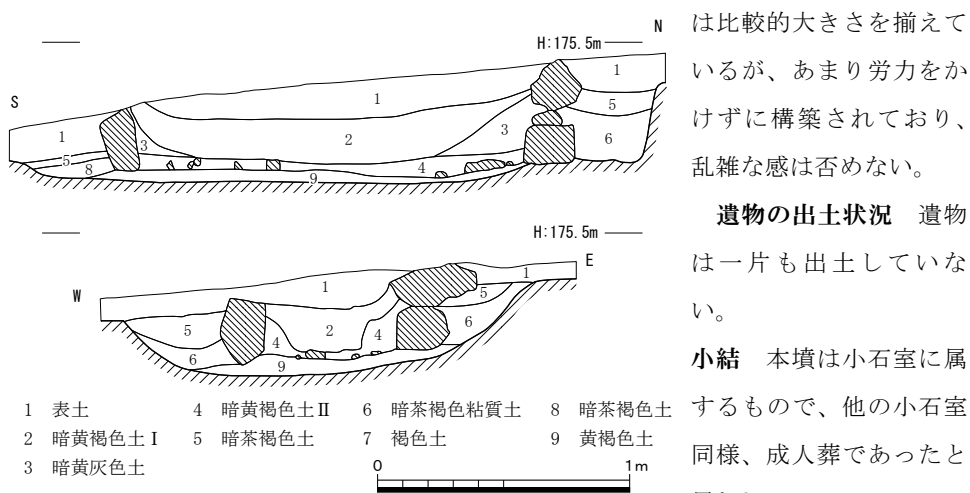


Fig. 24 E-8号墳土層断面図(1:30)

E-9 号墳

位置 主尾根の鞍部からなだらかに下降する南斜面に築造され、E支群の中で溝を共有したE-10号墳とともに最南端に位置する。

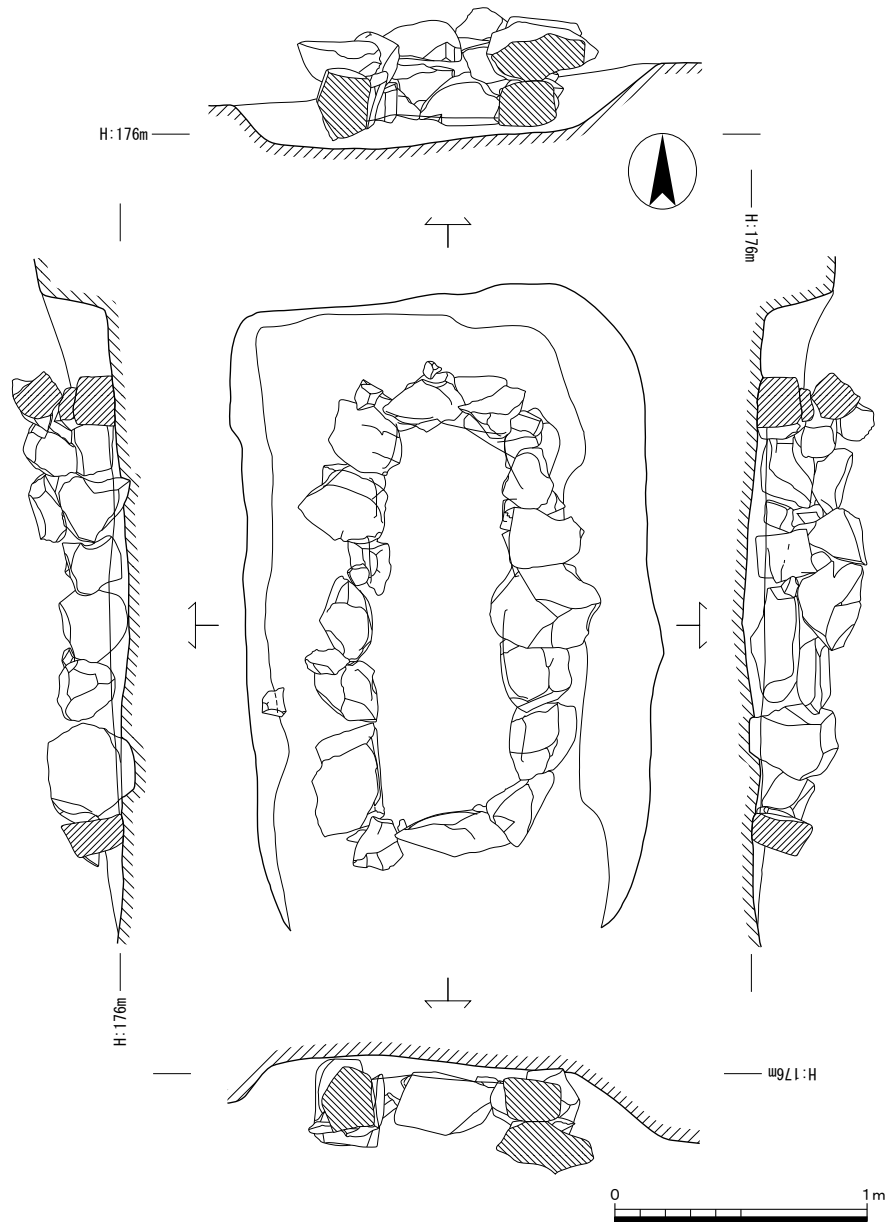


Fig. 25 E-8号墳土層断面図(1:30)

墳丘 調査前の墳丘は、E-10号墳と西の裾を接するので両墳の境は決し難く、かろうじて二つの高まりが周辺地形から識別される程度であった。

墳形は石室主軸方向に若干長い方形を呈している。墳丘高は封土がかなり流出しているために築造当初の値を明らかにすることはできない。現状では北から南へ傾斜する地形に影響され北側がもっとも高くなっている。前方を除く三方に周溝がめぐらされている。

掘形 南に開口したコの字形を呈し、幅2.4m、長さ3.6mを測る。掘り込みは墳丘基部から行われているが、傾斜する地形に影響されて奥壁部がもっとも深く0.9mを測り、開口部の近くで浅くなり、開口部より2～3石目で途切れる。

石室 南に開口する狭長な無袖の横穴式石室である。奥壁には鏡石として70×60cm大の不定形な板石が掘形の底部を掘りくぼめて縦積み据えられ、内面が垂直になるように配慮している。また鏡石が不定形であるために、生じた隙間を床面では小石をつめ、上部は鏡石の傾きに応じて小石の大きさを変え、水平面を形成している。

側壁は石の積み方によって羨道部と玄室部に意識的に分離されている。羨道部は東西両側壁とも開口部から3石分で、小口を下に縦積みにしてあり、その上には石を積まなかったとみられる。玄室部では基底石を横長に比較的浅く据えており、二段目からは横積みと小口積みを併

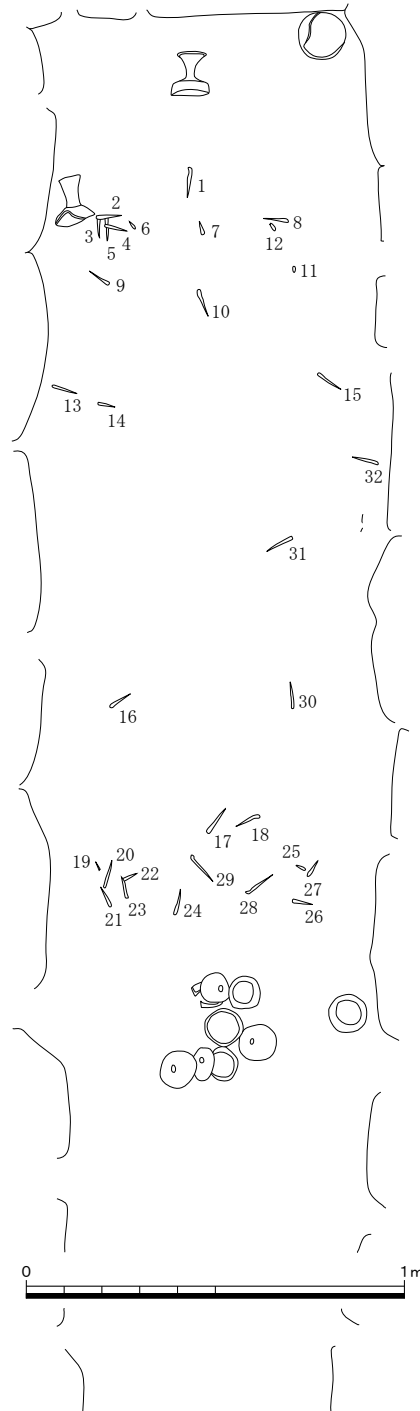
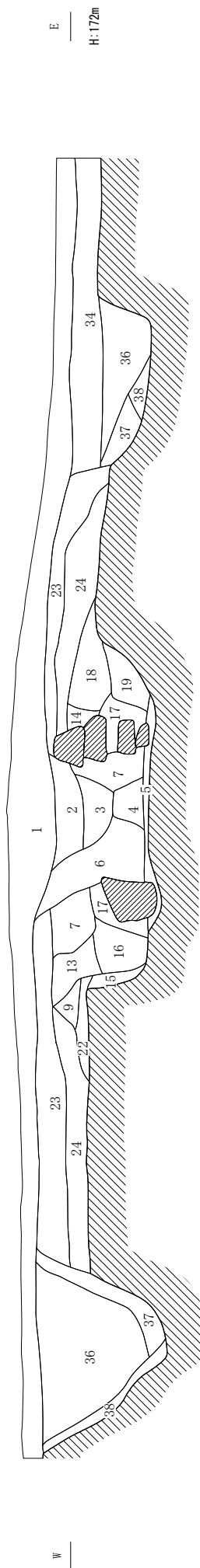
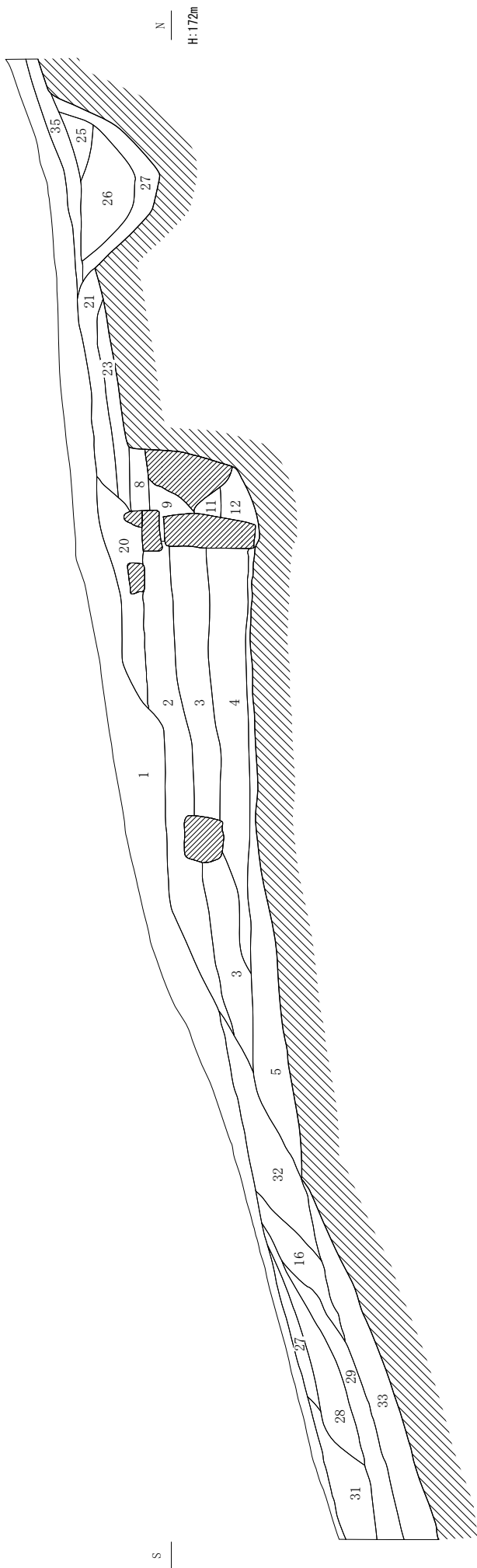
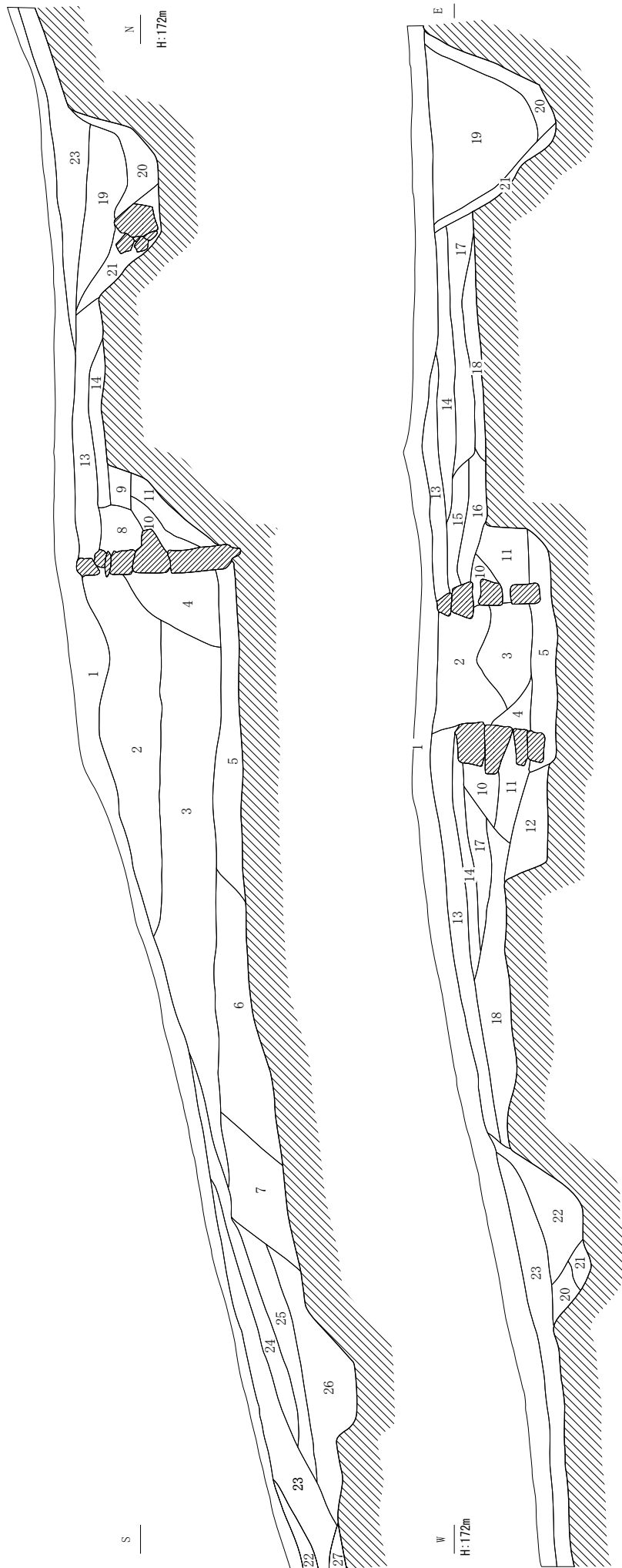


Fig. 26 E-9号墳遺物出土状況(1:20)



- | | | |
|----------------------------|--------------------|---------------------------|
| 1 表土 | 14 淡黄褐色土II(粘質) | 27 明黄褐色土I(土質粗い) |
| 2 黄褐色土I(粘質) | 15 暗黄褐色粘質土I | 28 明黄褐色土II(土質粗く細かい礫を含む) |
| 3 黄褐色土II(径1~2cmのブロックを含む) | 16 暗黄褐色粘質土II(礫を含む) | 29 暗黄褐色粘質土II(黒っぽく細かい礫を含む) |
| 4 黄褐色土III(径2~3cm大のブロックを含む) | 17 濃黄褐色粘質土 | 30 暗黄褐色粘質土III(土質密) |
| 5 赤茶色土(礫を含む) | 18 黄褐色粘質土I | 31 黄褐色粘質土II(やや暗い 土質は密) |
| 6 暗黄褐色土(やや粘質) | 19 赤褐色粘質土(礫混) | 32 淡黄褐色粘質土(やや黒っぽい) |
| 7 黄褐色土III(土質細かい) | 20 淡黄褐色土IV(砂質) | 33 暗黄褐色粘質土IV(やや黒っぽい) |
| 8 濃茶褐色土 | 21 淡黄褐色土I(小礫を含む) | 34 明黄褐色土III |
| 9 黄茶色土 | 22 茶褐色土I(小礫を含む) | 35 茶褐色土II(やや赤っぽい) |
| 10 暗茶褐色土I | 23 淡黄褐色土V | 36 明黄褐色土IV(礫を含む) |
| 11 暗黄茶色土(粘質) | 24 黄茶色土 | 37 淡赤褐色土 |
| 12 暗茶褐色土II(やや黒っぽい) | 25 淡茶褐色土I | 38 赤褐色土 |
| 13 淡黄褐色土I(礫を含む) | 26 淡茶褐色土II(粘質) | |

Fig. 27 E-9号填土層断面図(1:40)



- | | | |
|------------------------------|-------------------------------|------------------------------|
| 1 表土 | 10 暗茶褐色粘質土 (多くの礫を含む) | 19 暗黄褐色粘質土 (多くの礫を含む) |
| 2 暗黄褐色土 I (粘質で径0.5~1cmの礫を含む) | 11 明茶褐色粘質土 (礫を含む) | 20 淡赤褐色土 |
| 3 暗黄褐色土 II (径1~2cm大の礫を含む) | 12 淡赤茶色土 (礫を含む) | 21 赤褐色土 |
| 4 暗黄褐色土 III (小礫が多い) | 13 淡黄褐色土 I (砂質で礫を含む) | 22 淡黄褐色土 (多くの礫を含む) |
| 5 赤茶色土 (礫を含む) | 14 淡黄褐色土 II (土質密で径1~2cmの礫を含む) | 23 黄褐色土 II (土質粗く一部に礫を含む) |
| 6 暗赤茶色土 (礫を含む) | 15 黄褐色土 I | 24 黄褐色土 III (土質密) |
| 7 濃赤茶色土 (土質密) | 16 淡茶褐色粘質土 | 25 明茶褐色土 (土質粗く一部に礫を含む) |
| 8 淡茶褐色土 (多くの礫を含む) | 17 淡茶褐色土 | 26 茶褐色土 II |
| 9 濃黄褐色土 (やや黒っぽい) | 18 茶褐色土 I (小礫を含む) | 27 黄褐色土 IV (やや黒っぽい土質は密 礫を含む) |

Fig. 28 E-10号墳土層断面図(1:40)

用して構築している。また上面が内側にせり出す持ち送りの技法が用いられている。全体に石材の大きさが不揃いなために隙間が多く、そこを小石や粘土で埋めている。石室の裏側も粘土をつき固めて安定を保つようにしてある。附属施設として床面に0.8×2mの範囲に小礫が敷かれており、この範囲と重なって木棺に使用された鉄釘が出土しているため、この敷石は棺床としての機能を有したと思われる。石室は築造当初の状態をよく保っており、天井石は当初から架構されなかったものとみられる。

遺物の出土状況 遺物は墳丘前面と石室内から出土している。特に石室内の遺物はほぼ原位置を保っていると思われる。墳丘前面から土師器の杯(81)・甕が散乱した状態で出土している。石室内の羨道部と玄室部の境から須恵器の杯身(73～78)・蓋(68～72)が5セット出土し、身に蓋を被せた状態のものも検出されている。奥壁沿いでは須恵器の高杯(79)・台付長頸壺(80)が出土しており、それらと須恵器杯身・蓋の間を埋めるように鉄釘が32本検出された。木棺の小口にあたる部分に集中し、等間隔に底板を打ち付けたと思われる鉄釘が検出され、頭を下にして直立した状態で出土したものもあった。

小結 本墳では石室内の遺物の出土状況がよく原位置を保ち、後世の攪乱を受けていなかったため、副葬品の埋納状況、器種の組み合わせを把握することができた。また鉄釘の出土状況から棺の位置・寸法を復原することも可能となった。その結果、この石室には遺体が一体しか埋葬されず、追葬も行われなかったことが判明した。このことから他の狭長な無袖式石室も、規模・構造が本墳と同様であるため、一体埋葬で追葬もなされなかったものと推断することができる。

E-10号墳

位置 E支群の南西隅に位置し、E-9号墳との中央で溝を共有して平行に並んでいる。

墳丘 やや前方が開き気味の方墳である。傾斜地に築造されているため墳丘高は一様ではない。封土の現存厚は約40cmで、2層に分かれる。上層は比較的粘性の強い土で、下層は小礫を含む土である。附属施設として前方を除く三方に周溝がめぐらされている。

掘形 南に開口したコの字形を呈し、幅1.9m、長さ2.9mで石室の約2/3で切れ、それより前は土を積んで水平な床面を造っている。深さは奥壁部で85cmを測る。

石室 無袖の横穴式石室で、残存状態は良く、東側壁の開口部を除いてほぼ築造当初の状態を保持すると思われる。無袖式ではあるが、床に石が石室を分割する形に3石据え付けてあり、それによって石室を玄室部と羨道部とに分離していると思われる。

奥壁には鏡石として、高さ 30cm、幅 60cm、厚さ 15cm の板石状の割石を横口を下に立てて据え、上は石を三段横積みになっている。玄室部は基底石を横長に据え付けているが、東側壁の奥から 5 石目の基底石は小口を下に縦積みにされている。この位置は玄室部と羨道部の境にあたり、この石は袖石としての痕跡を有しているものと思われる。基底石より上は、三～四段の比較的大きさの揃った石を小口積みと横積みを併用して積みあげ、合端を合わせて隙間に小石をつめ、丁寧に築成されている。下段より順次内側に持ち送っている。羨道部は一～二段が積まれるだけであるが、西側壁の羨門部の石は他の石材に比して大きな石が使用されている。この西側壁の羨門部から西へ続く石列が 2 石分認められ、外護列石の残存したものと思われる。天井石は検出されなかった。

遺物の出土状況 石室内から出土したのは鉄製の刀子 1 点 (34) のみで、玄室部のほぼ中央から出土している。西側に続く外護列石の前で須恵器の長頸壺 (95)、杯蓋 (85)、杯身 (88・89) がほぼ完全な形で出土しており、墓前祭祀に供されたものではないかと思われる。他の遺物は周溝・墳丘裾部から出土したものである。

小結 本墳の石室は、規模・形状ともほぼ築造当初の旧状を保つと考えられるが、天井石の存在が確認できなかった。天井石が持ち去られたとも考えられるが、他のどの古墳にも天井石架構の痕跡は認められず、当初から天井石は架構されなかった可能性が高い。

SK1

E-6 号墳の移築作業中に検出された土壌で、E-4 号墳東側溝の南への延長線上約 2m にあり、E-6 号墳の北約 1m の距離にある。形状は長軸 1.5m、短軸 0.7m の矩形を呈し、長軸は N45°W の傾きをもつ。深さは 6～10cm で、上部は削平されてわずかに底面近くを残す。埋土は黒褐色土の一層である。出土した遺物は南東隅で検出された土師器の甕の

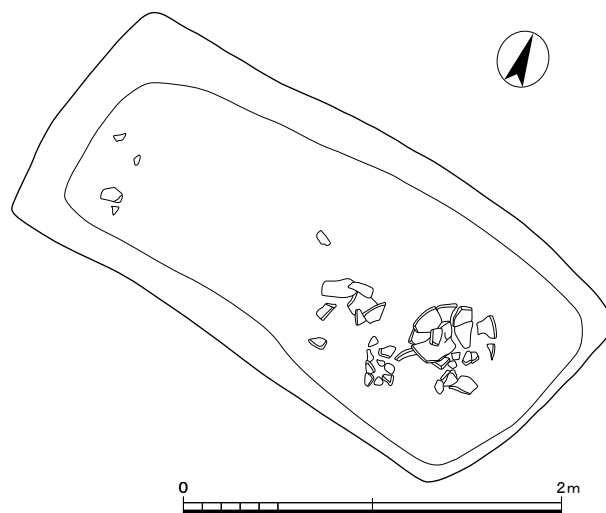


Fig. 29 SK1平面実測図(1:40)

みである。この甕はE-3号墳の甕と同じように棺として用いられたものと考えられる。ただE-3号墳の場合は石室内に埋納されたものであるが、SK1は土壌内に直葬されており、この相違は被葬者の階層差に起因するものと思われる。

2 古墳時代以降の遺構

古墳時代以降の遺構には平安時代の墳墓・土壙群、時期は不明であるが石列も検出されている。また、瓦質の羽釜、須恵器の小型壺が完形で出土しており、蔵骨器として埋納された可能性が十分に考えられる。どれも埋葬に関係した遺構と思われ、古墳群終焉後も長く墓地として利用され、平安京の葬地として有名な鳥部野の一角を形成していたものであろう。

1号墳墓

1号墳墓はC支群の東南隅に立地し、主尾根と南西にのびる支脈との間の谷部に築造されている。なお同じ谷筋に数基の墳墓の存在が確認されている。

高さ0.4m、底辺で東西2.85m、南北2.9mのほぼ方形の盛土をもっており、頂部には方形に区画された配石施設を有する。原位置を保っているのは南辺の30cm大の5石と、同大の北辺の一石で、小口を外側に揃えて並べてある。もとは一辺約1.5mの方形に区画されていたと考えられ、その区画の中に径15～20cm大の礫が敷き詰められている。盛土は2層からなり、方形の区画に用いられた石は下層の上面に据え付けられており、その中の敷石は上層の半ばから布設されている。

盛土を除去した段階で、一辺約1.3mの方形の土壙が検出された。深さは35～45cmを測り、四壁と底部は火熱を受けて赤く焼けている。土壙内の埋土は最上層を除いて各層から多量の炭と少量の人骨片が検出されている。遺物は土壙内からは一片も検出できず、盛土から土師器の皿の小片(97)・須恵器の瓶子片(98)・灰釉の長頸壺片(99)が出土した。須恵器の瓶子片からみて平安時代中期に営まれたものとみられる。

1号墳墓は火葬墓に属し、土壙の四壁・底部が火熱を受けて赤く焼けていたことから、この中で死体が荼毘に付されたと思われる。さらに検出した人骨片が土壙内の各所に散乱した状況で出土しており、火葬後に攪乱した形跡が窺われる。つまり火葬後に別の容器に選骨したのではないかと考えられる。

土壙群

主尾根の鞍部で東西 60m・南北 50m の平坦な場所に土壙が集中して検出された。本来地山の一層上の層から形成されていたと思われるが、その時点では輪郭をはっきりつかむことができず、地山面上で確認することができた。

おおかたの土壙は矩形を呈するが、不整形なものも多い。土壙の埋土中から出土した遺物はなく、時期・性格とも不明である。ただ (X0・Y90) 地点から土師器の皿が集中して出土している。土器は平安時代から鎌倉時代の時期が与えられる。また瓦質の羽釜、瓶子が完形で出土しており、掘形は検出できなかったが蔵骨器として埋納されたものと思われることから、土壙群も墓壙として営まれた可能性が考えられる。

石列

主尾根の中央より南寄りの西斜面で石列を検出した。尾根にほぼ平行に約 36m 築かれており、北端でほぼ直角に折れて谷の方へ約 9.5m のびる。径 20cm 大の自然石を一〜二段積んでいる。谷に下がる方の石列は二列になっている。尾根と平行する石列は現在一列であるが、部分的に二列になる個所があり、もとは二列であったと思われる。石の面は外側に揃えてあり、二列の場合には両列の間に土を充填してある。石は地山に直接設置されている。

石列を覆う土から皇宋通寶・寛永通寶などが出土しているが、石列の時期を確定するような遺物は出土していない。ただ、すぐ上の平坦地に営まれている土壙群と関連して造られた可能性が考えられる。

第IV章 遺 物

1 古墳時代の遺物

土器

古墳群が造営された時期のものには、須恵器の杯身・蓋、長頸壺、台付長頸壺、高杯、甕、横瓶、提瓶、平瓶、甕、土師器の杯、甕がある。原位置を保って出土したものはE-3号墳の棺として使用された土師器の甕、E-9号墳の石室内とE-10号墳の外護列石の前面から出土した土器群、C-3号墳の石室内より出土した須恵器の平瓶と甕がある。

出土遺物の大半は須恵器(特に杯身・蓋)で、単独の古墳に副葬されたものは少数である。須恵器の杯についてみると、蓋と身が逆転する直前の形態のもの(杯H)と逆転して蓋につまみが付くもの(杯G)があり、いずれも口径10cm前後の小形品である。^{註1}

杯Hは、身が深めで底部と体部の境が明瞭、受け部が狭く立ちあがりが高く内傾するもの(10・56)と、身が浅くて受け部が外方へのび、立ちあがりが高く直立するもの(11)の2種がある。蓋は天井部と体部の境が不明瞭で丸味をおびる。

杯Gの蓋には、偏平で器高が低く、かえりの先端が口縁端部より下方へ突出するか、ほぼ同一になるもの(1・2・8・33・59・60)と、器高が高く、かえりの先端が口縁端部より下には突出しないもの(68～72)とがある。傾向として前者には乳首形のつまみが付き、後者には偏平な宝珠つまみが付くことが多い。杯身は、体部・口縁部が垂直に近く立ちあがるものと若干外方へ開くものがあるが、いずれも底部はヘラ切りのまま未調整である。E-9号墳の場合をみると、天井部が高くかえりが突出しない蓋と体部・口縁部がほぼ垂直になる身がセットになる。

(9)のように口径が大きく天井部が高い蓋は、高く外方にしっかり踏ん張った高台をもつ杯(杯B)の蓋になると思われる。

高杯には杯部と脚部の高さがほぼ同じもの(14・42・57・93)と脚部の方が高いもの(79・87)があるが、どちらも小形で脚部に透かしをもたない。

これら一群の須恵器は、『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』に7世紀代の土器をI～V期までに編年されている中のⅡ期の土器にあたり、実年代で7世紀前半から中葉に位置づけられる。遺物をみるかぎり、型式差はなく同一時期の所産と思われる。

土器の生産地についてであるが、明らかに胎土が違うものが二種類ある。一つは暗青灰色を呈し、胎土中に径1～2mm大の砂粒を多量に含むもの、もう一つは淡灰色で白っぽく精良な胎土のものである。前者は天智陵付近窯跡の採集品と、後者は岩倉幡枝付近の窯跡の採集品と類似しており、山科と岩倉の窯業生産地から須恵器が供給された可能性が十分に考えられる。また、(20・94・95)などは近江・東海の特徴をもった須恵器ではないかと思われる。

土師器の甕はいわゆる近江型の甕に属する長胴のもので、(32)は内外面とも丁寧な縦方向の刷毛による調整が施され、(82)は口縁端部近くまでハケメが施されて口縁内部にヘラ記号を有する。他にSK1より出土した(129)がある。

金属製品

出土した金属製品の大半が木棺に使用された鉄釘で、他に鍔・鋌・刀子・金環がある。

鉄釘 すべて鍛造製であり、頭の成形は一端を薄く叩きのばし、一方に折り曲げて造られている。長さは7.7cm～9.1cmで断面は矩形を呈する。

鍔(38) 鍛造製で長さ8.75cmを測り、脚部は楔形を呈する。脚部の長さは1.2cm、0.5cmと不揃いである。

鋌(35) 頭部は7角形を呈し、胴部長2.5cmで、断面は3.5×3mmの矩形を呈する。他の鉄釘の木目よりみれば木棺には厚さ約3.5cmの板材を使用していたとみられ、本品が板の打ち付けに使用されたとは考えられず、装飾など他の用途に供されたものと思われる。

刀子(33・34・37) E-7号墳から2点とE-10号墳から1点出土している。(34)は切っ先を欠損しているがほぼ完形で、現存長12.8cm、刃部は7cmで関部は明瞭である。(37)は現存長4.6cmで関部を残すのみである。(33)は切っ先を欠くがほぼ完形で現存長

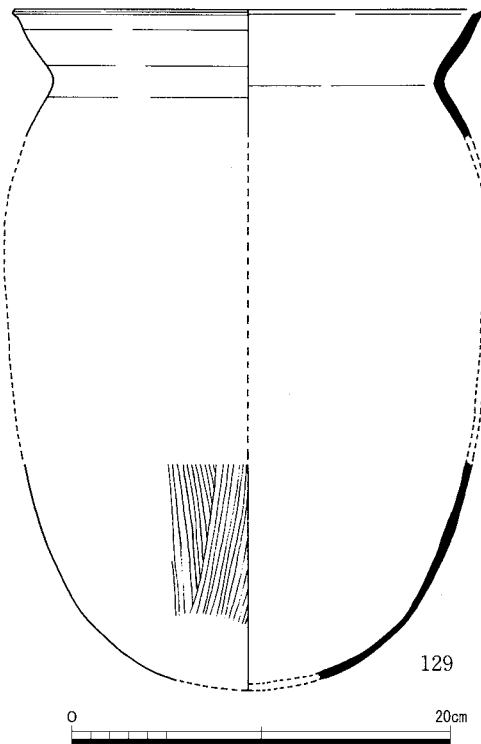


Fig. 30 SK1 出土土師器甕 (1:4)

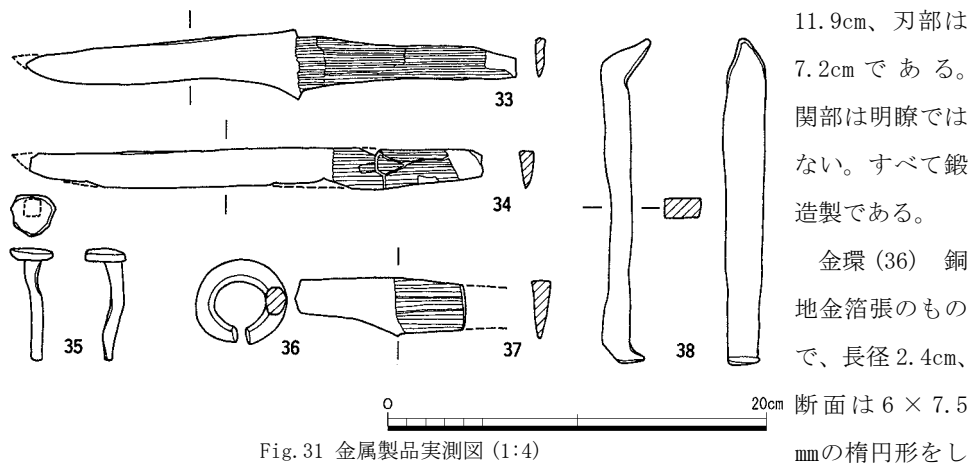


Fig. 31 金属製品実測図 (1:4)

11.9cm、刃部は7.2cmである。関部は明瞭ではない。すべて鍛造製である。
金環 (36) 銅地金箔張のもので、長径 2.4cm、断面は 6 × 7.5mm の楕円形をし

ている。

他に鉄滓が数点、E-2 号墳 (39) ・ E-10 号墳 (40) から出土している。

2 その他の時代の遺物

古墳時代以降の遺物

古墳時代以降の遺物には古墳の再利用に使用されたもの、土壌群に関連したものなどがある。E-2 号墳の石室内からは奈良時代の土器群が出土している。また D-1 号には石室を完全に破壊して造営された平安時代の墳墓の副葬品として土師器の皿 (21 ~ 28) が埋納されている。

土壌群・1号墳墓、古墳の再利用に埋納された土器は、奈良時代から鎌倉時代までの年代を与えられる。それは、当地が鳥部野の一角の葬地として営まれた年代を示すものである。

他に和銅開寶、皇宋通寶、嘉慶通寶、道光通寶、寛永通寶などの古銭が出土しているが、すべて表土掘り下げ中に検出されたもので、遺構から出土したものではない。

弥生土器

遺構から出土したものではなく、古墳を形成した時の旧表土中に包含されており、出土地

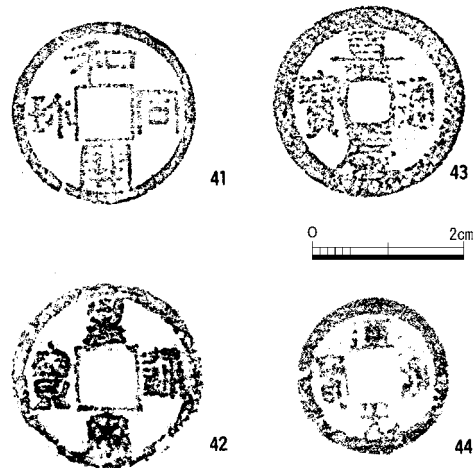


Fig. 32 古銭拓影 (1:1)

点はほぼE支群の分布と重なる。中期前半のもの(130～132)と、中期後半のもの(133～135)に分かれる。

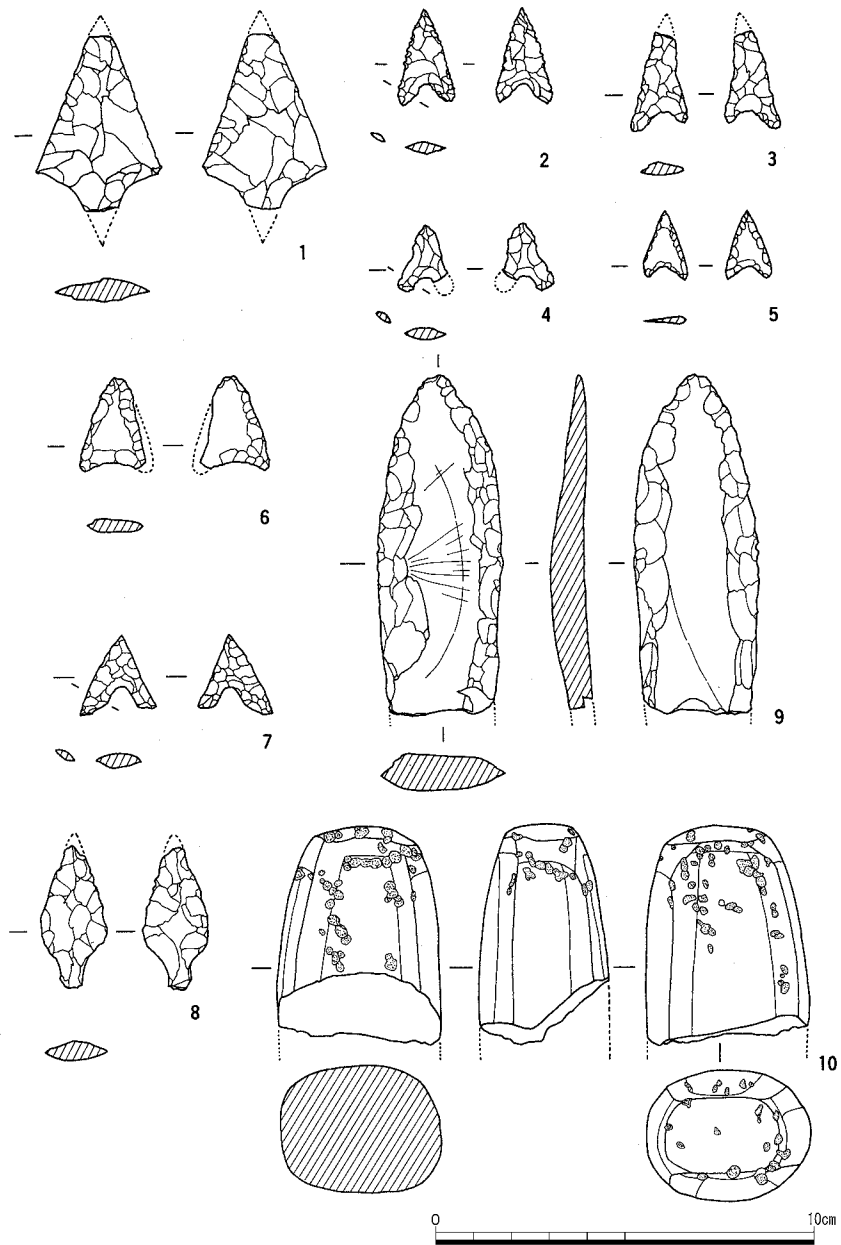
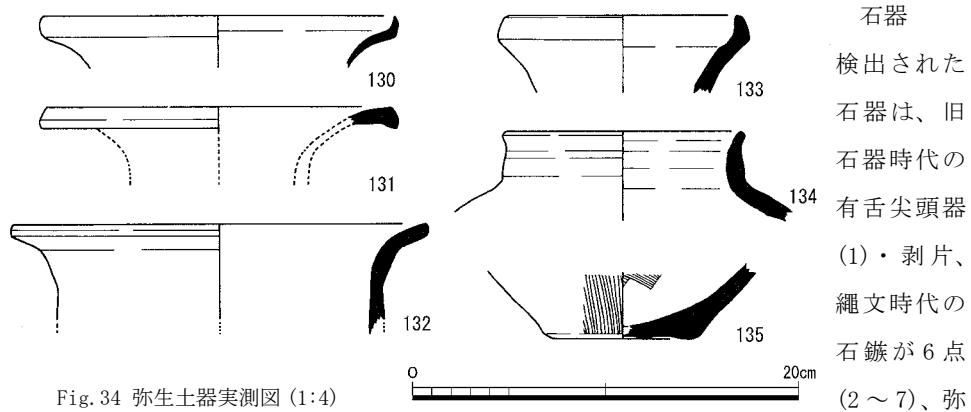


Fig. 33 石器実測図 (1) (1:2)



石器
 検出された
 石器は、旧
 石器時代の
 有舌尖頭器
 (1)・剥片、
 縄文時代の
 石鏃が6点
 (2～7)、弥

Fig. 34 弥生土器実測図 (1:4)

生時代の石鏃 (8)・石槍 (9)・石斧 (10)、そして時代が不明であるが砥石が2点出土している。他に剥片が3点 (13～15) 出土している。すべて表土からの出土で、遺構に伴うものはない。

石材は石斧 (10) と砥石 (12) が砂岩製、もう1点の砥石 (11) は京都の愛宕山産の粘板岩である。他の打製の石器はサヌカイトであり、そのうち有舌尖頭器 (1) と風化の激しい剥片2点は波状縞を有し、四国五色台産のサヌカイトの可能性がある。

これらの弥生土器・石器は京都盆地周辺では比較的海抜の高い地点からの出土になる。

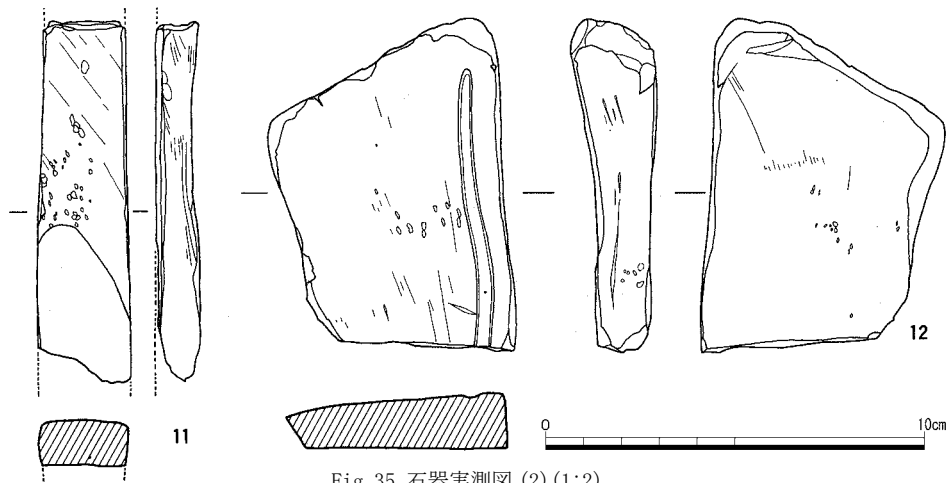


Fig. 35 石器実測図 (2) (1:2)

註

- 1 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』1978の器形分類に準拠した。
- 2 白石太一郎氏・吉本堯俊氏の御教示による。

第V章 結 語

1 発掘調査の成果

旭山古墳群は京都市文化財保護課が作製した遺跡地図などによって、円墳3基からなる古墳群として認知されており、今回の調査もその3基の古墳を対象として開始した。しかし、調査が進展するうちに円墳ではなく方墳であることが確認され、新たな古墳の存在も明らかになった。そこで周辺の分布調査をあらためて実施した所、従来の旭山古墳群、六条山古墳群として別個に把握されていたものが、一連の同じ内容を具えた古墳群であることが確認できた。この古墳群をあらためて旭山古墳群と呼称する。現在27基を数えるが、封土の流出してしまった小石室墳を現状では確認できないから、さらに実数が増える可能性がある。

27基の古墳は分布密度・立地からみてA～Eの五つの支群に分けられる。それぞれの支群はE支群を除いて3～5基からなり、その支群の中心となる大型方墳が1基含まれている。さらにその支群内で2～3基を結合単位とする小支群を抽出することができる。

墳形が確認できたものは、すべて前方が若干拡がり、東西に比して南北が少し長い方形を呈している。また、前方を除く三方に周溝がめぐらされている。斜面に造られているので墳丘の後部を切断し、両側に溝を設けるだけで方形区画が得られるために、前方には溝が造られなかったと思われる。墳丘規模は一辺6m前後のものと9m前後のものに大別され、数値の変化が少なく規格性をもって造られていることが判る。言い換えれば墳丘の規模が厳密に規制されているのである。墳丘高は9m級のものを除いて、いずれも低く、わずかに盛り上りが認められる程度である。

内部主体は、9m級の古墳が両袖の横穴式石室、6m級が無袖の横穴式石室で、他に封土がすでに流出してしまった小石室墳がある。調査した17基の古墳の内訳は、両袖の横穴式石室1基、無袖の横穴式石室^{註1}9基、小石室墳4基である。

無袖の横穴式石室は長さ4m前後、幅0.8m前後に規模が集中し、大きなばらつきはない。また無袖式ではあるが、玄室部と羨道部は意識的に区分されている。つまり、玄室部を横積みにし、羨道部は縦積みにするなど、石の積み方によって区分したり、床面に石を敷いて空間を分離したりしている。また、玄室部では床面から80～90cmまで積まれているが、



Fig. 36 石室プラン比較図 (1:40)

羨道部は一～二段しか積まれていなかったり、明らかに無袖式の横穴式石室を、空間としての玄室部と羨道部に区分しているのである。

しかし、空間としての玄室部と羨道部が分離されているが、機能として区分されていない。つまり、羨道部が追葬に不可欠な通路としての役割を果たす必要がなくなったのである。E-9号墳でみられたとおり、当初から1棺だけを埋葬する石室として構築されており、追葬ということは考慮されなかった。ただ横穴式石室の系譜をひくことを示すために、石の積み方を変えたり、床面に石を並べて空間を区切ったにすぎないのである。

だから、棺は横（羨道部）から入れられたのではなく、上から埋納されたと思われる。横穴式石室として築造されているが、埋葬方法は竪穴式石室と同一なのである。さらに注目すべき点は、天井石の確実な架構の証拠が一例も見当たらないことである。すべて後世の盗掘などによって持ち去られたとも考えられるが、石室内に落ち込んだものもなく、古墳の周囲にも天井石らしきものは1点も検出されず、当初から天井石が架構されていなかった可能性がきわめて高い。すなわち埋葬後ただちに土砂によって石室内を充填してしまうか、板材などで天井を被覆し、若干の盛土をするだけであったと思われる。そう考えれば、封土が低いことの説明も容易につく。同様な例が、兵庫県宝塚市雲雀山古墳群東尾根・B支群^{註3}、静岡県島田市水掛渡古墳群・A支群^{註4}の古墳石室にもみられる。

小石室は個別の古墳の項で説明を加えたとおり、一見箱式石棺の様相を呈しているが、一方が開口したものがあり、また奥壁を意識して鏡石となる大きめの石が据え付けられており、形態的に横穴式石室に属する。通常、小型横穴式石室というのは、本古墳群の無袖式石室に対する呼称であり、それと区別するために小石室と呼ぶことにした。規模は小さくても、成人葬を行ったもので^{註5}、もちろん単葬墓である。

石室に使用した石材と石室の架構法についてであるが、石材は本古墳群の周辺で採れる割り石^{註6}を使用し、石室の架構法は小口積みの範疇に属する。

石室架構法の特徴としてあげられるのは、基底石を横長に据え、二段目はその基底石を支えとして後へ大きくせり出して重心が下方へ働くように積み、三段目からが多少内に持ち送られてもバランスが取れるように工夫されている。また、同一石室において東側壁と西側壁では石材の大きさ、積み方に違いがみられる。これは一つの石室を数人（グループ）の工人が同時に構築したと考えられ、工期の短縮をはかるとみられる。

築造時期は、出土した遺物から7世紀前半～中葉で、きわめて短期間の造営であったと思われる。

2 まとめ

前節でみたように、旭山古墳群には3種類の石室形態があり、石室の形態のみで考えれば、普通は両袖の横穴式石室→無袖の横穴式石室→小石室という変遷過程が考えられる。しかし、出土した土器などからみて、何世代にもわたって累層的に営まれたものとは考え難く、同時期に存在したものと考えられる。したがって石室形態の多様性は、被葬者の階層差に起因するものと考えられる。なぜなら墳丘規模がそのまま内部主体にも反映しており、それは必然的に築造に徴発された工人の数や造営期間の差としてあらわれる。9m級の大型方墳に両袖式の横穴式石室、6m級の方墳には無袖式の横穴式石室、流出するほどの低い封土に周溝をもたないものが小石室である。また両袖式も無袖式も玄室部の長さにはそれほど隔たりがなく、埋葬空間としての規模の差はほとんどなく、いずれも単葬墓だと思われる。

旭山古墳群の被葬者についてであるが、本古墳群が7世紀に入って新たに造墓活動を開始したこと、眼下に山科盆地を見渡せることから、その被葬者は7世紀になって山科の地で開始された須恵器生産、製鉄に従事した人々ではないかと考えている。E-2・E-10号墳から鉄滓が出土していることは、この推測の裏付けになると思う。

以上みてきたとおり、旭山古墳群は7世紀前半～中葉という短期間に造墓され、方墳を主体とした単葬墓によって構成された古墳群で、群集墳の終末期の一類型となるものである。

註

- 1 他に3基ある破壊墳のうち2基は、掘形・抜取穴から無袖式であったと思われる。
- 2 ただし、両袖の横穴式石室であるE-2号墳では天井石が架構された可能性が考えられる。それは奈良時代に入ってもこの石室が再利用されているからである。
- 3 石野博信「宝塚市長尾山古墳群」（『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第1集）1971年
- 4 静岡県文化財保存協会『島田市水掛渡古墳群発掘調査報告書』1965年
- 5 雲雀山東尾根・B支群中の箱式石棺と呼ばれるものも成人葬だと考えられている。
- 6 主尾根の山科盆地に下る東側斜面に石材を採掘したのではないかとと思われる地点を一箇所確認している。

第VI章 付 載

1 木棺の復原

はじめに

組合式の木棺は実物が発見されたり、土に残った痕跡などから構造が比較的明らかである。しかし釘や鏝を用いた木棺は多くの場合横穴式石室という開放された空間に葬られるため、土に痕跡として残らず、また再利用・盗掘などによって古墳自体が荒らされ、復原の良好な資料が少なく不明な点が多い。復原を試みた例もあるが、ただ単に釘の多く出土した範囲を長方形に線を引き、規模の復原と埋葬位置の確認にとどまるものが多く、その構造におよぶ復原はあまり知られていない。

幸いE-9号墳では石室が荒らされた痕跡もなく、遺物が元位置をよく保って出土し、また鉄釘には良好な木質の付着状況が観察できた。そこで、鉄釘の出土状態と木質の付着状況から、木棺の構造的な復原を試みてみたい。

釘に付着した木目の分類

鉄釘に残存した木目の付着状況を観察してみると、以下の三種に分類することができた。

A 木目が頭部から体部にかけて3.5cm内外の幅で、表裏の2面が対になって横方向に付着し、それ以下先端にかけて縦方向に木目が走るもの。

B 木目が頭部から先端に到るまで表裏または両側が、対になって横方向に走り明確な境がないもの。

C 木目が頭部から3.5cm内外では表裏を対に、それ以下は両側を対にして横方向に走るもの、またはその逆に上半は両側が対に、下半は表裏が対になるもの。

棺材として丸木を輪切りにしたような板を使用したと考えられないから、柾目または板目の板を用いたとして、Aのような木目が附着するのは板の平

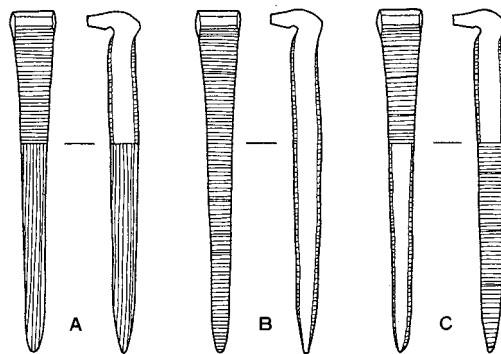


Fig. 37 木目の分類（模式図）

面から別の板の小口に打ち付けた場合である。Bのような木目が残るのは板の平面から別の板の側面に釘を打ち付けた場合である。Cのような木目が付着するのは板と板の組み合わせがBの場合と90°ずれる場合である。

釘の出土状態と位置

釘の出土状態は、Fig. 26に示すとおり2×0.8mの範囲に分布している。個々の釘の出土状態をみると、頭を下にはほぼ直立するもの、頭を下に傾いているもの、ほぼ水平なもの、頭を上へ傾くものの四つに大別することができた。

次に具体的に個々の釘の出土状態と木目の付着状況について説明する。石室奥壁沿いの北西部から木棺の隅の打ち付けに使用されたと推定される釘6本(2・3・4・5・6・9)が出土した。このうち4本は体部で直交しており、5(A)・4(A)・3(A)・2(A)の順序で、下から上に重なっていた。2と4の釘の先端は東向き、3と5の釘の先端は南を向いていた。4の先端より東へ2cm離れた位置から6(C)が先端をやや北西に向けて出土し、5の先端より南へ11cmから9(B)が先端を北西に向けて出土した。

また5の先端から西側壁に平行して南へ約1.85mの地点には5本の釘、19(B)・20(A)・21(A)・22(A)・23(A)が集中しており、これらの釘は木棺の南西隅に使用されたものとみられる。20・21・23は先端を北に向けている。そして3・5と20・21を結ぶ線上には14(B)・16(B)がある。

2・4の先端から東へ約50cmの所には8(A)・12(C)がある。また2・4と8のほぼ中間に7(C)がある。

木棺の復原

以上のことをもとにして木棺の復原を試みる。北西部から出土した釘のうち4本は、2本ずつ体部上半で直角に重なって検出されたことから、この部分が木棺の北西隅であったことを示し、またいずれの釘も木目の残りがAであることから、小口板と測板は互いに木目を横に走らせて用い、二つ組手により組み合わせて釘で留めたものと考えられる。

底板と小口板を打ち付けた釘6・7・12はCの木目をもつ釘であり、また底板と側板を打ち付けた釘9・13・14・16・19はBの木目をもつ釘であることから、底板の上に小口板と側板を組み合わせたものをのせて打ち付けたと思われる。このように考えると、北西隅で小口板と側板を打ち付けるのに使用した釘は2～5の4本で、同じく北東隅は1・8・10・15、南東隅は17・25・27・29、南西隅では20～23の釘を使用した。北側の底板と小口板を打ち付けた釘は6・7・12で、南側は24・26・29である。さらに底板と側板を打

ち付けた東側の釘は 11・30～32・18 であり、これで出土した釘 32 本の使用個所が決まるのである。

次に木棺の規模についてであるが、まず使用された板材の厚さは木目 A・C でみられた釘の頭部から横方向に走る木目の幅が板材の厚さとなる。つまり 3.5cm である。長さは南西隅の 21 の頭部と北西隅の 5 の頭部を結んだ直線の長さ 184cm である。頭を下に直立して検出された釘 11 から 5 と 21 を結ぶ直線に下した垂線の長さに板 1 枚分の厚さを加えた長さ 53cm が木棺の幅となる。高さは推定するしかないが、石室の高さから考えてそう高いものではなく、幅とほぼ同様の長さであったと思われる。

復原した木棺を図示すると Fig. 38 のようになる。蓋についてはその存在を示すものがなく、構造は推定するしかないが、出土した釘 32 本はすべて棺身に使用されたと思われるので蓋は合わせ式になっていたのではないかと考えられる。

結語

6 世紀中葉から 6 世紀後半にかけて営まれた滋賀県福王子古墳群から出土した木棺の釘は長さ 15～20cm、断面 0.5×1.2cm 前後の大型の釘で、木棺も 5～8cm の厚い棺材を用いた重厚なものであったと推定された。^{註3} また奈良県石光山古墳群でも 6 世紀前半の木棺は長さ 14～19cm、断面 1×1cm 前後の鉄釘を用い、しかも使用本数も 7～13 本と少なく、棺材は 6～10cm のかなり厚い高野槇を用いていた。^{註4} 木棺の構造も岡山県岩田古墳群や石^{註5}

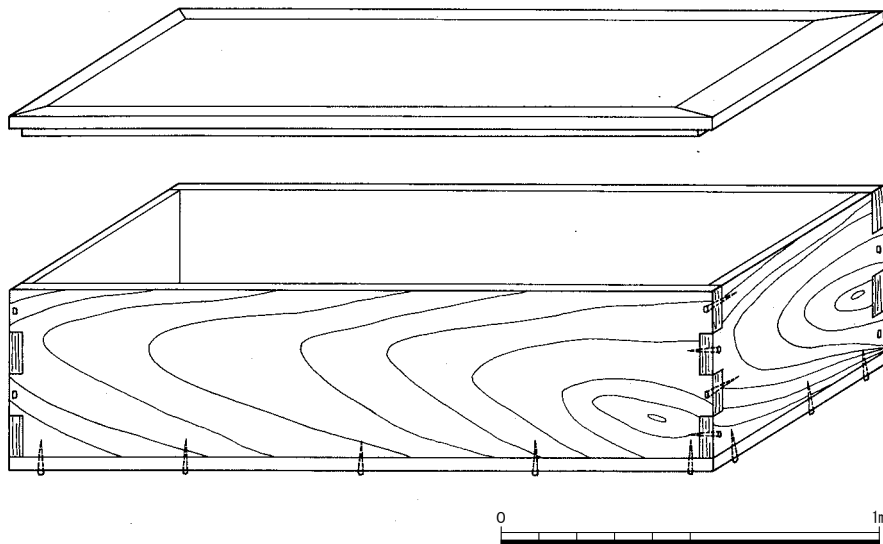


Fig. 38 木棺復原図 (1:20)

光山古墳群などでは、小口板が側板の先端より中に入り込んだ形の木棺が復原され、古墳時代中期の奈良県三倉堂古墳、大阪府土保山古墳のものと同じ構造の木棺だと考えられた。

ところが7世紀前半の旭山古墳群で復原した木棺になると、鉄釘は長さ7～10cm、断面0.5～1cm前後であり、一棺に使用される本数も多くなる。棺材も3cm前後と薄く、規模も死者を納めるに足るものとなり、後の高松塚古墳の漆塗り木棺構造と基本的に変わらなくなる。

註

- 1 栃木県の七廻り鏡塚古墳、奈良県の三倉堂古墳、大阪府の土保山古墳などから組合式の木棺が検出されている。
大和久震平編『七廻り鏡塚古墳』1974年
藤原光輝「組み合わせ式木棺について」『近畿古文化論攻』1963年
陳 顕明「土保山古墳発掘調査概報」『高槻叢書・第十四集』1960年
- 2 木棺に使用された鉄釘の形状から棺構造を復原した田中彩太氏の論考がある。
「古墳時代木棺に用いられた緊結金具」『考古学研究・98号』1978年
- 3 福岡澄男「鉄釘接合木棺の復原と鉄釘について」『滋賀県文化財調査報告・第四冊』1969年
- 4 千賀 久「葛城・石光山古墳群・鉄釘について」『葛城・石光山古墳群』1976年
- 5 神原英朗他「岩田古墳群」『山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報(6)』1976年

2 E-6号墳の取り上げ保存について

旭山古墳群の発掘調査の一環として、昭和53年(1978)8月19日から8月29日まで、合成樹脂を用いてE-6号墳の取り上げを行った。この方法は、石組みとその周囲を合成樹脂で固定してもとの位置からそのまま取り上げるもので、原形を損なうことのない取り上げ法である。今後の遺構取り上げ資料として、取り上げの工程、樹脂の取り扱い、作業に要した資材などを以下に述べる。

遺構取り上げの工程

- 1 石室の詳細な部分写真を撮影。
- 2 裏面の土を削り取る際の目標として、長さ20cmの番線を15本石室床面の隙間および石室の外側に打ち込む。
- 3 水性アクリル樹脂を裏込め土および石室床面の隙間にしみ込ませ、土を硬化させる。
- 4 エポキシ樹脂を土でねって壁面の石組みの間に埋め込み、石組みの連結を強化する。床面の石敷きの隙間にはエポキシ樹脂を直接流し込んだ。
- 5 石室の西壁と北壁とを構成する石で、すでに移動していると判断した不安定な石4個に墨でナンバーを入れ取りはずす。
- 6 取り上げ部分の寸法を決め、石室の東、北、西側に幅1m、深さ1.2mの溝を掘る。南側は斜面を利用し、広く平らにした。
- 7 雨と直射日光を避けるため、作業範囲にテントをはった。
- 8 石室の床面に土を敷き、壁面の石には画箋紙を水貼りした。
- 9 ウレタン原液を混合攪拌し、石室内部を埋めるように流し込んだ。ポリウレタンフォー



Fig. 39 取り上げ工程 (6)



Fig. 40 取り上げ工程 (8)

ムを補強する目的で、井桁に組んだ角材を入れた。

- 10 L字鋼を井桁に組み、石室の周囲を補強し、ベニヤ板で囲いながら混合攪拌したウレタン原液を流し込んだ。
- 11 石室の床面からさらに40cmほど下がった所に、東西方向のトンネル（縦横40cm）を貫通させた。トンネル内に板（長さ150cm、幅36cm、厚さ3cm）を入れ、上部のポリウレタンフォームと番線できくり、トンネル内をポリウレタンフォームで満した。この作業を5回くり返し、石室を完全に地面から切り離した。
- 12 石室を囲む木製のコンテナ（縦2.6m、横2.1m、高さ0.8m）を作成した。
- 13 木製コンテナの中に混合攪拌したウレタン原液を流し込み、ポリウレタンフォームがあふれる寸前に次々蓋をして釘を打ち付けた。
- 14 チェーンブロックを用いて木製のコンテナの天地を逆にした。
- 15 11で作ったポリウレタンフォームをはがし、2で打ち込んだ番線がみえる所まで土を削り取った。
- 16 土を削った面を平らにし、F.R.P. (Fiberglass Reinforced Plastics) で補強した。
- 17 F.R.P. で固定した面から15cmの高さに周囲の木枠を整形し、混合攪拌したウレタン原液を流しながら蓋をした。
- 18 木製のコンテナをチェーンブロック、歩み板などを使い人力で山から降した。

工程は全部で11日間かかっているが、これはすべて人力で行ったからであり、機械の入る現場であれば、4日ないし5日で終る作業である。取り上げの工程でもっとも慎重を期したのは、工程11の石室を地面から切り離す作業であった。幸い土が良くしまっており、トンネルを掘っても土が落ちることがなかった。工程14で天地を逆にしては、

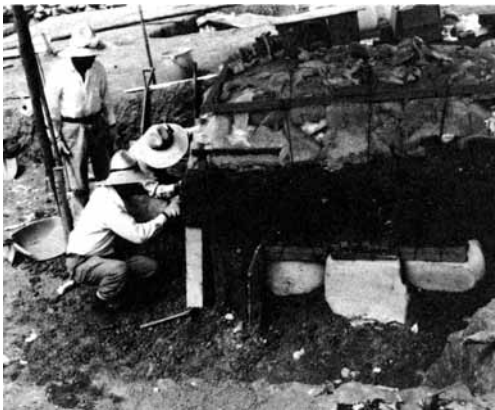


Fig. 41 取り上げ工程 (11)



Fig. 42 取り上げ工程 (18)

裏面の土を減らし、重量を軽減するためであり、取り上げの目的によってはこの作業は必要なく、したがって2、15、16、17は不要である。山から人力で降さねばならなかったため、梱包を厳重に行った。総重量は1.5tであった。

樹脂の取り扱い

石室の取り上げに使用したウレタン樹脂は、硬質ポリウレタンフォームと呼ばれ、普通冷蔵庫や冷凍庫の低温断熱材として利用されている。硬質ポリウレタンフォームは、全体が泡状で密度が0.02～0.04g/cm³と比常に軽く、かつ十分な硬度も持っている。石室の取り上げにはこの2点を利用し、石室の石組み以外の土をポリウレタンフォームで置き換えて軽量化し、石組みを包んで完全に固定しているのである。この種のウレタン樹脂は普通2液からなり、各液を1:1の割合で混合し、十分に攪拌すると数分で発泡し、そのまま固まる。発泡までの時間や発泡状態は、製造元や気温によってもわずかず異なるので、作業に入る前に予備実験をおこなって性質を確認することが必要である。工程にある「ウレタン原液」は2液および混合した液を呼び、発泡し硬化したものをポリウレタンフォームと呼んでいる。ポリウレタンフォームは硬度が十分あるものの脆いので、角材や鋼材を芯に入れて補強する必要がある。ウレタン樹脂の取り扱い上の注意点は、

- i ウレタン樹脂を皮膚につけないこと。皮膚につけた時は、石けんで良く洗い落とす。
- ii ウレタン樹脂の使用期間は製造日から約半年間とされているので、必要量以上に購入しないこと。
- iii ウレタン樹脂を一度に多量に攪拌しないこと。
- iv ポリウレタンフォームの整形は、良く換気された場所で行い、有毒ガスを吸わないようにする。

使用した樹脂および資材

取り上げに要した樹脂・資材は以下のとおりである。

ウレタン樹脂 120kg、エポキシ樹脂 16kg、水溶性アクリル樹脂 5kg、ガラスクロス 2巻、アセトン 3kg、画箋紙 5枚、簡易手袋 150枚、紙コップ 50個、ポリ袋 200枚、材木 3cm×36cm×400cm 20本、9cm×9cm×300cm 10本、4.5cm×4.5cm×400cm 5本、番線 10kg、L字鋼 4本、計量秤、チェンブロック、ワイヤロープ、ハシゴ、カナヅチ、ノコギリ、ロープ、番線切り、ペンチ、シノ、テント、歩み板、丸太、カメラ、三脚。

Tab. 2 調査古墳一覧表

	封土 (m)		周溝 (m)		玄室部 (m)		羨道部 (m)		奥壁 石室主軸方位		石室内出土遺物	備	考
	東西	南北	高さ	幅	長さ	幅	長さ	幅	高さ	方位			
C-3号墳	5.8	6.2	1.2	1.4	0.5	2.5	0.75	0.9	0.76	N22°3'W	須恵器平瓶、甕	○破壊墳。一部、周溝を残すのみで、封土の規模は復原値。遺物は石室船形相当部分からの出土。	
C-4号墳	6.2	5.8	-	0.9	0.2	-	-	-	-	-	須恵器甕	○破壊墳。石室は完全に抜き取られており、後に墳墓として再利用されている。	
C-5号墳	4.6	5.3	1.4	1.4	0.4	2.6	0.8	1.2	0.88	N10°3'W	須恵器提瓶	○小石室。	
D-1号墳	3.7	4.8	1.3	0.85	0.45	-	-	-	-	-		○羨道部の石が1〜2石抜き取られていると考えられる。	
D-2号墳	-	-	-	-	-	1.55	0.55	-	0.62	N 8°28'W		○玄室部に礫を敷き詰めた棺床が残存。 ○高さは残りのよい玄室部中央での値。	
D-3号墳	5.8	5.5	1.3	1.05	0.45	2	0.65	0.35	0.7	N30°3'W	須恵器長頸壺	○奥壁の東側壁の一部を残して、他の石材は抜き取られている。幅は西側壁の抜き取り穴から復原。	
D-4号墳	5	7	1.3	1.7	0.5	2.5	0.9	0.95	0.95	N13°3'W	須恵器杯身、土師器甕	○師軸の横穴式石室。 ○奈良時代に再利用。	
E-1号墳	5.4	6.5	1.5	1.6	0.65	-	0.9	-	0.15	N19°18'W	鉄釘	○小石室。	
E-2号墳	9.2	9.8	1.7	1.3	1	2.4	1.2	3.5	0.9	N22°3'W	須恵器高杯	○奥壁と、東西両側壁の一部を残すのみである。 ○石室主軸方位と墳丘の主軸方位がズレる。	
E-3号墳	-	-	-	-	-	0.4	0.4	0.5	0.45	N16°33'W	土師器甕	○破壊墳。 ○玄室幅は抜き取り穴から復原。	
E-4号墳	5.3	6.3	0.7	1.3	0.5	-	0.7	-	0.7	N22°3'W	須恵器高杯	○小石室。	
E-5号墳	5.2	7.8	0.4	1.6	0.4	-	0.8	-	-	N 5°30'W	須恵器長頸壺・杯身・蓋、鉄釘	○破壊墳。 ○床面に板状の割り石を敷く。	
E-6号墳	-	-	-	-	-	1.45	0.6	-	0.35	N10°30'W		○床面に板状の割り石が残り。 ○閉塞石を有する。	
E-7号墳	5.9	5.6	1.1	1	0.3	1.95	0.85	1	0.65	N 3°18'W	鉄製刀子、金環	○小石室。	
E-8号墳	-	-	-	-	-	1.7	0.4	-	0.45	N 1°33'W		○玄室部に礫を敷き詰めた棺床を有する。	
E-9号墳	6.4	5.3	1.6	1.25	0.55	2.7	0.9	1.2	0.75	N 0°33'W	須恵器高杯・長頸壺・杯身・蓋	○玄室部と羨道部の境に石を3個並べる。 ○羨道部の東側壁は抜き取られている。	
E-10号墳	6.3	6.5	1.6	1.4	0.55	2	0.8	1.7	0.95	N 6°26'W	鉄製刀子		

註 ○高さは墳丘南裾部と最高所との比高。

○周溝の数値は北側周溝中央部での計測値。

○玄室部、羨道部の幅、長さは現存値。

Tab. 3 土器観察表

C-3 号墳

土器番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
5	須恵器	甗	○細い頸部を持ち、頸部・口縁部は外上方へひろがる。 ○頸部のほぼ中央部二条の沈線がめぐる。 ○肩部は明瞭な稜をもち一条の沈線がめぐる。 ○体部の最大径は肩部のすぐ下で、一条の浅い沈線がめぐる。	○体部下半・底部は回転を利用したヘラケズリ。 ○他は回転ナデによる調整。	○青灰色で焼成良好。 ○石室内より出土。
6	須恵器	平瓶	○口縁部は体部上面からずらして接合され、外上方へ開く、口縁端部は丸味をおびる。 ○口縁部のほぼ中央に二条の沈線がめぐる。 ○体部上面は丸味をおび、肩部はわりと明瞭な稜をもつ。 ○底部は平坦である。 ○体部上面には小さな円形の粘土粒を2個貼付している。	○体部下半・底部は回転を利用したヘラケズリ。 ○他は回転ナデによる調整。	○青灰色で焼成良好。 ○体部上面に自然釉（緑灰色）がかかる。 ○石室内より出土。

C-4 号墳

土器番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
2	須恵器	杯蓋	○口縁端部は丸く、若干内に折れ込んでいる。 ○かえりは口縁端部とほぼ同一面にある。	○回転ナデによる調整。	○淡灰色で胎土・焼成とも良好。 ○墳丘裾部より出土。

C-5 号墳

土器番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	須恵器	杯蓋	○口縁端部は丸味をおびる。 ○かえりは口縁端部より下方へ突出する。 ○天井部は平坦である。	○天井部、回転を利用したヘラケズリ。 ○他は回転ナデによる調整。	○淡灰色で焼成良好。 ○天井部に自然釉（緑灰色）がかかる。 ○墳丘裾部より出土。
3	須恵器	杯身	○口縁部は外反し、丸味をおびる。	○回転ナデによる調整。	○全面自然釉（淡緑灰色）がかかる。 ○焼成良好。 ○墳丘裾部より出土。
4	須恵器	甕	○口縁端部はわずかに内傾し、端面は平坦になる。 ○口縁部に二条の沈線がめぐる。	○口縁部下半右上りのタタキを施す。	○灰白色で胎土、焼成とも良好。 ○墳丘裾部より出土。
7	須恵器	提瓶	○体部の前面・背面とも丸味をもつ。 ○外上方へ開く、体部に比して長い口頸部がつく。 ○口縁端部は内傾し丸味をおびる。 ○口頸部中央よりやや上に二条の沈線がめぐらす。	○体部背面ヘラケズリ。○体部前面カキメ調整。 ○体部1/3上半・口頸部は回転ナデによる調整。	○青灰色で胎土、焼成とも良好。 ○石室内より出土。

D-1 号墳

土器番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
21	土師器	皿	○浅い器形で、底部・体部の境は不明瞭。 ○口縁端部は丸味をおびる。	○粘土ヒモ巻き上げによる成形。 ○口縁部・内面ナデによる調整。 ○底部未調整。	○淡茶灰色。 ○墓壇上面より出土。

22～26	土師器	皿	○底部はわりと平坦で、体部は外上方にのびる。 ○器高は低い。 ○口縁端部は丸味をおびる。	○粘土ヒモ巻き上げによる成形。 ○口縁部・内面ナデによる調整。 ○底部未調整。	○胎土・焼成良好。 ○底部に板の圧痕が残るものがある。 ○墓壇内より出土。
27	土師器	皿	○口縁端部肥厚し、断面三角形を呈す。	○ナデによる調整。	○暗茶灰色を呈す。 ○墓壇内より出土。
28	土師器	皿	○底部と体部の境は明瞭で、体部・口縁部は内湾気味に外反する。	○粘土ヒモ巻き上げによる成形。 ○口縁部は二段のナデ。 ○内面はナデによる調整。 ○底部は未調整。	○淡茶灰色で胎土良好。 ○墓壇内より出土。

D-3 号墳

土器番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
18	須恵器	杯身	○底部と体部の境は明瞭で、体部・口縁部はほぼ直線的に上方へのびる。 ○口縁端部は若干外反し、丸味をおびる。	○底部ヘラケズリ。 ○内底面仕上げナデ。 ○他は回転ナデによる調整。	○墳丘裾部より出土。
20	須恵器	長頸壺	○底部は平坦で、体部との境は明瞭。 ○上すばまりの長い体部で、肩ははっきりせず、最大径は下1/3程のところにある。 ○体部上1/4の地点とほぼ中央部に二条一単位の沈線がめぐる。	○底部は粘土板で、その上は粘土ヒモ巻き上げによる成形。 ○体部下半、底部は回転を利用したヘラケズリ（左回り）。 ○内底面未調整。○他は回転ナデによる調整。	○暗青灰色で焼成良好。 ○径1～2mm大の長石粒を含む。 ○石室内より出土。
19	瓦質土器	壺	○底部は平坦で、体部とは窪みをもって明瞭に屈曲する。 ○体部は外湾して上方へのびる。	○底部は糸切り。 ○他は回転ナデによる調整。	○外面灰黒色・内面茶灰色を呈す。 ○周溝埋没後に形成された土壌より出土。

D-4 号墳

土器番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
8・9	須恵器	杯蓋	○天井部は高く、丸味をおび、中央部に扁平なつまみがつく。 ○口縁端部は丸く、やや内に折れ込む。 ○かえりは断面、三角形を呈し、口縁部より少し下へ突出する。	○天井部は回転を利用したヘラケズリ（左回り）。 ○他は回転ナデによる調整。 ○天井部内面、仕上げナデ。	○焼成良好。 ○周溝および墳丘上より出土。
10	須恵器	杯身	○底部と体部の境は明瞭で、体部は外湾気味に外方へのびる。 ○受け部は外方へ開き、狭い平坦面をつくり、立ちあがりは低く内傾する。	○底部ヘラキリのまま未調整。 ○内底面は仕上げナデ。 ○他は回転ナデによる調整。	○暗青灰色で焼成良好。 ○胎土中にかなり多くの砂粒を含む。 ○受け部に重ね焼の痕跡。 ○墳丘より出土。
11	須恵器	杯身	○扁平で器高は低い。 ○受け部は体部から大きく外反し、端部は丸味をおびる。 ○たちあがりは短くほぼ直立する。	○底部ヘラキリのまま未調整。 ○内底面仕上げナデ。 ○他は回転ナデによる調整。	○淡青灰色で焼成良好。 ○周溝より出土。
12	須恵器	杯身	○体部と底部の境は明瞭で、体部・口縁部はほぼ直線的に外上方へのびる。 ○口縁端部は丸味をおびる。	○体部下半回転を利用したヘラケズリで底部はヘラキリのまま未調整。 ○内底面は仕上げナデ、他は回転ナデによる調整。	○灰白色で焼成良好。 ○周溝および墳丘上より出土。

13・16	須恵器	杯身	○底部と体部の境は割と明瞭で、体部・口縁部へと若干内湾して外上方へのびる、器高は低い。	○回転ナデによる調整。	○淡灰色で焼成良好。 ○13は周溝、16は墳丘裾部より出土。
14	須恵器	高杯	○低く、外方へふんばった脚をもち、脚端部は丸味をもつ。 ○脚のほぼ中央部に二条の沈線をめぐらす。 ○杯の底部と体部の境は明瞭で、体部・口縁部はやや外反して、上方へ直線的にのびる。	○杯部の底面回転を利用したヘラケズリ。 ○杯部内底面仕上げナデ。 ○他は回転ナデによる調整。	○暗青灰色で焼成良好。 ○胎土中に砂粒を多く含む。 ○周溝内より出土。
15	須恵器	台付長頸壺	○口頸部下半は、ほぼまっすぐ上方へのびるが上半は外方へ大きく開く。 ○頸部は細く、口頸部を四分する位置に上から二条、二条、一条の沈線がめぐる。 ○体部の肩は明瞭な稜をもち、二条の沈線がめぐる。体部最大径も肩部にある。 ○肩部の下に一条の沈線がめぐり、それと肩部の沈線の間をヘラ状の施紋具によって右上りの刺突文を施す。	○体部下半回転を利用したヘラケズリ。 ○他は回転ナデによる調整。	○淡灰色で焼成良好。 ○墳丘裾部より出土。
17	土師器	甕	○体部から口縁部へ「く」の字形に屈曲する。	○表面磨滅激しく、詳細な観察はできない。	○淡茶灰色。 ○石室開口部より出土。

E-1 号墳

土器番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
29	土師器	甕	○口縁端部内側に折れ込み、丸味をおびる。	○表面磨滅激しく、詳細な観察はできない。	○淡茶褐色。 ○周溝内より出土。
30	須恵器	杯身	○口縁部内湾して外方へ開く。 ○口縁端部は肥厚し、丸味をおびる。	○体部下半回転を利用したヘラケズリ（左回り）。 ○底部ヘラキリのまま未調整。 ○内底面仕上げナデ、他は回転ナデによる調整。	○青灰色で焼成良好。 ○周溝内より出土。
31	土師器	皿	○底部から屈曲して、短く外上方へのびる体部をもつ。	○口縁部・内面ナデ。 ○底部未調整。	○乳白色。 ○周溝内より出土。

E-2 号墳

土器番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
33	須恵器	杯蓋	○口縁部は外方へ開き、端部は丸味をおびる。 ○かえりは口縁端部より下方へ突出する。	○天井部回転を利用したヘラケズリ（左回り）。 ○他は回転ナデによる調整。	○灰色で焼成良好。 ○径5mm大の小石を含む。 ○墳丘裾部より出土。
34	須恵器	杯蓋	○天井部・口縁部とほぼまっすぐ外方へのび、口縁端部は中に折り込まれ丸味をおびる。 ○口縁内部に断面三角形のかえりをもつが、それは口縁端部以下に突出しない。	○天井部回転を利用したヘラケズリ（左回り）。 ○他は回転ナデによる調整。	○灰白色で焼成良好。 ○墳丘裾部より出土。
35	須恵器	杯蓋	○天井部は一段高くなっており、口縁端部は若干下へ突出する。 ○口縁内部にかえりをもつが口縁端部とは少しはなれる。 ○かえりの先端が口端部より下へ突出することはない。	○天井部は回転を利用したヘラケズリ。 ○他は回転ナデによる調整。	○淡灰色で焼成良好。 ○墳丘裾部より出土。

36	須恵器	杯 蓋	○平坦な天井部で、口縁部はほぼ直角に屈曲し、断面は三角形を呈する。 ○中央部に偏平なつまみがつく。	○天井部は回転を利用したヘラケズリ（左回り）。 ○他は回転ナデによる調整。	○淡灰色で焼成良好。 ○焼け歪みあり。 ○石室内出土。
37	須恵器	杯 蓋	○口縁部は下方へ短くつまみ出し、断面三角形を呈する。	○天井部回転を利用したヘラケズリ（左回り）。	○青灰色で焼成良好。 ○墳丘裾部より出土。
38	須恵器	杯 蓋	○天井部は丸味をおびて、高まる。 ○口縁部は下方へ短くつまみ出し、断面三角形を呈する。	○天井部、ヘラケズリ（左回り）の後、回転ナデ。 ○他は回転ナデによる調整。	○淡灰色で焼成良好。 ○墳丘裾部より出土。
39	須恵器	杯 蓋	○天井部は平坦で明瞭な稜をもって口縁部へ屈曲する。 ○口縁部は内方へ若干折れ込むように屈曲し、断面は三角形を呈する。	○天井部、回転を利用したヘラケズリ（左回り）。	○青灰色で焼成良好。 ○墳丘裾部より出土。
40	須恵器	杯 身	○底部と体部の境は不明瞭。 ○体部・口縁部はほぼ直線的に外上方へのびる。	○底部、ヘラキリのまま未調整。 ○内底面仕上げナデ。 ○他は回転ナデによる調整。	○周溝より出土。
41	須恵器	杯 身	○底部と体部の境は明瞭な稜をもって、屈曲し、体部・口縁部はやや外湾気味に外上方へのびる。	○底部ヘラキリのまま未調整。 ○他は回転ナデによる調整。	○淡茶灰色を呈し、焼成はよくない。 ○一見土師器のようであるが、器形、調整とも須恵器と考えられる。 ○雲母を含む。 ○石室内出土。
42	須恵器	高 杯	○杯部の底部と体部は明瞭に屈曲し、体部と口縁部の境にも稜をもつ。 ○脚端部は、端面が上下にのびて稜をなす。 ○杯の底部と体部の境に一条の沈線がめぐる。	○杯の体部下半と底部ヘラケズリの後回転ナデによる調整。 ○他は回転ナデによって丁寧な調整。	○暗青灰色を呈し焼成良好。 ○石室開口部より出土。
43	須恵器	杯 身	○底部と体部の境は明瞭な稜をもって屈曲する。 ○体部・口縁部はほぼまっすぐ外上方へのびる。 ○口縁部は若干外反し、丸味をおびる。 ○体部のすぐ下あたりに低く外方に張る高台がつく。	○底部ヘラ切りのまま未調整。 ○高台貼り付け。 ○他は回転ナデによる調整。	○青灰色で焼成良好。 ○石室内出土。
44	須恵器	壺	○高台は体部のすぐ下につき外方へ開く。 ○高台端面は内側につまみ出す。	○底部ヘラ切りの後回転ナデ。 ○体部下半、回転を利用したヘラケズリ。 ○高台は貼り付け。	○青灰色で胎土・焼成とも良好。 ○高台端面にワラの圧痕。 ○石室内出土。
49	須恵器	瓶 子	○外反する口縁の端部を折り曲げ、上下端を断面三角形に突出させている。	○回転ナデによる調整。	○灰白色で焼成不良。 ○石室の埋土より出土。
50	須恵器	瓶 子	○平底で中央部がもちあがる。	○糸切り底。 ○回転ナデによる調整。	○淡青色で胎土、焼成とも良好。 ○石室の埋土より出土。
45・46 51・52	土師器	皿	○内湾した体部に続き外反した口縁部を持つ。 ○口縁部は外方へつまみだしたものと、内へ若干折りまげたものがある。	○口縁部・内面ナデ調整。 ○底部未調整。	○赤褐色を呈する。 ○石室の埋土より出土。
47	土師器	皿	○底部と体部の境は不明瞭。	○口縁部、二段のナデ。	○赤褐色を呈する。

			○口縁端部は丸味をおび、全体に厚味をもつ。	○内面ナデによる調整。 ○底部未調整。	○石室の埋土より出土。
48	土師器	皿	○口縁端部は外反し、丸味をおびる。	○口縁部、内面ナデ。	○赤褐色を呈する。 ○石室の埋土より出土。
53	土師器	皿	○体部下半にナデによる若干の窪みがあるがほぼ直線的に外上方へのびる。 ○口縁端部はつまみあげる。	○体部・口縁部ナデ。 ○底部に指オサエ痕。	○赤褐色を呈する。 ○石室の埋土より出土。
54	土師器	皿	○体部・口縁部はわずかに内湾して外上方へのびる。	○口縁部二段のナデ。 ○内面ナデによる調整。 ○底部未調整。	○淡茶灰色を呈する。 ○石室の埋土より出土。
55	土師器	甕	○口縁部は体部から「く」の字形に屈曲し口縁端部は内側に折り込む。 ○体部は球形に近く、ほぼ中央に最大径をもつ。	○粘土ヒモ巻き上げによる成形。 ○体部下半は左上りの刷毛調整、上半は水平方向の刷毛調整を施す。 ○体部と口縁部の境の縦方向の刷毛調整のちナデによる調整。 ○体部内面は、指オサエによる調整が主で、上方は横方向の刷毛調整。	○茶褐色を呈する。 ○表面（とくに底部）にスス附着。 ○石室内出土。

E-3 号墳

土器番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
32	土師器	甕	○肩の張りが小さい砲弾形の長甕である。 ○口縁部は「く」の字形に外反し、口縁端部は内側に平坦面をもつ。	○粘土ヒモ巻き上げによる成形。 ○体部は磨減が激しく特に底部の観察はできないが、他は縦方向に刷毛調整している。 ○内面は全面にわたって縦方向の刷毛調整。 ○口縁部、ナデによる調整。	○淡黄褐色で、胎土に砂粒を多く含む。 ○二次焼成を受けている。 ○底部が一部欠損しており、意識的に穿孔したものとみられる。 ○甕棺として再利用。

E-4 号墳

土器番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
56	須恵器	杯身	○底部と体部の境は明瞭で、体部は外弯気味に外方へのびる。 ○受け部は短く外方へのび、立ちあがりは低く内傾する。	○底部ヘラケリのまま未調整。 ○内底面仕上げナデ。 ○他は回転ナデによる調整。	○淡灰色で焼成良好。 ○砂粒を含む。 ○周溝より出土。
57	須恵器	高杯	○杯の底部と体部の境は割と明瞭で口縁部は若干外反し端部は丸味をもつ。 ○脚部は短く、杯底部からすぐに内湾してひろがり、脚端部はやや上向きになる。	○杯の底部・体部下半、回転ヘラケズリ（左回り）。 ○杯の内底面仕上げナデ。 ○他は回転ナデによる調整。	○淡灰色（杯部外面灰黒色）。 ○杯部内面・脚部に自然釉がかかる。焼成良好。 ○石室開口部より出土。
58	灰釉	瓶子	○口縁部は大きく外反し、端部は上下に突出している。	○回転ナデによる調整。	○緑灰色の釉で、胎土・焼成とも良好。 ○墳丘上面より出土。

E-5 号墳

土器番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
59・60	須恵器	杯蓋	○口縁部は外方へ開き、端部は丸味をおびる。	○天井部、回転を利用したヘラケズリ（右回り）。	○淡灰色で、胎土・焼成とも良好。

			○かえりは口縁端部より下へ突出する。 ○60は天井部中央に乳首形のつまみがつく。	○他は回転ナデによる調整。	○掘形開口部より出土。
61	須恵器	杯 蓋	○天井部と体部の境は割と明瞭。 ○口縁部は若干外へ開く。	○天井部は回転を利用したヘラケズリ（右回り）。 ○天井部内面、仕上げナデ。 ○他の回転ナデによる調整。	○外面、灰黒色、内面灰白色を呈する。 ○焼成良好。 ○掘形開口部より出土。
62・63	須恵器	杯 身	○体部・口縁部はほぼ直線的にのびる。	○底部・体部下半ヘラケズリ（右回り）。 ○他は回転ナデによる調整。	○淡灰色で、焼成良好。 ○掘形開口部より出土。
67	須恵器	長頸壺	○口頸部はまっすぐ立ち上がり、口縁部は外反する。 ○体部の肩はあまり張らず、最大径は体部の中央より少し上である。 ○肩部のすぐ上に沈線が二条めぐらされ、その間を1列5点単位の列点文を施す。 ○口頸部には上から、一条、二条、三条の沈線がめぐり二条と二条の沈線の間を1列7点単位の列点文を施す。	○体部下半・底部、回転を利用したヘラケズリ（左回り）。 ○他は回転ナデによる調整。	○青灰色（底部は灰黒色）で、焼成良好。 ○胎土中に径2～3mm大の砂粒を含む。 ○掘形開口部より出土。
66	土師器	皿	○底部から屈曲した体部は、ほぼまっすぐ外上方にのびる。 ○口縁部は丸味をおびる。	○表面の磨滅、激しく詳細な観察不可能。	○赤褐色を呈する。 ○墳丘裾部より出土。

E-9 号墳

土器番号	器 種	器 形	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
68～72	須恵器	杯 蓋	○天井部は高く、丸味をおびる。 ○天井部中央に宝珠つまみがつく。 ○口縁部内面のかえりは口縁端部より上か、ほぼ同一の高さである。	○天井部は回転を利用したヘラケズリ（左回り）。 ○天井部内面仕上げナデ。 ○他は回転ナデによる調整。	○青灰色を呈し、焼成良好。 ○羨門部より出土。
73～78	須恵器	杯 身	○底部は平坦で、体部との境は若干内湾する。 ○体部・口縁部は外上方へほぼ直線的にのび、口縁端部が外反するものと、まっすぐのびるものがある。	○体部と底部の境は、回転を利用したヘラケズリ（左回り）。 ○底部ヘラキリのまま未調整。 ○内底面仕上げナデ。 ○他は回転ナデによる調整。	○淡青灰色で焼成良好。 ○羨門部より出土（ただし、78のみ墳丘裾部より出土）。
79	須恵器	高 杯	○杯部は、底部と体部の境が明瞭な稜をもって屈曲し、体部・口縁部はほぼ直線的に外上方へのびる。 ○体部下端と、口縁部と体部の境にそれぞれ一条の沈線がめぐる。 ○脚部は杯底部との接合点では細く、外方へ開き、裾部は外方へ開き、脚端部は丸味をおびる。 ○脚部の中央よりやや下に二条の沈線がめぐる。	○杯底部ヘラキリ（左回り）。 ○杯の内底面に指圧痕。 ○他は回転ナデによる調整。	○淡灰色（杯部内面と外表の反面灰黒色）を呈し、焼成良好。 ○石室の奥壁部より出土。
80	須恵器	台 付 長頸壺	○頸部は細長く直立し、口縁部は外反する。 ○体部の肩は明瞭な稜をなし、一条の沈線をめぐらす。 ○底部には外方へふんばった脚がつき、脚端は上部にふくらむ。	○底部・体部下半回転ヘラケズリ（左回り）。 ○他は回転ナデによる調整。	○全面に緑灰色の自然釉がかかる。 ○胎土・焼成ともに良好。 ○石室の奥壁部より出土。
81	土師器	杯	○口縁部は、外上方へのび、口縁端部少し外反し丸味をおびる。	○口縁部ナデ。	○赤褐色を呈する。 ○小片のため、口径、傾きは不正確。もう少し深い形になる

					可能性もある。 ○墳丘裾部より出土。
82	土師器	甕	○縁部は外湾気味に外上方にのび、端部は平坦となる。	○口縁部外面は左上りのハケメ調整。 ○口縁部内面は横方向のハケメ調整。	○淡黄褐色を呈す。 ○口縁内面にヘラ記号。 ○墳丘裾部より出土。

E-10 号墳

土器番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
83～86	須恵器	杯蓋	○天井部と口縁部の境は不明瞭。 ○口縁端部は外傾し、丸味をおびる。	○天井部、ヘラキリのまま未調整。 ○天井部内面仕上げナデ。 ○他は回転ナデによる調整。	○青色で焼成良好。 ○85は外護列石の前より出土、他は墳丘裾部より出土。
88・89	須恵器	杯身	○底部と体部の境は明瞭な稜をもって屈曲し、体部・口縁部はほぼ直線的に外上方にのびる。	○底部はヘラキリのまま未調整。 ○他は回転ナデによる調整。	○灰白色で、焼成は不良。 ○一方の口縁・体部は肥厚し、他方は薄くなっている。 ○外護列石の前より出土。
90	須恵器	杯身	○底部は平坦で、体部・口縁部は外上方にのび、口縁端部は外反する。	○底部はヘラキリのまま未調整。 ○内底面は仕上げナデ。 ○他は回転ナデによる調整。	○青灰色で焼成良好。 ○外面に黒斑あり。 ○周溝より出土。
87	須恵器	高杯	○杯の底部と体部の境は明瞭な稜をもって屈曲し、体部・口縁部はほぼまっすぐに外方へのびる。 ○屈曲部の直上と体部・口縁部の境にそれぞれ一条の沈線をめぐらす。 ○脚部は内湾気味に大きく外方にひろがる。 ○脚部のほぼ中央に二条の沈線、裾部に一条の沈線をめぐらす。	○杯部底面を回転ヘラケズリ（左回り）。 ○他は回転ナデによる調整。	○暗青灰色で焼成良好。 ○径1～3mm大の砂粒を多く含む。 ○墳丘裾部より出土。
93	須恵器	高杯	○杯の底部と体部の境は明瞭。 ○脚部はラップ状にひろがり、脚端面は上下にのびて稜をなす。	○杯部底面ヘラケズリの後回転ナデ。 ○他は回転ナデによる調整。	○淡灰色で、焼成良好。 ○径2～3mm大の砂粒を多く含む。 ○墳丘裾部より出土。
94	須恵器	長頸壺	○肩のあまり張らない球形に近い体部をもつが、底部は平坦である。 ○体部の最大径はほぼ中央部にある。 ○肩と体部中央よりやや下にそれぞれ二条の沈線をめぐらす。 ○口頸部はほぼ直線的に外上方へ開き、口頸部を三分する位置に沈線（上は二条、下は一条）をめぐらす。	○体部下半と底部に左回りのヘラケズリ。 ○頸部の沈線間はカキメを施す。 ○他は回転ナデによる調整。	○青灰色で焼成良好。 ○径1mm前後の砂粒を多く含む。 ○墳丘裾部より出土。
95	須恵器	長頸壺	○球形の体部に細長い口頸部がつき、全体としてフラスコ形をとる。 ○口縁部は外反し、端部は外上方につまみあげられている。 ○口頸部を三分する位置に沈線（上は二条、下は一条）をめぐらす。	○体部下半と底部に回転を利用したヘラケズリ（左回り）。 ○他は回転ナデによる調整。	○淡灰色で焼成良好。 ○径2～3mm大の長石粒を含む。 ○外護列石の前より出土。
96	須恵器	横瓶	○口頸部は、外上方にのび、口縁端部は上下に突出する。 ○口端部に一条の沈線をめぐらす。	○体部はタタキ締めたのち縦方向にナデる。 ○内面同心円のタタキメ。	○青灰色で焼成良好。 ○墳丘裾部より出土。

91	土師器	杯	○体部は外湾している。 ○口縁部は「く」の字形に屈曲し、外反する。	○磨滅激しく詳細は観察不可。 ○口縁部ナデによる調整。	○赤褐色を呈する。 ○墳丘裾部より出土。
92	土師器	杯	○体部は外湾気味に口縁部へのびる。 ○口縁部は「く」の字形に屈曲し、外反する。	○口縁部・体部ナデによる調整。 ○底部ヘラケズリ。 ○内面に左上りの放射線状の暗文を施す。	○赤褐色を呈する。 ○墳丘裾部より出土。

SK1

土器番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
129	土師器	甕	○口縁部は「く」の字形に外反する。 ○口端面は窪みをもち、端部は丸味をおびて外方へ突出する。	○磨滅が激しく口縁部の調整不明。 ○胴部下半には粗い縦方向のハケメが施されている。 ○底部はナデかケズリによる調整が施されているようでハケメはみられない。	○赤褐色を呈する。

1号墳墓

土器番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
97	土師器	皿	○体部と底部の境は不明瞭。 ○口縁端部は短く上方へのび、断面楔形を呈する。	○ナデによる調整。	○淡赤灰色。 ○1mm以下の長石粒を含む。
98	須恵器	瓶子	○口縁部は外方へ折れ曲り、端部は短く直立する。	○回転ナデによる調整。	○灰黒色。
99	灰釉	長頸壺	○肩部から直立する頸部をもつ。	○回転ナデによる調整。	○緑灰色の釉（器地は灰白色）

その他の地点

土器番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
100	須恵器	杯蓋	○天井部は平坦で、天井部と口縁部は割と明瞭で、口縁端部は丸味をおびる。 ○かえりは若干口縁端部より下へ出る。	○天井部ヘラケズリ、他は回転ナデによる調整。	○淡灰色を呈し、天井部に自然釉がかかる。 ○X40・Y190より出土。
101	須恵器	杯蓋	○天井部中央に乳首形のつまみがつく。 ○天井部と口縁部の境は不明瞭。	○天井部、ヘラケズリ、他は回転ナデによる調整。	○青灰色。 ○X40・Y190より出土。
102	須恵器	杯蓋	○低く丸味をおびる天井部からやや外湾気味に口縁部へのびる。 ○かえりが口縁端部とほぼ同一レベルにある。	○天井部ヘラケズリ、天井部内面仕上げナデ、他は回転ナデによる調整。	○灰白色。 ○X40・Y190より出土。
103	須恵器	杯身	○受部は水平に外方へのび、たちあがりは短く内傾する。	○回転ナデによる調整。	○灰白色。 ○焼成不良。 ○X40・Y190より出土。
104	土師器	甕	○口縁部は緩やかなカーブをえがき、外反する。	○回転ナデによる調整。	○淡茶灰色。 ○砂粒を多く含む。 ○X40・Y190より出土。
105	白磁	碗	○体部、口縁部はまっすぐ外上方へのび、口縁端部は下外方に肥厚し稜をなす。	○水挽き成形。	○淡青白色の釉。 ○器地は淡灰色。 ○X20・Y190より出土。

106	褐 釉	水 注	○胴部は球形に近く最大径はほぼ中央にある。 ○頸部は短く内側にすぼまる。 ○胴部中央よりやや上に短い注口がつく。 ○口縁部は短く外反し、受け口状を呈する。 ○底部はあげ底状で、端面楔形を呈する。	○体部下半はヘラケズリ（右回り）。 ○他は回転ナデによる調整。	○体部上半緑灰色の釉、他は褐色の釉で内外面とも全面施釉。 ○器地は淡青灰色。 ○1号墳墓より北へ約4m北の地点より出土。 ○越州窯系か？
107	須恵器	長頸壺	○口頸部直線的に外上方へのびる。 ○口頸部1/3の位置に二条の沈線をめぐらす。	○回転ナデによる調整。 ○口頸部下半カキメによる調整。	○外表面暗灰色、内部セピア色。 ○X40・Y50（表土）より出土。
108	須恵器	瓶 子	○底部は平たく、体部は外湾して内へすぼまる。 ○頸部は細く、口縁部は外方へのびる。	○底部糸切り。 ○他は回転ナデによる調整。	○暗灰色。 ○焼成悪く、瓦質を呈する。 ○X20・Y90より出土。
109	灰 釉	瓶 子	○口縁部は外上方へのびて、大きく外方へ屈曲する。	○回転ナデによる調整。	○灰白色の釉がかかる。 ○X40・Y50より出土。
110	灰 釉	瓶 子	○外湾した丸味をおびた肩部をもつ。	○回転ナデによる調整。	○灰白色の釉。 ○109と同一個体か。 ○X40・Y50より出土。
111	灰 釉	瓶 子	○底部は平たく、端面は外方へせり出す。 ○底部と体部の境は窪みをもち、体部は外湾して外上方へのびる。	○底部糸切り。 ○他は回転ナデによる調整。	○明灰色の釉を基調に緑灰色の釉が斑状にかかる。 ○X40・Y50より出土。
112	土師器	杯	○断面楔形の高台がつく。 ○体部は口縁部は外湾気味に外上方へのびる。 ○口縁部は内方へ折れ込み丸味をおびる。	○体部下半、静止ヘラケズリ。 ○体部・口縁部横方向のヘラミガキ。 ○内面左上りの放射線状の暗文。	○赤褐色を呈し、胎土・焼成とも良好。 ○X40・Y50より出土。
113・114 120・121	土師器	皿	○底部と体部は明瞭な境をもって屈曲する。 ○体部・口縁部は外方へのびる。 ○口縁端部は丸味をおびるものと、楔形を呈するものがある。	○口縁部一段のナデ。 ○内部ナデ。 ○体部・底部未調整。	○淡赤褐色。 ○121のみX40・Y50より出土、他はX0・Y90より。
115～117 122～124	土師器	皿	○底部はあげ底気味である。 ○体部と底部の境は明瞭で、体部・口縁部は外上方へのびる。 ○口縁端部はつまみあげる。	○口縁部二段ナデ。 ○内面ナデ。 ○体部・底部未調整。	○淡赤褐色。 ○X0・Y90より出土。
118・119 125・126	土師器	皿	○底部は平たく、体部との境は明瞭。 ○口縁部は外上方へのびる。	○口縁部、内面ナデ。 ○底部未調整。	○淡赤褐色。 ○125のみX40・Y50より出土、他はX0・Y90より。
127	須恵器	播 鉢	○平底で体部と明瞭な稜をもって屈曲する。	○底部糸切り。 ○他は回転ナデによる調整。	○青灰色を呈す。 ○径1～2mm大の長石粒を含む。 ○E-1号墳・南東裾部より出土。
128	瓦 器	羽 釜	○平底で体部は内傾して立ち上る。 ○つばはやや上向き、端部は角張る。 ○口縁端部は内側にせりだし、端面の中央は少し窪む。	○粘土ヒモ巻き上げによる成形。 ○体部内面は丁寧な不定方向のナデ。 ○体部外面成形時の指頭痕のうえからナデ。 ○口縁部横ナデ。	○淡茶灰色。 ○胎土中に微砂を多く含む。 ○体部下半・底部にスス付着。 ○X20・Y90より出土。

弥生土器

土器番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
130	弥生	甕	○口縁部はほぼ垂直に立ちあがる。		○表面淡茶灰色で内部は灰黒色を呈す。 ○胎土径2～3mm大の砂粒を多く含む。 ○表面かなり磨滅。 ○X0・Y70表土内出土。 ○中期前半か。
131	弥生	壺	○口縁端部は外側下方に折れまがる。		○淡赤灰色。 ○胎土径2～3mm大の砂粒を多く含む。 ○表面かなり磨滅。 ○X20・Y50表土出土。 ○中期前半か。
132	弥生	甕	○ほぼ垂直に立ち上る体部から、大きく外へ開く口縁部を有する。	○口縁内外面ミガキによる調整か。	○淡赤灰色。 ○胎土径3～4mm大の砂粒を含む。 ○表面の磨滅激しい。6号墳封土内出土。 ○中期前半か。
133	弥生	壺	○口縁部は受け口状に若干内傾して短く立ちあがる。	○ナデによる調整か。	○淡石褐色。 ○胎土径2～3mm大の砂粒を含む。 ○表面磨滅激しい。2号墳封土内出土。 ○中期後半か。
134	弥生	壺	○口縁部はほぼ垂直に立ちあがり、端部は外方へ折れまがる。	○口縁部はナデによる調整。 ○体部内面はケズリ(板状のものでかきとり)	○淡赤灰色。 ○径2～3mm大の砂粒を多く含む。 ○2号墳封土内出土。 ○中期後半か。
135	弥生	壺	○底部の中央は窪む。	○外面縦方向のハケメによる調整。 ○内面左上りのハケメによる調整。	○淡赤灰色。 ○径2～3mm大の砂粒を含む。 ○6号墳封土内出土。 ○中期後半か(底部)。

Tab. 4 E-9 号墳出土鉄釘観察表

番号	全長 (mm)	体部断面 (mm)	遺存状態	頭部の形態	木目付着状態
1	85	9 × 7	先端部を欠く	一端を薄く圧延した後一方向に折り曲げて体部との境はくびれ込む	A 型
2	87	8 × 5	完 存	一端を薄く圧延した後一方向に折り曲げなくびれはない	A 型
3	79	7 × 6	先端部を欠く	一端を薄く圧延した後一方向に折り曲げなくびれはない	A 型
4	87	8 × 6	完 存	一端を薄く圧延した後一方向に折り曲げなくびれが若干残る	A 型
5	80	7 × 5	先端部を欠く	一端を薄く圧延した後一方向に折り曲げなくびれはない	A 型
6	88	7 × 6	完 存	一端を薄く圧延した後一方向に折り曲げなくびれはない	C 型
7	81	7 × 6	頭部を欠く	不 明	C 型
8	86	8 × 8	完 存	一端を薄く圧延した後一方向に折り曲げなくびれあり	A 型
9	81	7 × 5	完 存	一端を薄く圧延した後一方向に折り曲げている	B 型
10	77	8 × 7	先端部を欠く	くびれ有り	A 型
11	65	7 × 6	先端部を欠く	くびれ無し	B 型
12	34	9 × 6	下半部を欠く	くびれ有り	C 型
13	82	7 × 5	完 存	くびれ有り	B 型
14	80	7 × 6	完 存	くびれ無し	B 型
15	91	7 × 6	完 存	くびれ無し	A 型
16	69	7 × 7	先端部を欠く	くびれ無し	B 型
17	87	6 × 5	完 存	一端を一方向に折り曲げる	A 型
18	70	7 × 6	先端部を欠く	明確なくびれ有り	B 型
19	59	9 × 8	先端部を欠く	くびれ無し	B 型
20	87	8 × 6	完 存	明確なくびれ有り	A 型
21	77	8 × 1	完 存	くびれ無し	A 型
22	90	8 × 6	完 存	くびれ無し	A 型
23	62	7 × 6	両端部を欠く	不 明	A 型
24	87	6 × 7	完 存	くびれ有り	C 型
25	77	8 × 6	完 存	くびれ無し	A 型
26	73	6 × 5	完 存	くびれ有り	C 型
27	62	8 × 6	先端部を欠く	くびれ有り	A 型
28	72	8 × 6	完存、他の釘の先端部が付く	くびれ無し	A 型
29	87	6 × 6	完 存	不 明	C 型
30	77	6 × 7	先端部を欠く	少しくびれる	B 型
31	79	7 × 7	完 存	くびれ無し	B 型
32	77	6 × 6	完 存	少しくびれる	B 型

Tab. 5 金属製品観察表

番号	種類	全長 (mm)	断面径 (mm)	遺存状態および形態の特徴	出土古墳
33	刀子	128(刃70・柄58)	4 × 12	刃の先端部を欠くがほぼ完形、柄部分に木目遺存	E-7 号墳
34	刀子	119(刃72・柄47)	4 × 10	刃の先端部を欠くがほぼ完形、柄部分に木目遺存	E-10 号墳
35	鋌	25	3.5 × 3	完 存、頭部は7角形	E-2 号墳
36	金環	23 × 24	5.5 × 7	完 存	E-7 号墳
37	刀子	46		刃と柄の境部のみ遺存、柄部分に木目遺存	E-7 号墳
38	鋌	87.5	5 × 9	両端を折り曲げ、ほぼ完存。	E-1 号墳

Tab. 6 石器観察表

番号		現存長 (mm)	最大幅 (mm)	厚み (mm)	材 質	形態・調整の特徴	備 考
1	有舌 尖頭器	47	34	6.7	サヌカイト (五色台系)	○比較的小型で偏平な肩の張った左右対称形を呈する。 ○刃部は直線で薄い。 ○調整剥離は両面から3～4回施す。	○(X40、Y50)より出土。 ○先端部、舌部の一部欠損。 ○旧石器時代。
2	石 鏃	25.8	16	3.45	サヌカイト (二上山系)	○小型薄手の凹基式石鏃。 ○刃先部は鋭く尖る。 ○刃縁部は精巧な鋸歯状線。 ○調整は丁寧。 ○刃縁部の調整剥離は片面からのみ。	○C-3号墳南側裾部より出土。 ○縄文時代。
3	石 鏃	26.2	14.8	3.53	サヌカイト (二上山系)	○小型薄手。 ○左右不揃いの凹基式。 ○剥離調整は粗く、両面から。	○(X0、Y90)より出土。 ○先端部欠損。 ○縄文時代。
4	石 鏃	18.8	13	3.4	サヌカイト (二上山系)	○小型薄手の凹基式石鏃。 ○風化が激しく、調整は明確ではない。	○D-4号墳南側裾部より出土。 ○一部欠損。○縄文時代。
5	石 鏃	18.8	13	3.4	サヌカイト (二上山系)	○小型薄手の凹基式石鏃。 ○形がよく整った凹基式。 ○刃先部鋭く尖る。 ○刃縁部は非常に丁寧な調整。	○(X0、Y70)より出土。 ○縄文時代。
6	石 鏃	25.2	17.9	3.5	サヌカイト (二上山系)	○小型薄手。 ○凹基式でやや内湾した二等辺三角形。 ○薄い剥離を素材として、両面に剥離面を残す。 ○刃縁部のみ調整剥離。	○E-2号墳南側裾部より出土。 ○一部欠損。 ○縄文時代。
7	石 鏃	22.1	20.2	3.65	サヌカイト (二上山系)	○小型薄手。 ○左右不揃いの凹基式。 ○刃先部はほぼ直線的にのび、鋭く尖る。 ○風化がすすんでいる。	○(X0・Y90)より出土。 ○縄文時代。
8	石 鏃	37.4	18.2	6.4	サヌカイト	○小型肉厚の凸基式石鏃。 ○不揃いな整形。 ○調整剥離は粗い。	○E-9号墳南側裾部より出土。 ○刃先部欠損。 ○弥生時代。
9	石 槍	89.4	33.6	10	サヌカイト	○素材は縦長剥離で一方に湾曲する。 ○打痕は稜線状に残る(中央部にリングが走る)。 ○刃縁部は中央でふくらみをもち、ゆるやかに湾曲する。 ○刃縁部は4～5回の丁寧な調整剥離を施す。 ○基部は直線的に整形され、刃潰し剥離調整を施す。	○(X0・Y90)より出土。 ○基部部欠損 ○弥生時代。
10	石 斧	57.2	43.2	34	砂 岩	○磨製の蛤刃石斧になると思われる。 ○横断面は楕円形を呈し、鈍重なつくり。 ○全面に打痕が認められるが、両側面は比較的少ない。	○(X0・Y40)より出土。 ○刃部欠損 ○弥生時代。
11	砥 石	94.4	24.3	11.75	粘板岩 (愛宕山産)	○短冊形を呈する。 ○一端を切断し、もう一端を破損している。 ○裏面は剥離したままである。 ○表面と両側面には線状の使用痕が残る。	○E-2号墳南側裾部より出土。 ○端部欠損。 ○時期不明。
12	砥 石	88.8	61.1	21.2	砂 岩	○不整形な矩形を呈する。 ○両面と一方の側面は使用により摩滅し、線状の使用痕が残る。 ○表面に使用による帯状の窪み(幅4～5mm)が残る。 ○断面は偏平な台形を呈する。	○E-9号墳南側裾部より出土。 ○一部欠損。 ○時期不明。